

越谷市郷土研究会会報第十二号

古志加具谷

平成十五年八月刊



卷頭言



越谷市郷土研究会

会長 谷岡 隆夫

このたび会報「古志賀谷」十二号が刊行されました。投稿された方々の日頃の研究に感謝いたします。開発をうたい、あたらしいものへ目を向けていた時代から、古いものを振り返り、心の豊かさを求める傾向にあります。このような環境のなか、当会の会員は三〇〇人になりました。県の関連の一団体を除いて、県内の郷土史会で会員の数ではトップとなりました。新旧の差なく、会員のあたたかい和のこころと、役員の奉仕が支えになっております。

十四年度は行事の史跡めぐりの柱として、秩父観音のご開帳にあわせて札所めぐりを実施しました。突然の台風で実施日の変更にもかかわらず、予想外の大勢のご参加があり、バスを増発しました。

毎回の史跡めぐりにお元気な参加者と同行すると、こちらもパワーをいただけます。思い切って外に出ましよう。思わぬ体験があります。

活動を通じ、会員同士のコミュニケーションをはかりながら、一緒に歴史の面白さを楽しみ、明るい郷土づくりにいささかでもお役にたきたいと考えております。

皆様のご希望やご意見を取り入れながら今後も積極的に活動を続けます。旧に倍してのご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

◇◇◇ 目 次 ◇◇◇

卷頭言

谷岡 隆夫

荻島地区きき書き

郷土研究会 1

越谷の寺院の梵鐘と銘文

菅波 昌夫 9

武蔵国増林村の変遷

山本 泰秀 27

荻島地区の石仏

加藤 幸一 30

ちつとんべ

中島 満・三ツ木宗一・長谷川和子 49

間久里

酒井 達男 51

とうかんやの「わらでっぼう」

金岡由紀子 53

史跡めぐりの記録

郷土研究会 64



★会員アンケート	93
★役員アンケート	101
★史跡めぐり一覧	106
★展示品リスト	107
★研究発表会一覧	107
★会員名簿	108
★役員表	110
★会則	111
★会報掲載基準	112
★あとがき	113
★編集委員	113

表紙 金子 泰岑

荻島地区きき書き

越谷市郷土研究会

越谷市荻島地区は、東武線越谷駅より約三㎞西郊にあり、岩槻市と境を接する。土地に高低はなく、広い農地がひろがる。視界をさえぎる高い建物から遠く、東に筑波山、北には日光連山、西に富士山を望むことができる。

浄山寺・西教院の名刹があり、屋敷林にかこまれた農家が点在する緑ゆたかな土地である。

戦争末期、地区の北西部に総面積二百町歩の飛行場がつくられた。軍関係者のほか近在の人たちの勤労奉仕もくわわって、昭和十九年末に完成した。

小型機の前進基地らしい。地盤軟弱のため実用化には至らなかった。

戦後、飛行場跡地は農地に戻され、一部は越谷西高・しらこぼと水上公園などに転用されている。

教育施設には、私立大学一・県立高校一・養護学校一・小学校一がある。

平成七年、越谷西高野球部は、県予選を勝ちぬいて、市内の高校として甲子園に初出場した。

二回戦まで進出し、市民に勇気と希望をあたえた。市内から甲子園へ応援に参加した在校生・市民は、一、二回戦をとおして約五千人であった。

地区の大半で農業がおこなわれている。専業農家はすくなく、ほとんどが兼業農家である。いずれも後継者の不足が悩みであ

る。

余裕ある土地には、各種の公共施設がつくられている。

県営しらこぼと水上公園・同運動公園・同健康福祉村・特別養護老人ホーム・老人福祉センター・資源化センター・廃棄物最終処理場などがある。

新興住宅地はふえたものの、土地にはゆとりがまだある。今後の発展が期待される地区である。

荻島地区の皆さんがかたる。

以前からお住まいの方々にかしの話をしていただいた。

石井 知章氏 (野 島) 浄山寺住職

野村島隆信氏 (西新井) 西教院住職

内山 金次氏 (長 島) 地元旧家

松永房太郎氏 (西新井) " "

三ツ木忠司氏 (西新井) " "

小田 実 氏 (南荻島) " "

石山 進 氏 (南荻島) オブザーバー

司会 越谷市郷土研究会編集委員

戦後のようす

——あのころは食糧難でしたね

▼食糧難でした。強権発動というのがあってね。

米を出さない農家は強制手入れをやられたこともあった。

▼米で供出できないと、家探しまでやる。どこかに隠していな

いかと、大豆・麦も代替として出さねばならなかった。

高台のほうでは畑の麦でおさめた。生産した米は全部供出して、

逆に配給を受けていた。

▼農家でも米が食いたくて野菜入りのお粥を食べたりした。

いまは米が余っちゃって皮肉な話だよ。

——おなじ萩島でも三ツ木さんの地区と内山さんの地区では、

田と畠の比率は違うんじゃないですか。

▼うちのほうは田圃が主体。

▼うちのほうも畠は一割程度。

▼萩島村の出津はぜんぶ畠だった。

▼野うさぎ・きじもいっぱいいた。御猟場のそばで禁猟区域だ

から。ひばりも飛んでいた。

——くわい、れんこんは作っていたんですか。

▼戦時中は主食の米穀類を作っていた。

▼くわいは、いまのほうが多くなった。

湿田地帯がおおいですからね。

▼いまの健康福祉村は、大湿田地帯でしどかった。

つくもで足がむぐっちゃんだから。

▼あすこに蓮の実を拾いにいっておこられた。

▼はす田にはいっちゃうと子どもだから出るのがわかんなくな

っちゃうですよ。蓮の葉がでかいから。

なまず・どじょうもいたしね、

——肥料や地下足袋も配給制だったんですか。

▼一時はマツチもなかった。終戦後はね。たばこもなかった。

たばこの葉と紙をばらで配給された。家で巻いたんだから。

しらこぼとは減った

——しらこぼとは萩島にはおおかっただんでしょう。

▼うちは、裏に杉の山があって、そこに巣がいっぱいあった。

▼この三野宮のあたりは、しらこぼとがいっぱいいた。

終戦後、進駐軍が鉄砲で撃ちに来た。私らは犬のかわりに撃つ

た鳩を取りにゆく。「ヘイ・ボーイ」などといわれて。

鳩をもってきた者はサンドイッチをもらう。

子どものころ、よくやらされた。

▼チョコレートやガムもあった。

▼撃ったあとの薬莖もあったしね。

▼売るんですよ。真鍮ですからね。

二十個ぐらいで五円か十円だったなあ。

▼大雪になると、鳩は餌がなくなるから民家にやってくる。

ほんとうはいけないんですが、糸で操作して捕まえて食べた。

進駐軍はそのまま食べてました。

ロンドンに飛行場が建設された

——飛行場の建設はどうだったんですか。

▼昭和十九年ごろは工事をやっていたなあ。一機も飛ばなかったが。小学生のころ、あそこで草刈りをした。日当六円。

市内・都内の民間の車が運転手つきで動員されてきていた。

実際はあまり使われなかった。牛車もあった。

牛車持ち込みで一日二十円だった。

▼当時はトラックなど車の調子が悪かったから、牛車は輸送手段としてはよかった。

▼ぼくは昭和二十五年に小学校に入学したんですが、そのころは田圃になっていた。飛行場建設工事はみたことはない。

▼飛行場の建設で、土地の提供は浄山寺がいちばん多いんです。

▼一反七百円だから没収されたと同じですよ。

あの時は陸軍が強制的に実行したんですよ。

戦後の農地改革

——農地改革はどうでしたか。お寺さんもだいぶ。

▼うちなんか二十何町歩もとられた。茶店として貸してあった三軒の宅地まで改革の対象としてとられた。

▼農地改革の特例があった。宅地は解放しなくてもよかった。

しかし、特例の解釈の仕方宅地を解放した人と、しない人がいた。

▼戦中、屋敷でも供木といって、国から人がきて伐って持っていく。

▼お寺でも蠟燭立て・線香立て・唐金の灯籠・梵鐘など全部供

出させられた。錫杖も上だけ切って持っていき、上のないものが残っていた。三島から寄贈された石だけ残っていた。

唐金の小さな水子地藏が千体あったが、かますに入れて持っていかれ、いま寺には二体しか残っていない。

むかしの衣食住

——昔の生活や衣食住はどうでしたか。食べるのは不自由なかったですか。

▼小学校三年ごろまで、弁当にじゃがいもか、さつまいもが入っていました。

▼むかしは自給自足で、買って食べたりはしなかった。

魚はたまに売りにくるのを食べる程度。

荻島鍋というけんちん汁を五月の田植え時期に食べていた。

▼にわとりも、うちに飼っていたのをしめたりした。

▼うさぎも食べたことがあったね。ぶよぶよしてたね。

▼日の丸弁当で梅干しに沢庵三切というのがあった。

弁当を暖める暖飯機に入れると、沢庵のにおいがひろがり、女の子なんかは弁当を隠すようにして食べていた。

行事・習慣

——地区の行事や習慣は、どんなのがあるでしょうか。

▼獅子舞があった。

堤根と西新井地区ですね。

昭和五十年ごろやめたかなあ。うちのほうはまだやっていますよ。

▼年二回、春と夏、春は三月十五日・十六日の二日間。

夏は七月一日にやった。夏はみちぎりといって簡単だが、春は一軒々々廻ったので二日かかった。百軒も廻ったので。

▼七月はみちぎりといって一軒々々ではなく、南とか北でやっていた。

▼虫おいもやった。六月二日かなあ。

▼堤根会の神社から始まって、切橋までの間を廻ったんです。

▼虫おいは子どもたちは楽しみにしていた。

▼私たちが非農家のものは参加できなかった。

▼もぐらを叩く「とうかんや」は、子どもたちが作ってやってきた。

—— 虫おいと「とうかんや」は菟島地区では残ってますか。

▼いまは残ってないね。砂原ではじめたんじゃありませんか。

▼いまは麦わらがなくなっている。

▼子どもが少なくなっているので、子供会の組織がなくなってしまうんでしょね。

—— お正月の特別なご馳走はどうでしょうか。

▼やっていますよ。むかしは二月一日でした。一か月遅れで。

▼むかしは醤油汁に里芋ぐらいしか入っていませんでした。

▼こんぶも煮ていたなあ。豆もきんぴらも。

▼繭玉作りもあったなあ。初午の時にやったなあ。

お餅をつけるんです。

変わってきた結婚式

—— 結婚式で変わったことは。

▼婦人会で新生活運動というのをはじめた。公民館に花嫁道具を集め、貸し出しする方法でやっていたが、それもなくなった。家々で宴会をやる広間がなくなったこともある。

▼結婚式を自宅でやったのは長男坊で、昭和四五年ごろまで。それからは結婚式場になってね。

▼私は自宅で二日やった。嫁さんの家で一日、合わせて三日。

▼ずいぶん遅れていたなあ。

▼帰りに何か持たせるでしょう。嫁さんの家にリヤカーを引いて、帰るのを追いかけて何か貰ったりした。

▼うちの嫁さんは、これだけ持ってきたといっって、並べて周りの人に見せるんですよ。

▼実家はそれなりに準備しないと出せない。

▼見にいかないと悪いという気持ちもあって見にいって。

▼筆筒の中の着物まで出して見せたり。

▼だいたい、着物は一生着るだけのものを持ってきた。

▼実家は大変だった。

▼とくに名古屋あたりは大変らしいけど、むかしはこの辺でもそうだった。

—— そうなると家の格が問題になりますね。

▼ある程度釣り合っていないと駄目だね。

▼子どもができたなら、お雛さまを持っていくし、やはり釣り合っていないと嫁にやれない。

ちかごろの作物

——最近、作るもので変わったことはないですか。

▼米をちよっとやっているだけで、あとは若い者は勤めに行っているもんで。野菜などは自家用だけで販売用はやっていない。

▼むかしのほうがよかったかなっていう感じがするね農家は。

むかしは腰をすえて一生懸命やれば食べていかれた。

米だけでは農家は生活不如意だよ。

▼やっても米は安いしできないしね。

生産者米価を上げてくれればいいが。

▼農家は儲からないから後継者がいないんだよ。

後継者がいないのが悩みです。

▼田圃をやっているのは六十歳以上の年寄りだけで、若いのはやっていない。農大をでて勤めにでている。

寺社の経営

——神社のお祭りはいかがでした。

▼むかしはおひまちといってお餅をついて親戚に配ったものです。今は拜んで式をするだけだよ。

むかしはお神楽をやるとか、いろいろやっていたんだけど。

▼神社の経営も大変なんですよ。お寺と違って。

——五社稲荷はどうですか。

▼あそこは不動産を持っているから恵まれている。

▼うちのほうの神社は石神井神社という。百日咳にご利益があり、杓子を借りてお払いすると直るといふ。

一本借りて二本にして返すわけね。

かえされた杓子がお堂にいっぱいあるんです。

いまは医学が発達して杓子を借りにくる人いなくなっちゃった。

▼有名だったんで、おしゃもじさま、おしゃもじさまでね。

ずいぶん借りにきたもんだ。

——お寺はお寺の悩みがあるし……

▼解放でなになに一つ残さずもっていかれちゃったからね。

檀家に貸してあった三軒の茶店まで、身内を住まわせていたから、解放といつてとられた。

▼土地をもっていれば檀家は助かるですよ。

▼何かやるときには寄付はいらぬということ。

地域の教育

——むかしの教育の様子はどうですか。

▼父親の話では、荻島小学校は約五、六百人いて、先生は十四人ぐらいだったそうです。

▼学校教育は、むかしのほうがよかったと私は思うね。

いまは駄目だね。

▼私たち小学校の時は、帰ってきてから地域ごとに六年生から一年生まで暗くなるまで遊びましたよ。

六年生の人、大将になって、お前こうしろとルールがあったんですよ。先輩とか後輩とか、なんとなく植え付けられたね。

▼いまは遊ぶ暇がないんだよ。

▼子どもは遊んだほうがいい面もありますよ。

▼小学校のとき、茶話会というのがあった。

地域別に集会所でご飯を食べたり、六年生の先輩が指導する。小さいときからルールが身についていた。

▼一年生にはじめてあがるとき、自治会で一緒に行く生徒の仲間入りで、親はよろしくお願ひしますということで、六年生は注意してみてください。そういうよさもあったね。

荻島のいいところ

——荻島地区はこうありたいとありますか。

▼野島なんて所はむかしから三十軒しかなかった。

今は百何十軒でしょう。もともと住んでいる人は少なくなっているんですよ。荻島に残るいい風習は残してほしいですね。

▼荻島のいいところは、隣・近所の付き合いのいいところ。これは残しておきたい。

▼荻島はまとまりがいい。体育祭・盆踊りは年一回やるんです。村は小さいんだが、行事には観客が集まるんですよ。

よその村の代表の人がきておどろいて「荻島はまとまりがいいなあ」

▼暮れの年末助け合い運動で、助け合い対象者は、他の地区はかなりおもしろいですね。二、三年前までは荻島にも該当者がいたんですよ。去年・今年あたりは該当者がいなくなりましたよ。

うちのほうはそういう意味でもいい所なんです。

▼独り暮らしの老人が、他の地区より荻島は少ない。

家庭環境はいい所ですよ。

▼生活する環境によるかもしれないが、荻島の誇りとするところですよ。越谷市全体でも、模範的地域ですよ。同じ屋根の下に住んでいる。

それがいいとこなんで、暖かみがあるんです。

長時間にわたり有意義なお話を聞かせていただいて、有り難うございました。

(収録 平成十四年十月二三日 野島・浄山寺)



石山 進氏



石井 知章氏 内山 金次氏 小田 実氏 松永房太郎氏



野村島隆信氏 三ッ木忠司氏 石山 進氏



石井 知章氏



内山 金次氏



小田 実氏



松永房太郎氏



野村島隆信氏



三ッ木忠司氏

越谷に飛行場があったと云う事は聞いていました。

五年前、南荻島に引越えて来て、まわりが田畑ばかりで林

や高い樹もないのつべらぼうな所だナ―と思いましたが、

近くの畑の人に聞きましたら、それはそうだが此の辺は飛行場

の跡だから、こゝにも兵舎があった。

子供の頃、アメリカの兵隊がいたが戦後まもなく引上げて

行ってしまった。兵舎の中のものも毛布等もそのまゝだった。

兵舎の一部が残っている。滑走路のコンクリート等は砕いて

利用された。まだ少し滑走路の跡が残っているのではないかと

話してくれました。

その他、もう少し聞いて見たかったと思いましたが、知っている年代の人がいないと云う事でした。

六〇何年か過ぎた今では越谷のむかし話にもなるのでしようか。

(磯谷記)

越谷でみられる珍植物キタミソウは、年二回、十一月と三月に咲く。

市民会館裏の葛西用水ではじめてみた。

花は小さく、三ミリくらいで白い。

古利根川の群生地へも行った。

ここでも可憐なキタミソウを見分できたが、絶滅の危機があるらしい。

小さな花なので華やかさに欠け、市民になじみがないが、

台風などで群生地が削られないよう願っている。

(谷岡記)

越谷の寺院の梵鐘と銘文

菅波 昌夫

一、梵鐘とは

寺院で用いる、つりがねの名。

多くは鐘樓に吊り、撞木で時を知らせるために打ち鳴らす。

梵は神聖・清浄を意味し、仏教寺院での梵鐘の使用は、アジア各地にみられる。

梵鐘は、製作地によって三つに大別される。

日本の和鐘、朝鮮鐘、中国鐘である。

ここでは和鐘について説明する。

二、梵鐘の形と部分の名

(イ) 竜頭 最上部につく吊り手の部分。

(ロ) 笠形 竜頭につく天井部分。

(ハ) 鐘身 梵鐘の本体。(横方向を上帯・中帯・下帯。

縦方向を縦帯)

(ニ) 乳 上帯が接する所に乳の間があり、乳がある。

越谷の寺院の梵鐘は、縦帯四面、各带上部に各二個、計八個。

乳の間は四面、各面に五×五で二十五個。

合計一〇八個

(ホ) 池の間 乳の間の下で、銘文又は飛天像などを入れる。

(ヘ) 草の間 中帯と下帯の間の細長い部分。

獅子像、唐草彫などを入れる。

(ト) 駒の爪 鐘身の下端で、厚味を増す。

(チ) 撞座 鐘をつく所、二か所。

(鐘身高に対する、百分比は二三・四)

三、銘文

梵鐘には銘文があるのが普通である。

奈良時代の鐘では銘文のないものが多い。

平安時代になっても、その傾向が続く。

鎌倉時代以降、銘文をもつ。多くは池の間にある。

中には縦帯や草の間にあるものもある。

銘文の表記には、陽刻と陰刻の二通りがある。

【陽刻】 鑄型に逆字に銘文を彫りこみ、字を浮き上がらせる。

鑄造時しか記入できない。

【陰刻】 出来上がった梵鐘にタガネで彫りこむ。

鑄造後には何時でも記入できる。

追銘 最初あった銘文に追加して、彫りこむ。

または、もともとなかった梵鐘に、後世、何らかの理由で彫りこんだものも追銘という。

四、梵鐘の材料

銅と錫の合金即ち青銅で、少量の亜鉛を混ぜる場合がある。八六%対十三%対一%の割合である。

五、乳

仏教の一〇八の煩惱、八万四千の法門につうじる。

衆生の心身を煩わす一切の妄念、貪・慢・疑を根本とする。その種類は多い。

大晦日、除夜の鐘で撞かれる一〇八の鐘の音に、普段は信心気のない人でも哀愁を感じるの、やはり日本人であろうか。

六、江戸時代から現在の鐘へ

二五〇年余の泰平の江戸時代は、鐘一つ売れぬ日はなし、といわれたほど梵鐘の鑄造師が最も繁昌した時代であった。その総数三万口とも思われる。

今回、越谷市内の梵鐘を調べるにあたって、古い鐘のな
いことが解った。

越谷市内に限らず、全国の寺院も同じである。

先の大戦により、慶長以前（一六一四）までの鐘は四四〇口余りは供出を免れた。

元和元年（一六一五）以後の江戸時代の鐘は、何の記録も留めずに溶解炉に投げ込まれた。

越谷市内の梵鐘も供出され、同じ運命をたどったことで

あろう。市内十四の寺院の梵鐘について、ご住職の何人かにお話をうかがうことができた。

戦争で供出し、現在の鐘はどれも昭和三十年以後のものである。その新しさにいまさら驚くと共に、戦争の恐ろしさを感ぜられずにはいられない。

追記

各寺院の梵鐘の銘文を書き写すにあたり、梵鐘の吊されている位置が私の目の届く所なら判読もできましたが、位置が高く、脚立に昇った寺（浄山寺）とか、細かい字の寺などありました。

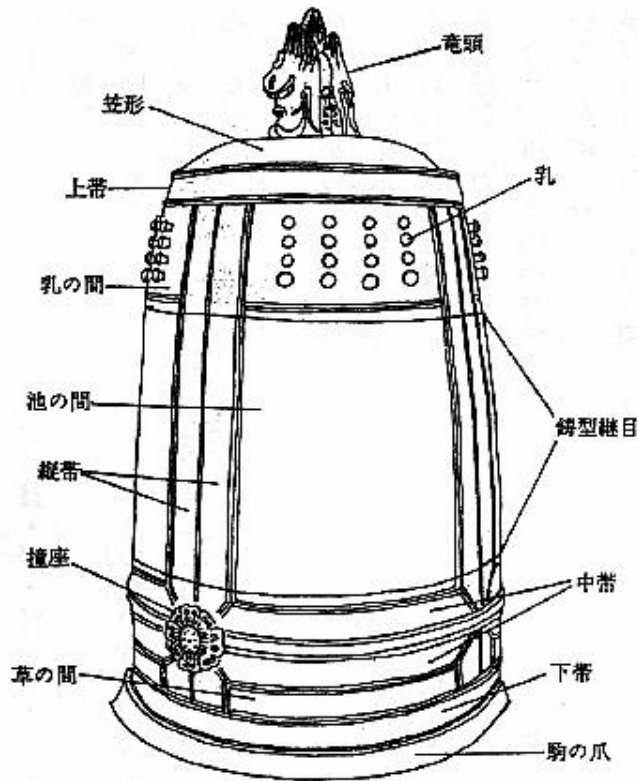
どの鐘も池の間にはおおくの字が書かれてあり、九九%は忠実に写すことができました。

行数は、清浄院では多少違ったかも知れませんが、他の寺院は正確です。

参考資料

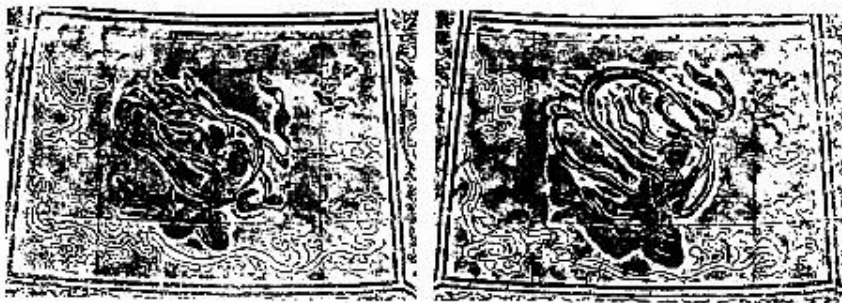
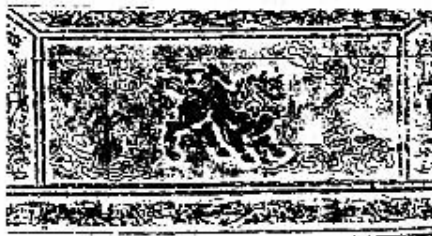
日本の梵鐘 坪井良平
日本の美術12 杉山 洋

梵鐘の形と部分名称



梵鐘の装飾

(上) 草の間の獅子 (下) 池の間の飛天



越谷の寺院の梵鐘

所在地	寺院名	宗派	今の鐘の鑄造年	供出鐘の鑄造年
1 蒲生	清蔵院	真言宗	昭和53・3	不明
2 登戸	報土院	浄土宗	昭和49・8	不明
3 川柳	成就院	真言宗	平成10・5	不明
4 大相模	大聖寺	真言宗	昭和60・11	明和3 (1766)
5 東越谷	東福寺	真言宗	昭和53・3	寛永3 (1626)
6 越ヶ谷	天嶽寺	浄土宗	昭和40・10	不明
7 大松	清浄院	浄土宗	昭和40・3	宝永7 (1710)
8 大泊	安国寺	浄土宗	昭和61・6	元禄年間 ¹ 688 ⁸ ~ 1703
9 増林	勝林寺	曹洞宗	昭和46・3	天明8 (1788)
10 増森	宝正院	真言宗	昭和59・3	文政年間 ¹ 818 ⁸ ~ 1829
11 野島	浄山寺	曹洞宗	昭和33・4	延享3 (1746)
12 大沢	照光院	真言宗	昭和43・4	不明
13 西新井	西教院	浄土宗	昭和54・10	不明
14 増林	林泉寺	浄土宗	昭和49・3	享保3 (1718)

新町の八幡様は防火神

この八幡様は火難を防いでくれる神様として厚く崇敬されている。

靈験一 昔、越谷宿に大火があった時、甲冑に身を包んだ八幡様が白馬に乗り、たてがみにさげた鈴を鳴らしつつ岡本家（境内地の寄進者）の岡田を駆けめぐり

「火事だ、起きろ」と叫び続けた。

家人は飛び起き、火の手が巡る前に無事逃げ延びたという。靈験一 昭和五十年代に当社に放火があった。神社に隣接して住むさる氏が不吉な予感を覚え、急ぎ外へ出て火の手を発見、消火して全焼を免れた。氏子間では「八幡様が火事を知らせた」と語り継がれている。

（水上記）

錦帯橋といえは世界にも知られている日本を代表する名橋です。

この錦帯橋を壽命にて改造した名工石龜作の玉垣がわが越ヶ谷久伊豆神社に残っています。

この石龜なる人物について詳しい方がおりましたらお知らせください。

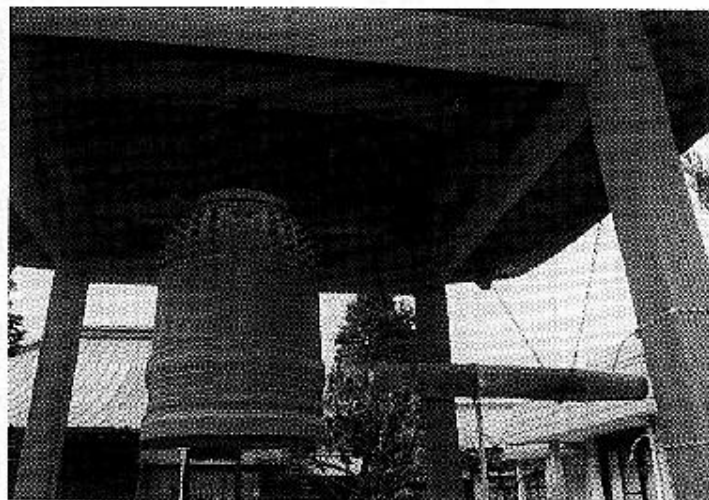
（高嶋記）

蒲生 清蔵院の梵鐘 - 銘文

●●●● ●●●● ●●●●	●●	●●●● ●●●● ●●●●	●●	●●●● ●●●● ●●●●	●●	●●●● ●●●● ●●●●	●●
昭和五十三年三月吉祥 当山三十六葉範二代	奉納檀中一同	茨城県真壁町 鋳物師三十六代 小田部庄右衛門	南無十一面観音菩薩	為先祖代々菩提 並子孫長久攸念	慈眠山清蔵院	銘文なし	慈眠之鐘
○			○				○
花		花		花		花	



清蔵院・鐘楼



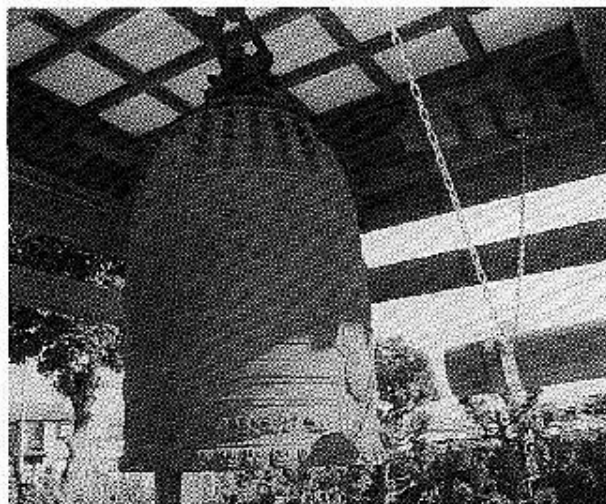
清蔵院・梵鐘

登戸 報土院の梵鐘 — 銘文

●●●●● ●●●●● ●●●●●	..	●●●●● ●●●●● ●●●●●	..	●●●●● ●●●●● ●●●●●	..	●●●●● ●●●●● ●●●●●	..
飛天像	三塗離苦生安養 一切衆生成正覺	飛天像	報身山報土院 ○	飛天像	願此鐘聲超法界 鉄圍幽闇悉皆聞	飛天像	南無阿弥陀仏 ○
獅子 花 獅子		獅子 花 獅子		獅子 花 獅子		獅子 花 獅子	



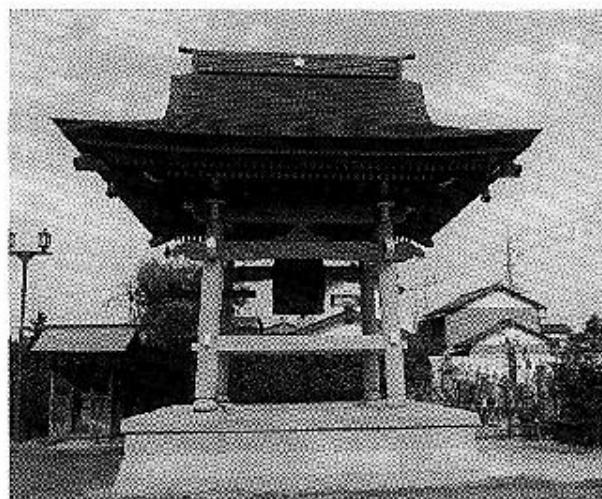
報土院・鐘楼



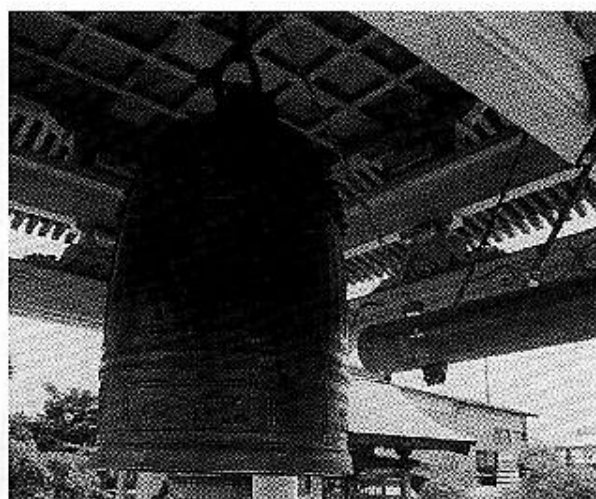
報土院・梵鐘

川柳 成就院の梵鐘 — 銘文

●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●	●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●	●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●	●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●
密教紹隆 万邦協和 威光倍増 山内安全 伽藍安穩 寺門興隆 檀信健勝 二世安樂 乃至法界 平等利益	南無興教大師	飛天像	南無遍照金剛	飛天像	南無大師遍照金剛	真言宗 智山派 威光山 成就院 第二十六世 照悟代 平成十年五月吉日	南無三界萬靈
竜		竜	○	竜	右老鑄高 工子匠岡 門次市	竜	○



成就院・鐘楼



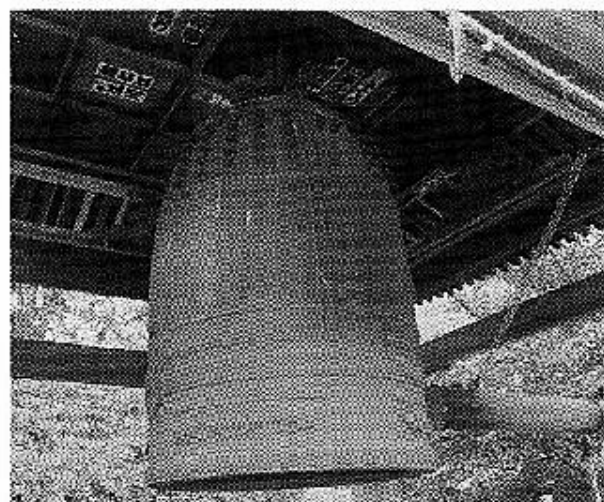
成就院・梵鐘

大相模 大聖寺の梵鐘 - 銘文

●●●● ●●●● ●●●●	●●	●●●● ●●●● ●●●●	●●	●●●● ●●●● ●●●●	●●	●●●● ●●●● ●●●●	●●
飛天像	南無大師遍照金剛	高祖弘法大師 孝阡百五拾年御遠忌記念 施主当山檀信徒一同 十方有縁之有志 真大山大聖寺 第四拾世弘進代 昭和六十年十一月吉日鑄造	南無諸天善神 ○	当山梵鐘は明和三年鑄造せしものがあつたが第二次世界大戦時に於て国家存亡の危機にあたり供出の止むなきに至るあたかも昭和五十九年高祖弘法大師御入定孝阡百五拾年御遠忌にあたり鐘樓堂建立を發願檀信徒及び十方有縁の有志相結集しここに完遂せしものなり 一打鐘聲 當願衆生 脱三界苦 得見菩提	三界萬靈	飛天像	南無大聖不動明王 ○
獅子 花 獅子		獅子 花 獅子		獅子 花 獅子		獅子 花 獅子	



大聖寺・鐘樓



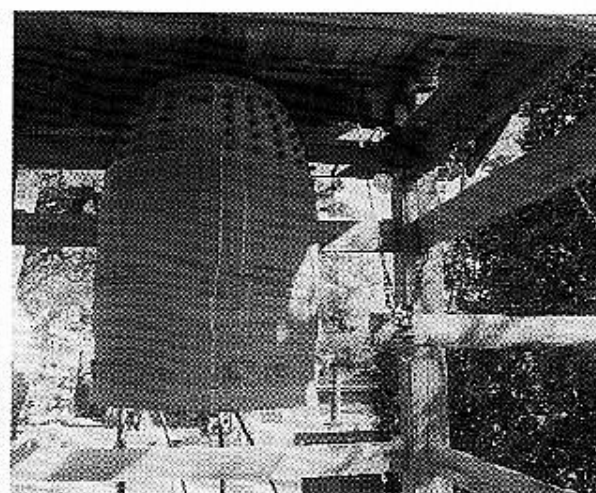
大聖寺・梵鐘

東越谷 東福寺の梵鐘 銘文

●●●●●● ●●●●●● ●●●●●●	●●	●●●●●● ●●●●●● ●●●●●●	●●	●●●●●● ●●●●●● ●●●●●●	●●	●●●●●● ●●●●●● ●●●●●●	●●
母 岳父越谷市越ヶ谷五丁目三ノ三 同 同 妻 越谷市東小林二一四ノ一 父 市川市国府台四丁目七ノ十一 母 同 大居明子 大居喜平 好江 吉野謙三 喜代 合掌	南無薬師如来(蓮華) 為広照院峰彦康道居士菩提也 俗名大居康彦 行年四十二才 功德主	世界平和 萬民豊楽 伽藍安穩 仏法興隆 檀信門徒 二世安楽 当病平癒 身心安楽 交通安全 心中所願 決定成就 乃至法界平等利益 真純敬白	○	虚空院東福寺鐘音和響 小林山岑 正覚大音響流十方	南無不動明王(蓮華)	昭和三十二年戊午三月吉日 小林山 虚空院東福寺 第二十四世 佐々木真純代	○
獅子 花 獅子		獅子 花 獅子		獅子 花 獅子		獅子 花 獅子	



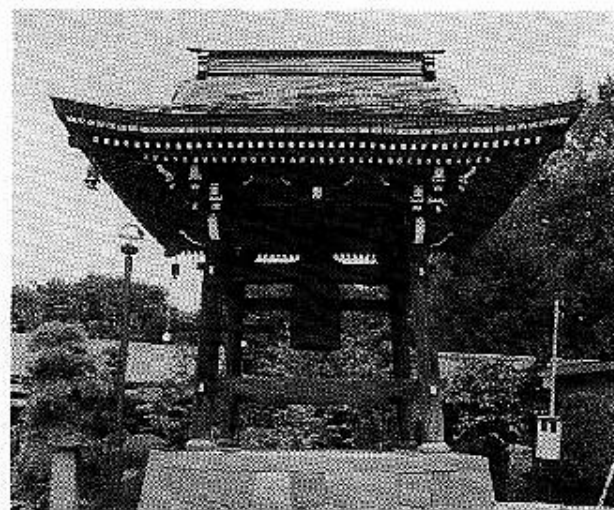
東福寺・鐘楼



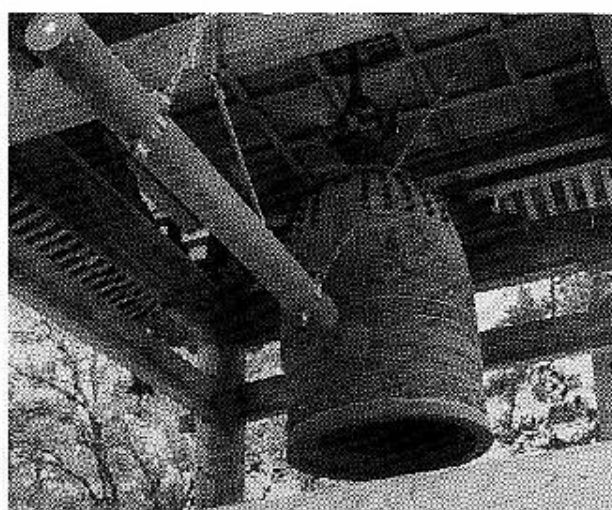
東福寺・梵鐘

越ヶ谷 天嶽寺の梵鐘 一 銘文

●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●	●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●	●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●	●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●
飛天像	天嶽寺本堂庫裡 改築記念	越谷市越ヶ谷観音横町 寄進 吉野謙三	南無阿弥陀佛 源空 仏子 (蓮華) ○	至登山 遍照院 天嶽寺 三世 專譽一成 昭和四十年十月吉日	滋賀県愛知郡湖東町 鑄匠 黄地佐平謹鑄	飛天像	南無阿弥陀佛(蓮華) ○
源興寺常譽円満由光居士 宏稔寺正譽由室春光大姉 寛晃院源譽清顔智光居士 常含院観譽浄迎恵光大姉	昭和三十五年七月三十日 由次郎 昭和二十五年七月十二日 はる 昭和十三年六月八日 豊治 昭和十八年五月二十六日 恵	獅子	獅子	獅子	獅子	獅子	獅子



天嶽寺・鐘楼



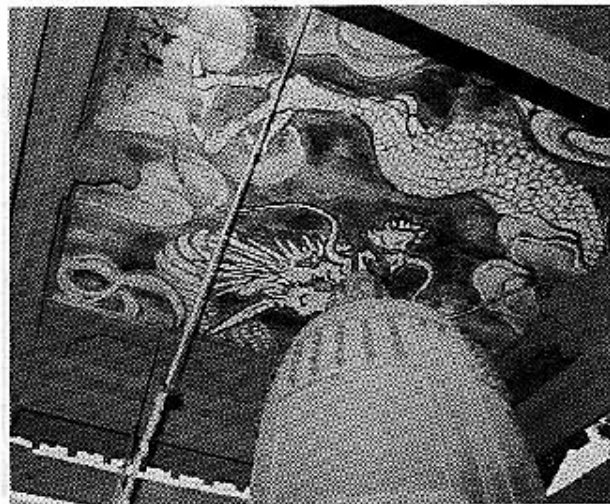
天嶽寺・梵鐘

大松 清浄院の梵鐘 — 銘文

●●●●●● ●●●●●● ●●●●●●	●●	●●●●●● ●●●●●● ●●●●●●	●●	●●●●●● ●●●●●● ●●●●●●	●●	●●●●●● ●●●●●● ●●●●●●	●●
寄進者の名前は判読できず	銘文なし	天女像	南無阿弥陀佛	天女像	銘文なし	正覚大言響流十方 清浄院並末寺歴代諸上人 龍徳光院神運社正僧正 通誉上人如意阿良雄大和尚 佛連社光誉上人大巖善隆老和尚 開基及総檀家中各家先祖代々追善菩提 莊嚴浄土 当清浄院の梵鐘は古利根川のはとり開基以来大音韻々 と響きしも昭和十九年大東亜戦争急を告ぐるの時応召 し爾来星霜二十有余年檀徒一同舊に復せん悲願茲に結 ぶ 南無阿弥陀仏 維時昭和四十年巳酉佛歡喜日 栄廣山清浄院第廿八世 芳響嘉雄誌	南無阿弥陀佛
花		花	○	花		花	○



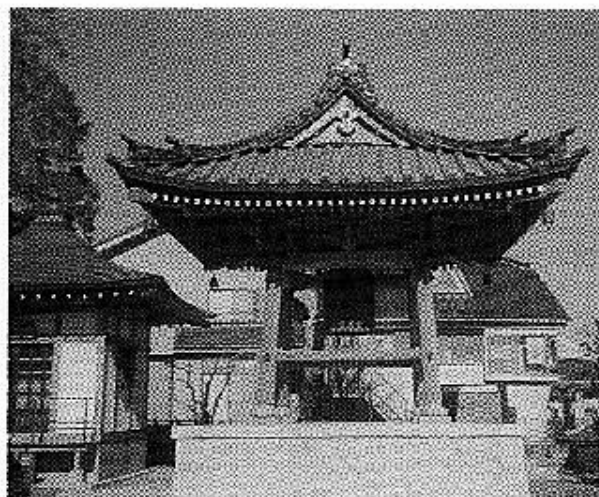
清浄院・鐘楼



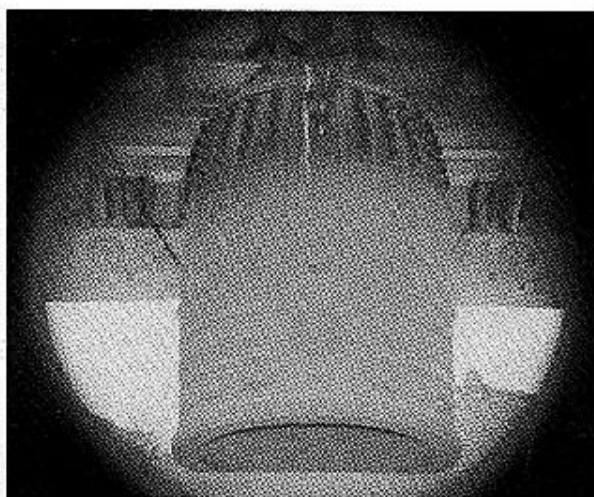
清浄院・梵鐘

大泊 安國寺の梵鐘 — 銘文

●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●	●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●	●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●	●●●●● ●●●●● ●●●●●	●●
<p>大龍山安國寺には符って第十二世詮上人代の元禄年間の鑄造になる梵鐘あり「くれむつの鐘」として親しまれ来たりしが先の太平洋戦争に際し昭和十七年十一月二十五日献納せしめられたり爾来四拾有余歳を経本堂再建を機に第卅二世法譽龍弘発願し信心厚き檀信徒の寄進により茲に新たに梵鐘を謹製し永く鐘聲法界を超え三途離苦生安養一切衆生成正覺を祈願せんとするものなり</p>	<p>三界萬靈（蓮華）</p>	<p>飛天像</p>	<p>南無阿弥陀佛</p>	<p>飛天像</p>	<p>本尊阿弥陀如来（蓮華）</p>	<p>願主 宣蓮社法譽乘阿在心溪洞龍弘大和尚 越谷市大泊大龍山東光院安國寺第卅二世 町田龍弘 寄進 檀信徒一同 維時昭和六十一年六月吉日 製作者光秀堂謹製</p>	<p>銘文なし</p>
獅子 花 獅子		獅子 花 獅子	○	獅子 花 獅子		獅子 花 獅子	○



安国寺・鐘楼



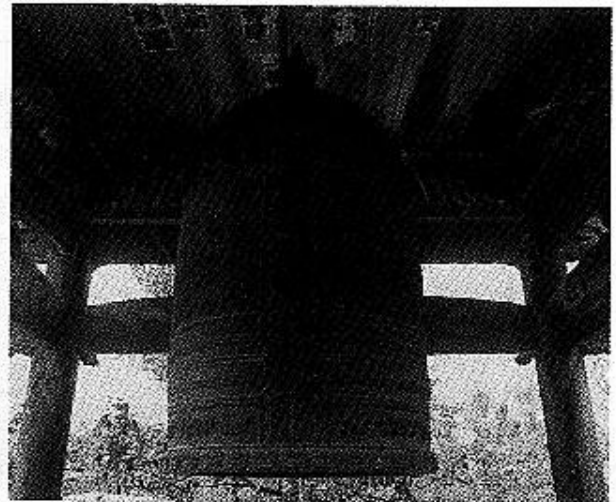
安国寺・梵鐘

増林 勝林寺の梵鐘 一 銘文

●●●●● ●●●●●	●●	●●●●● ●●●●●	●●	●●●●● ●●●●●	●●	●●●●● ●●●●●	●●
其形陋しといふとも 此心を発せば已に 一切衆生の導師なり 衆生の慈父なり	菩提心 南無高祖承陽大師	飛天像	南無釋迦牟尼佛	飛天像	南無太祖常濟大師	建設委員長 栗原 英蔵 會計 石井利喜治 委員 石井 巖 岡安 正 竹之内芳雄 石井 寿信 増田 重康 須賀 栄蔵 平野惣之助 石井 三郎 関根富三郎 中山儀右衛門 須賀久次郎 小川 俊一 関根 正男 石川 和好 栗田 勇治 山口 かん 名倉 豊蔵 平野 忠臣 尾川弥之助 名倉 太郎 須賀 堅 山崎 武夫 戸張留次郎	昭和四十六年三月 二十四世 雪秀代
獅子 花 獅子		獅子 花 獅子	○	獅子 花 獅子		獅子 花 獅子	○



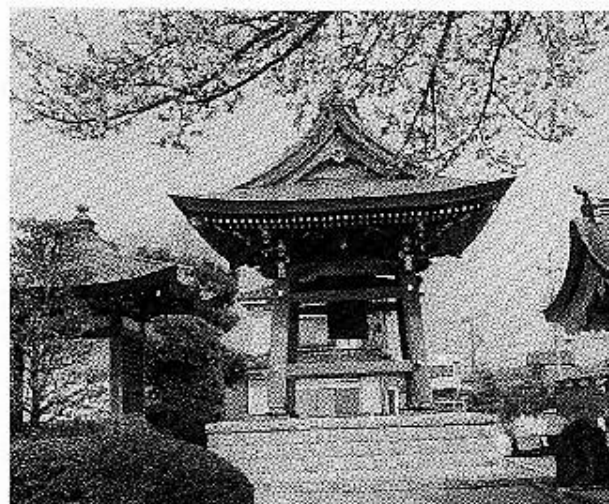
勝林寺・鐘楼



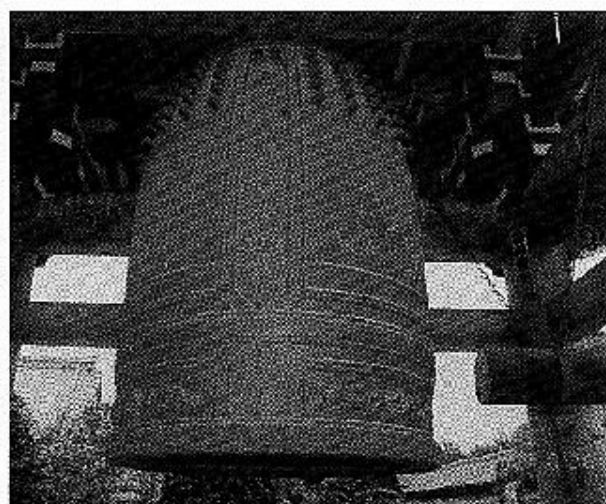
勝林寺・梵鐘

増森 宝正院の梵鐘 — 銘文

●●●●● ●●●●●	..	●●●●● ●●●●●	..	●●●●● ●●●●●	..	●●●●● ●●●●●	..
飛天像	三界萬靈(蓮華)	願主 清龍山宝正院 第二十八世庸進代 施主檀徒一同	弘法大師千百五十年御遠忌記念 ○	當山は文政年間十七世住職法印覺寿僧正により鐘樓堂を建立されしが大東亜戦争時徴用を余儀なくされたこの度弘法大師千百五拾年御遠忌にあたり大師への報恩謝徳の誠を表すべく檀徒一同相語り浄財を得ここに梵鐘及び鐘樓堂を建立す悲願達成佛恩感謝し奉る	本尊大日如来(蓮華)	飛天像	南無遍照金剛(蓮華) ○
獅子 花 獅子		獅子 花 獅子		獅子 花 獅子		獅子 花 獅子	



宝正院・鐘樓



宝正院・梵鐘

野島 浄山寺の梵鐘 — 銘文

●●●●●● ●●●●●●	●●	●●●●●● ●●●●●●	●●	●●●●●● ●●●●●●	●●	●●●●●● ●●●●●●	●●
(寄進者の名前と金額は判読できません)	東京浅草翠雲堂納 鑄物師西沢吉太郎	住職 石井 敬徳 総代 田口 菊次郎 世話人 高野 高三郎 野口 慶輔 森田 一郎 忠作 森田 信一郎 中島 安左衛門 田口 右衛門 寛 川島 有為 坂巻 保太郎 川島 新一 藤吉 一郎	南無延命地藏菩薩 ○	延享三年鑄造ノ梵鐘ハ大東軍戦ノ熾烈ニ伴イ昭和十八年一月十日 二十四世青雲徳峰代供出ヲ余儀ナクセシメラレ爾来十有五年ヲ経 タリ今回開闢千百年開扉ヲ記念シ祖信徒並ニ特志者ノ寄進ニヨリ 當山ニ備置ス冀クハ梵音長ヘニ頭幽ノ夢ヲ覺シ無吉ノ説法功德無 辺ナランコトヲ	昭和三十三年四月二十四日	(細い字が全体に書かれ判読できません)	埼玉県南埼玉郡越谷町大字野島 曹洞宗野島浄山寺二十五世智明敬徳代 ○
獅子 花 獅子		獅子 花 獅子		獅子 花 獅子		獅子 花 獅子	



浄山寺・鐘楼



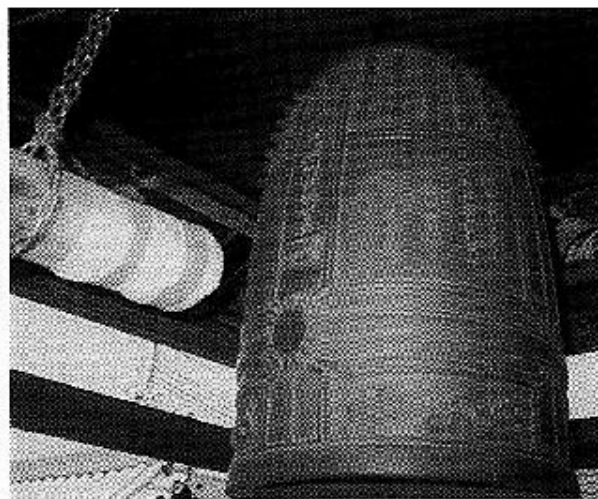
浄山寺・梵鐘

大沢 照光院の梵鐘 一 銘文

●●●●● ●●●●● ●●●●●	..	●●●●● ●●●●● ●●●●●	..	●●●●● ●●●●● ●●●●●	..	●●●●● ●●●●● ●●●●●	..
昭和四十三年四月吉日 寄進先祖代々供養為 東京吾妻橋 正木総本店 四代 施主 平野正吉 妻 いつ	銘文なし	銘文なし	銘文なし	銘文なし	銘文なし	照光院 二十七世住職 蛭田龍秀	本尊阿弥陀如来
○		○		○		○	
獅子花獅子		獅子花獅子		獅子花獅子		獅子花獅子	



照光院・鐘楼



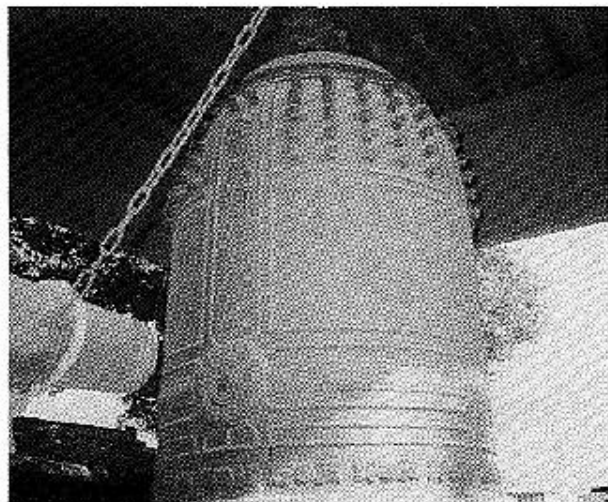
照光院・梵鐘

西新井 西教院の梵鐘 一 銘文

●●●● ●●●● ●●●●	●●	●●●● ●●●● ●●●●	●●	●●●● ●●●● ●●●●	●●	●●●● ●●●● ●●●●	●●
願わくば 此の功德をもって 平等一切に施し 同じく 菩提心をおこして 安楽国に 往生せん	銘文なし	銘文なし	日照山西教院 ○	昭和五十四年十月吉日 第三十世野村島信弘 茨城県真壁町 鋳物師三十六代小田部庄右衛門	銘文なし	当山の梵鐘は大東亜戦争のため昭和十八年に供出し 鐘の音を聞くことなく三十数年この度役員一同の発議 により檀信徒の総意と熱意が実りここに梵鐘の再鋳成 なり立派にその完成を見ることができました 檀信徒一同	南無阿彌陀佛 ○
花	花	花		花	花	花	



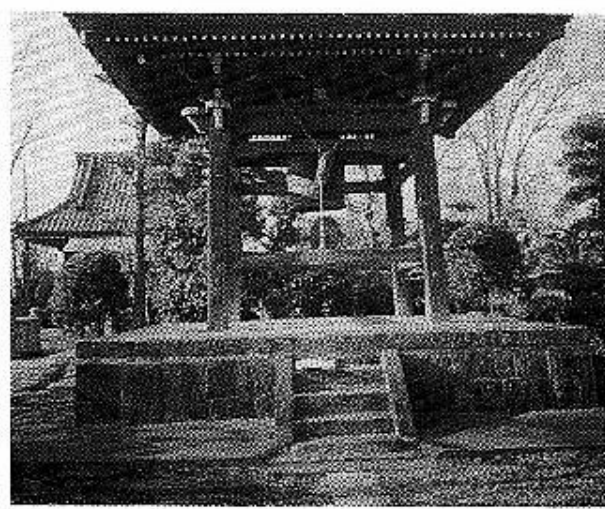
西教院・鐘楼



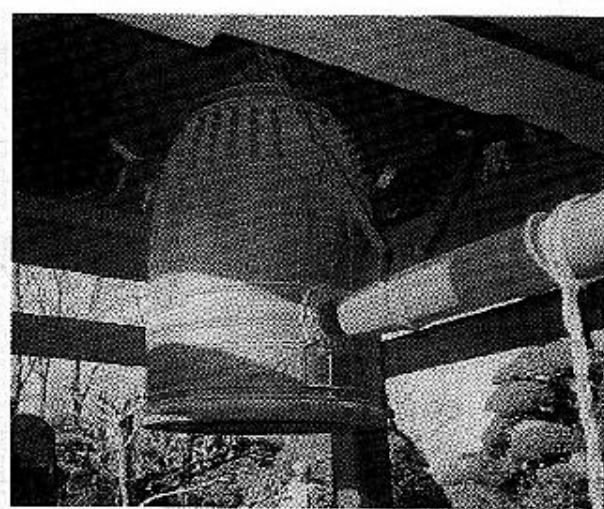
西教院・梵鐘

増林 林泉寺の梵鐘 一 銘文

●●●●●●	●●	●●●●●●	●●	●●●●●●	●●	●●●●●●	●●
奇進者の名前は判読できず	越谷市増林 林泉寺	寄進者の名前は判読できず	南無阿弥陀佛	天下和順 日月清明 宣年三月八日 林泉寺第卅一世 定善良範敬白	梵鐘再興由来記 抑々當山累世の梵鐘は、享保三年江戸神田の鋳匠木幡内匠の手に依って成れるもの、鐘声殷々として十方に響き、聞く者歡喜し勝益を蒙らざるはなし。 然るに大東亜戦争熾烈を極めたる昭和十八年一月廿一日、国家の要請に應え、総代並世話人有志の参会を得て、壮行の典儀を行ない、最後の掲ぎ納めを行う。 爾來卅有余年、「梵鐘に月は上がれど、鐘空し。」 今や国家は百年の平和を謳歌するに至れり。檀中総結集し、洪鐘の再興を図り、高く懸げんとす。 伏して請う、十方の三宝護法の諸大、照鑑を垂れて哀愍護念し給わんことを。 昭和四十九年 甲	宣年三月八日 林泉寺第卅一世 定善良範敬白	南無阿弥陀佛
飛天	飛天	飛天	飛天	飛天	飛天	飛天	飛天



林泉寺・鐘楼



林泉寺・梵鐘

武蔵国増林村の変遷

山本 五来 天乃

1. 「勝林寺由緒記」等による勝林寺開山に至る歴史

増林（ましばやし）の勝林寺の歴史をたどると、万寿二年（一〇二五）三月十日、源勝によって天台宗として聖観音を安置して開山された。後の世になって、寺は無人となり荒廃したが、天文元年（一五三二）に黙堂闇契（ぎんかい）によって再興され禅宗に改宗し、今日に至っている。

岩槻市にある福蔵寺（ふくごんじ）の九世の弧心月が書き改めた福蔵寺由緒記によると、黙堂闇契は、岩槻渋江氏の長男として生まれ、大永年間（一五二一〜二八）頃に菖蒲町にある三箇村（さんがむら）の長龍寺で得度したといわれる。黙堂闇契はやがて長龍寺三世となり、後に岩槻の福蔵寺を開山。その一年後に増林の勝林寺をも開山したのである。

禅宗としての勝林寺開山について、増森の大工七兵衛なる人物が書き記した「寛文十三癸丑年（一六七三）二月吉祥覚（おぼえ）」によると、天文元年（一五三二）九月、黙堂闇契の弟子天松玄固が、岩槻城に祀ってあった十一面観音を譲り受け、播州の仏師により修復させ、勝林寺に安置した。

また涅槃像一幅は妻子の為に修造したという。なお、開山した黙堂闇契は、天文七年四月十二日の酉の刻に六十才で示寂、二世の天松玄固は天文二十三年五月八日に示寂（年齢は不明）している。

2. 下総国に属した増林

当地、増林が古き時代は下総国であった史実は勝林寺由緒記にも見える。「下総国葛飾郡百間郷下河辺山中里」と出ている。山中（やまなか）とは、県道東京平方線の道路から勝林寺山門の方に向かって右側の地域を指す。左側の地域は宿組（しゅくぐみ）、現在の中組である。山中と宿組の名残は、今も六道帳（葬式の際の記録帳）にみられ、勝林寺の過去帳にも記されている。当地の始まりとして、寺の起りとのかわりで話される「山中三軒、宿六軒」の言い伝えが今でも残っている。いつの頃からかは定かではないが、源勝の寺の開山の頃からずっといわれ続けてきたのであろう。

次に金沢文庫文書の嘉元三年（一三〇五）の記述をみると、金沢（現、横浜市金沢）の称名寺は瀬戸橋造営の為に下総国下河辺庄新方などの所領に棟別錢を課している。ここに出てくる新方とは、古隅田川、元荒川、古利根川に囲まれた地域で、現在の岩槻市、春日部市、越谷市のそれぞれの一部をさ

す。当然、増林も新方に含まれている。当時増林はまだ下総国に属していたのである。

3・増林が下総国から武蔵国に編入された時期について

中世史に造詣の深い岩井茂氏の著書『道灌と岩付太田氏の動静』の中の序文中程をそのまま引用すると次のとおり。

「中世新方庄と称された地域（岩槻市川通地区、越谷市増林地区、新方地区、桜井地区、大沢地区、袋山を除く大袋地区、及び春日部市武里地区、豊春地区の古隅田川以南旧粕壁町全域）は、応永以後の室町時代中期武蔵国に編入され、次に旧庄内古河以西の地域で葛飾郡部が正保三年以前、江戸時代初頭に武蔵に編入された」

しかし、私は増林が下総から武蔵に編入された年代は、もっと後世ではないかと個人的に思っている。そして武蔵への編入は、「武蔵田園簿」又は「正保田園簿」完成年代と係わりが深いと考えて次のように推論した。正保三年（一六四六）二月、大目付井上政重と目付宮城和甫が総裁となり、川越城主松平信綱、忍城主阿部忠秋、小田切昌快、兩宮正種、遠山為庸らで慶安元年（一六四八）十二月二十五日、武蔵、上総兩國を巡検して国図を作成するように命ぜられ、翌二年五月十五日に出発した。又、埼玉年略では、慶安二年十二月、幕

府は武蔵、下総に命じて地図を調整させ、先に正保年間に命じたので正保武蔵国図という。

「武蔵田園簿」に記載され、幕領三万一千石余を支配していた代官高室昌成が慶安三年に病死していること等を総合して考えると、「武蔵田園簿」が作成された時期は慶安二年から三年にかけてであると思われる。

さらに増林の勝林寺所有の菖蒲の長龍寺の住職が慶安二年（一六四九）七月二日に書いた古文書（増林の勝林寺所有）の中に「下総国増林村」との記述がある。

慶安二年の「下総国増林村」との記述が正確である限り、以上の観点から、増林が武蔵国に編入した年代については、慶安二年（一六四九）七月二日以降ではないかと私は考えた。この勝林寺所蔵の古文書は増林の武蔵国編入時期を説明する上での貴重な資料であることは間違いないのである。

4・「郡村史」の記述にみられる明治以降の増林の変遷

本村は、古来新方領に属する。天正十八年庚寅（一五九〇）、徳川氏の有に帰し、後、代官の支配にして維新の初め、武蔵県に隸し、明治二年己巳（一八六九）正月、大宮県となり、既にして浦和県と改称し、四年辛未（一八七二）十一月、埼玉県の管とする所となる。

勝林寺所有の慶安二年の古文書

慶安二年（一六四九）作成のこの古文書には「下総国増林村」の文字が見られる。増林がいつ頃から下総国から武蔵国に編入されたかを解く鍵となる貴重な古文書と思われる。

一 武州崎玉郡菖蒲領三ヶ村慈高山長龍寺

由緒之事。

一 後土御門院御宇、応仁元己亥年中、大洞和尚開闢之地也。

從大洞和尚至拙僧迄十一代、歴数百七十余也。

往古者、最乗寺本住、骨島長泉寺与半回異

論之有由来古道場也。

一 権現様御入国之砌、伊奈備前守殿、御指置御座

候。

一 境内**縦**百廿間、**横**百間、客殿九間半、**横**六間、**小庫理**六間半、**大庫裡**七間半、**衆寮**七間、**山門・総門**有之者也。

一 當寺從開闢以來、末寺、岩付領福嚴寺法幢之地

也。下総国増林村勝林寺法幢之地也。上大崎長珠庵、

同下大崎善龍寺、三ヶ村明珠庵、辻村永勝庵、

飛柏崎円福寺、以上七ヶ寺、從先規長龍寺之末寺二

御座候。

右之條々於違背者、拙僧共宗門之御法度二可被

仰付候。為後日之、仍如件。

慶安二己丑年七月二日

長龍寺 尊□判（尊貴判カ）

寺社

御奉行所

證拠人

幸福寺 判

正法院 判

※「大洞」は、長泉寺、永福寺、長龍寺を開山した。

※「最乗寺」は、相模国足柄郡にある由緒高い寺院。

※「骨島」は、児玉郡高柳村にある字名。

※「飛」は、飛び地のこと。

荻島地区の石仏

加藤 幸一

荻島地区にあった江戸時代の旧村、野島村・小曾川村・砂原村・荻島村・後谷村・西新井村・長島村の七箇村のそれぞれ石仏についての調査結果の概要を紹介する。

詳細に記録した資料は、西方の大聖寺（大相模のお不動様）内にある資料室（見学無料）及び越谷市立図書館に保管されている。

旧野島村

(1) 浄山寺

浄山寺は、野島の地藏尊として有名で、片目地藏伝説や巨大な鰐口などがある。

浄山寺の山門には、大きな地藏菩薩像が二基立っている（図1と2）。また、境内には普門品供養塔（図3）として、観音経を唱えた記念に造立した石塔がある。

(2) 久伊豆神社

久伊豆神社は、主に元荒川と綾瀬川に挟まれた地域にみられる神社である。

野島の久伊豆神社は野島村の鎮守である。ここに庚申塔がみられる（図5）。腕が六本もある庚申様と鬼や見猿・

間か猿・言わ猿の三猿や雌雄の鶏が刻まれている。

(3) 野口家「野島一八〇」路傍

図6は馬を供養した馬頭観音の石塔である。

旧小曾川村

(1) 久伊豆神社

小曾川村の鎮守である。ここに武州御嶽山（東京西部）に関する山岳信仰の石塔（図2）がある。関東一円で盛んに信仰されていた。

(2) 久伊豆神社そば慈眼寺跡地

ここに青面金剛を刻んだ立派な庚申塔が四基ほどある。

その内の図7と図9は同時期に造立され、同じ図柄である。

(3) 田口家「小曾川三三〇」路傍

図11は六十六部回國塔である。側面に刻まれた文によると、小曾川村に住む斎藤徳右衛門が宝暦十二年（一七六二）に日本国内の六十六箇国にある神社仏閣を回り始め、書写した六十六部の法華経をそれぞれに納めたという。その記念に造立されたものである。

(4) 中島家「小曾川二六六」そば共同墓地

図12は、石仏愛好家の間から「烏八日」と呼ばれる墓石である。墓石の上部に「烏」「八」「日」の三つの文字を組み合わせた印が刻まれている。野島の浄山寺など曹洞宗

寺院に見られる。この「鶴」の印は、屍を林の中に捨て、鳥に鶴（ついで）ませて空に帰るとの意味で用いたのかも
しれない。

(5) 中島家「小曾川二三三一一」路傍

図13は、地元で「山王様」と呼ばれている庚申塔である。下部に刻まれた猿は、山王日枝神社のお使いとされてる。

(6) 藤井家「小曾川四二二」そば墓地

図15は、秩父の三十四箇所観音霊場巡りの、小曾川村の講中が造立したものである。

旧砂原村

(1) 元荒川土手道

図1は、宝暦三年（一七五三）造立の、腕が六本あって頭に馬がついた馬頭観音像が刻まれ、農耕馬に関する信仰上の石仏である。

(2) 松沢家「砂原八五〇一二」そば路傍

図2は、右慈恩寺道、左岩槻道と道しるべが刻まれた庚申塔である。松沢家南側にある排水路のある道路は、県道越谷岩槻線ができる前からあった古道である。この庚申塔は昔は砂原八四九の竹内家反対側の古道の路傍にあった。

(3) 平野家「砂原七七五」路傍

図4は、青面金剛像を刻んだ庚申塔である。

(4) 久伊豆神社

砂原村の鎮守である。ここにも越ヶ谷、間久里、粕壁の道しるべが刻まれた庚申塔（図5）がある。この庚申塔は神道系で、青面金剛ではなく猿田彦を祭っている。

(5) 聖動院跡墓地

図11は、宝篋印陀羅尼のお経の梵字文がびっしりと刻まれた石塔である。

(6) 角堂坊墓地

六人の地藏菩薩が刻まれていた石仏（図12）がある。

旧荻島村

現在この地域は「南荻島」と「南」を付けて呼んでいる。江戸時代は荻島村と呼んでいた。明治十二年（一八七九）に行われた郡制にあたり、郡内に同一の村名がある場合はその区別がつかず紛らわしいということから、それぞれ郡内（南埼玉郡）の北にある荻島村は「北荻島村」に、南にある荻島村は「南荻島村」と名付けられた。そして以後こう呼ばれるようになったのである。

(1) 会田家「南荻島八六」個人墓地

図1は、光明真言の呪文が上部に梵字で円形に並んで刻まれている石塔である。

(2) 会田家「南荻島八七」路傍

図2は、「庚申塔」と文字で刻まれた庚申塔である。

(3) 稻荷神社参道入口

図3は、破損が激しく判読が困難であるが、「川水神」と刻まれていたと思われる。

(4) 稻荷神社

図4は大祓文字塔である。大祓とは、神社で六月と十二月の晦日に、万民の罪やけがれを祓った神事のことである。

(5) 中島家「南荻島二一〇」そば出津地

四号バイパスの元荒川橋から県道浦和越谷線の文教大学バス停にかけて、南北に平行に走っている「土手道」と呼ばれる道がある。この土手道を境に西側が堤根、東側(元荒川側)が出津(出洲)と呼ばれている。出津は、かつての元荒川の河川敷であった。

石仏石塔は、中島家(南荻島二一〇)そばの土手道から東側に降りた出津側にある。この場所を地元では山王日枝神社のお使いである猿が刻まれた庚申塔があるために「山王様」と呼んでいる。図9は寛文九年(一六六九)に造立された初期の庚申塔である。

(6) 大熊家「南荻島三八五六」路傍

そばの土手道の路傍角地には、向こう越ヶ谷、右慈恩寺、左野島地蔵と刻まれた道標石塔(図12)がある。

(7) 玉泉院

玉泉院は武蔵国八十八箇所(弘法大師霊場)の一つで、三十二番目にあたる寺院である。

境内には、六地藏菩薩像(図13)、六十六部回国塔(図14)、光明真言曼陀羅塔(図15)がある。図15は光明真言の梵字が円形に並んで刻まれている。光明真言は密教で唱える呪文で、これを唱えれば一切の罪業が除かれるという。

(8) 会田家「南荻島三六五」個人墓地

砂原村の角堂坊墓地に見られるのと同様の六人の地藏菩薩が刻まれた六地藏塔(図16)である。

(9) 野合自治会館

荻島村の一部は、ここ元荒川の左岸にもある。元荒川はかつては袋山村を取り囲むようにして曲流していて、荻島村と袋山村とは陸続きであった。しかし、元荒川が真っすぐに流れるようになると、宝永三年(一七〇六)頃に荻島村の北部の野合に新川を作り、荻島村の一部が新川によって分断されたのである。その結果、荻島村野合は俗に切とも呼ばれ、内野合(元荒川右岸)と外野合(左岸)とに分かれた。現在の切橋の兩岸の地域である。

元荒川左岸の野合の地の野合自治会館には、江戸時代に「馬頭院」と呼ばれた寺院があった所である。ここに庚申塔(図18、22)など貴重な石仏が多く見られる。

(10) 野中自治会館

この地は、江戸時代に「西蔵院」と呼ばれた寺院があった所である。ここにも庚申塔などの貴重な石仏がある。そのうちの図30は、道しるべを兼ねた猿田彦の神道系庚申塔である。みきり、間久里、粕壁、鉤上、大門、鳩ヶ谷、越ヶ谷、野島、岩槻、以上の地名が刻まれている。

(11) 中組集会所

ここは、明王院と呼ばれた寺院跡地である。地元では、なまって「みょうごいん」と呼んでいる。本尊は不動明王であった。集会所の西隣にあるお堂には、不動明王像が二体安置されている。ここにも貴重な庚申塔(図32、36)が整備されて並んで立っている。

(12) 鈴木家「南荻島一三八二」路傍

図37は、台石に「鈴木治兵衛」を初め、奉納者の名前がびっしり刻まれている庚申塔である。

(13) 根岸家「一一四五」西側路傍

図38は、「青面金剛」と文字で刻まれた庚申塔である。

(14) 「ひやみず」共同墓地

ここには六地藏菩薩像(図39)、観音菩薩像(図40)がの石仏がある。また近くの路傍には、図41の庚申塔と図42の巡礼塔がある。巡礼塔の方は、西国三十三箇所・四国八十八箇所・秩父三十四箇所・坂東三十三箇所の合計百八十

八箇所の観音様を巡礼した記念に造立されたものである。

旧後谷村

「南荻島」と同様に、後谷村も明治十二年(一八七九)に頭に「北」が付いて「北後谷村」となった。

(1) 根郷の稲荷神社

このあたりは、根郷と呼ばれる小字の地域で、かつての本村の中心であったと思われる。稲荷神社は後谷村の鎮守である。図1は稲荷様の文字塔である。

(2) 根郷自治会館

ここは、江戸時代に光明院と呼ばれる寺院があった所である。ここにも庚申塔(図4、5)など貴重な石仏が多く見られる。特に図4の庚申塔に刻まれている青面金剛は、腕が十本もある大変珍しいものである。

(3) 北前の稲荷神社

図8は、出羽三山に参拝するために組織された講中が造立した石塔である。

旧西新井村

(1) 大石橋北側の山王社

ここに山王社の本尊となっている延宝六年(一六七八)の庚申塔(図1)がある。鈴木、三ツ木、高橋、竹屋(新

井)、田村、大久保などの名前が刻まれている。

(2) 西教院さいきょういん

本堂前には西新井村の名主が造立した芭蕉の句碑があり、墓地内にはその代々の名主の斎藤家墓所(図14)がある。

図7は、徳本行者の「南無阿弥陀仏」と刻まれた名号塔なごうとうである。徳本行者とは宝暦八年(一七五八)に紀伊国(和歌山県)で生まれ、念仏を広め活躍した浄土宗の代表的な念仏僧である。各地に独特の書体による名号塔が多く残されたいる。

図12と図13は、主尊が地蔵であったり、阿弥陀であったりしてまだ一定していない頃のとてとも貴重な江戸初期の庚申塔である。後世になると主尊は青面金剛や猿田彦になる。

(3) 田村家「西新井六九〇」道路反対側

図15の供養塔の椿割塚つばきわりつかには逸話がある。戦国時代の末期、岩槻城が豊巨勢によって攻められたため、城から西新井の斎藤家に落ちのびようとした太田下野守おくだしたのしゅの妻が、息子の岩月丸いわつきまるを残して沼に身投げした。その母の遺骸を埋めた塚であるという。この塚には椿の木が植えられたという。岩月丸は、後に斎藤家の二代目を跡継ぐ。

(4) 西組自治会館

ここは、西教院の末寺である正覚庵と呼ばれた江戸時代の寺院跡地である。ここに巨大な名号塔(図16)がある。

(5) 石神井神社いしがみい

ここには、庚申塔(図19・20)や磐長姫命いわながひめのみことの文字塔がある。磐長姫命は、庶民の間で長寿の神様として信仰されていた神様である。

旧長島村

(1) 稻荷神社

長島村の鎮守である。現在は、三ツ木家(長島二一八)のそばに移転(平成十四年四月)されている。もとは長島の北西端の内山家(長島二九〇一)の西隣に長島の集会所とともにあった。移転する前の稻荷神社の近くには江戸時代には萬蔵寺という寺院もあった。

図1から4までの石仏は、もとの稻荷神社があった所から平成十四年四月に移転してきたものである。その内の図1は六十六部回国塔で、日本国内の六十六箇国に法華経を納めに回り終わった記念に造立されたものである。

旧野島村

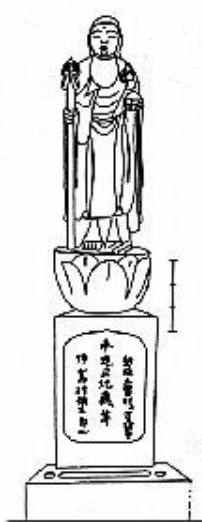
1. 野島
丸彫り地藏菩薩像



經曰
現世未來苦 滿足後生
淨土可令清 願上思

浄山寺

2. 野島
丸彫り地藏菩薩像



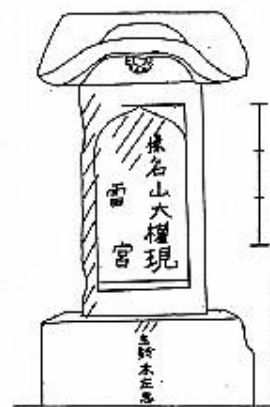
浄山寺

3. 野島
普門品供養塔



浄山寺

4. 野島
榛名山権現・雷電宮文字塔



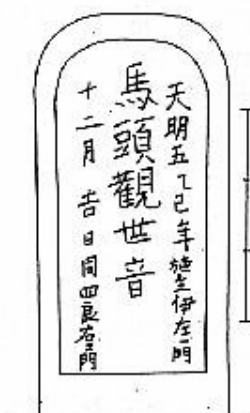
久伊豆神社

5. 野島
青面金剛像庚申塔



久伊豆神社

6. 野島
馬頭観音文字塔



野口家〔野島一八〇〕路傍

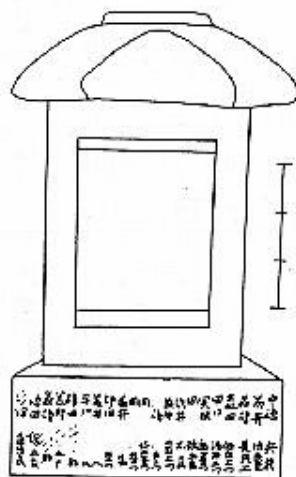
旧小曾川村

1. 小曾川
疱神文字塔



久伊豆神社

2. 小曾川
御嶽山文字塔



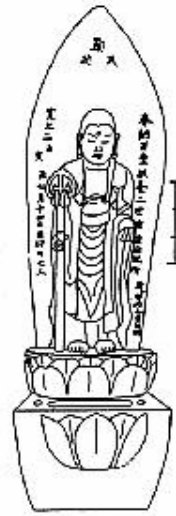
久伊豆神社

3. 小曾川
金毘羅権現文字塔



小曾川
4

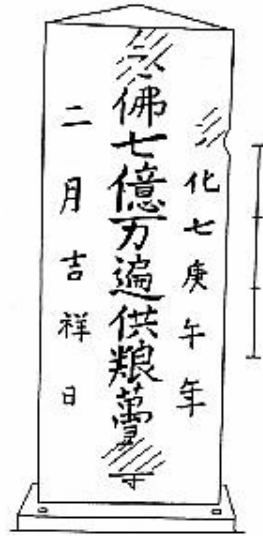
地藏菩薩像付き百重巡礼塔



慈眼寺跡

小曾川
5

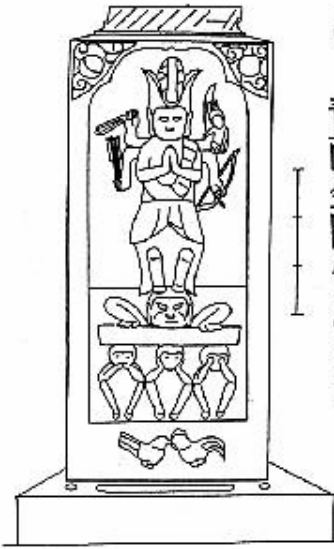
名号塔



慈眼寺跡

小曾川
6

青面金剛像庚申塔



慈眼寺跡

小曾川
7

青面金剛像庚申塔



慈眼寺跡

小曾川
8

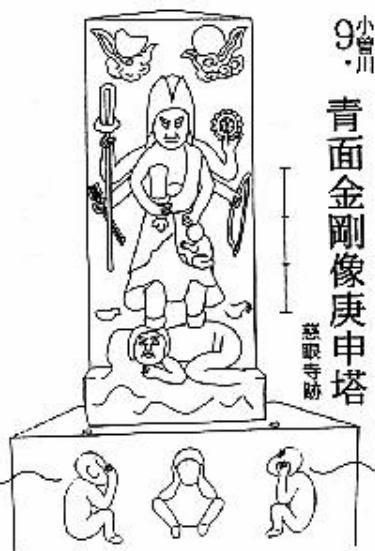
如意輪観音菩薩像



慈眼寺跡

小曾川
9

青面金剛像庚申塔



慈眼寺跡

小曾川
10

青面金剛像庚申塔



慈眼寺跡

小曾川
11

六十六部回国塔



田口家小曾川三〇路傍

小曾川
12

烏八臼の墓塔



鶴為屋松影信女

元禄十一年八月十日

中島家小曾川二六八をば共同墓地

13小倉川

青面金剛像庚申塔



中島家「小倉川二三一」路傍

14小倉川

青面金剛像庚申塔



藤井家「小倉川四二二」そばの墓地

15小倉川

秩父講供養塔



藤井家「小倉川四二二」そばの墓地

1砂原

旧砂原村 馬頭観音菩薩像



砂原新橋そば元荒川土手道

2砂原

道標付き青面金剛像庚申塔



〔側面〕奉養所
松沢家「砂原八五〇」二そば路傍

3砂原

阿弥陀像付き百堂巡礼塔



松沢家「砂原八五〇」二そば路傍

4砂原

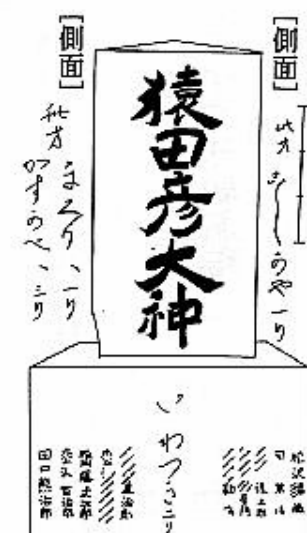
青面金剛像庚申塔



平野家「砂原七七五」路傍

5砂原

道標付き猿田彦文字庚申塔



〔側面〕ハスシのヤリ

〔側面〕社方
ハスシのヤリ
ハスシのヤリ

6砂原

青面金剛像庚申塔



〔側面〕そよりこーさや

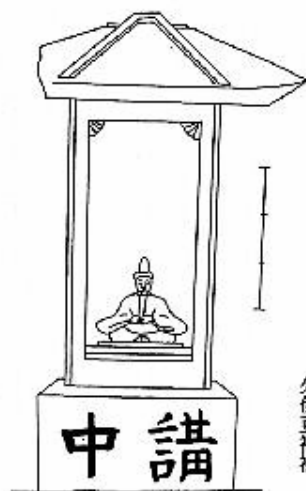
〔側面〕そよりこーさや

7. 青面金剛像庚申塔



久伊豆神社

8. 天神像



久伊豆神社

9. 地藏像付き石橋供養塔



聖勤院跡墓地

10. 不動明王像



聖勤院跡墓地

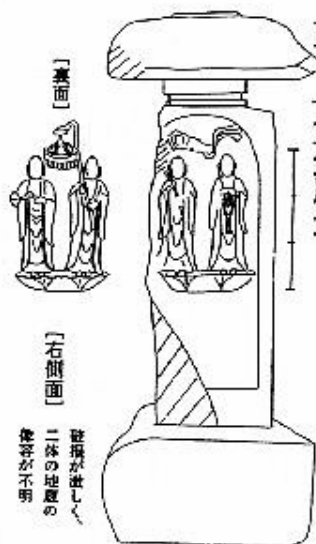
11. 「宝篋印陀羅尼」梵字文字供養塔



本塔は延元元年(即ち寛延元年)辰戌八月十五日
野口山澤山寺奉日蓮宗史蹟
野口山澤山寺奉日蓮宗史蹟
野口山澤山寺奉日蓮宗史蹟

聖勤院跡墓地

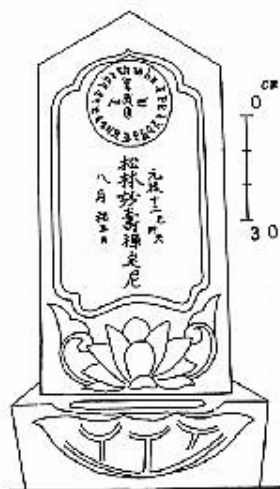
12. 六地藏塔



角笠坊墓地

旧荻島村

1. 光明真言曼荼羅塔



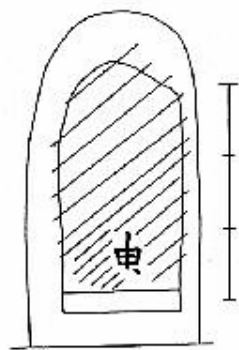
全田家(南荻島八六)個人墓地

2. 文字庚申塔



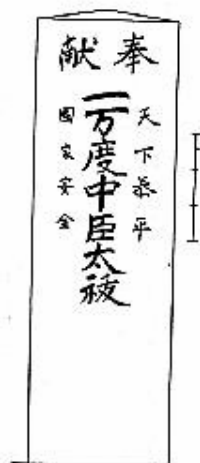
全田家(南荻島八七)路傍

3. 「川水神」文字塔



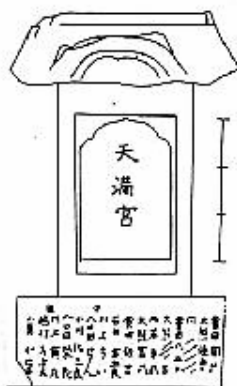
稻荷神社参道入口

4. 萩島 におおはらい
大祓文字塔



稲荷神社

5. 萩島 天満宮文字塔



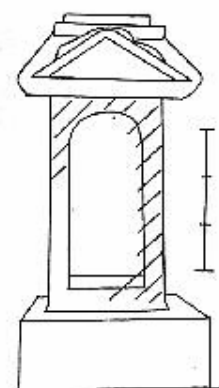
稲荷神社

6. 萩島 こみたけ
小御嶽大神文字塔



稲荷神社

7. 萩島 主尊不明文字塔



稲荷神社

8. 萩島 猿田彦文字庚申塔



稲荷神社

9. 萩島 文字庚申塔



中島家(兩萩島二一〇)そば出津地

10. 萩島 青面金剛像庚申塔



中島家(兩萩島二一〇)そば出津地

11. 萩島 弁財天文字塔



中島家(兩萩島二一〇)そば出津地

12. 萩島 道標石塔



大熊家(兩萩島三八五) 土手道路傍

13数

一石六地藏菩薩像

玉泉院



14数

六地藏像付き六十六部回国塔

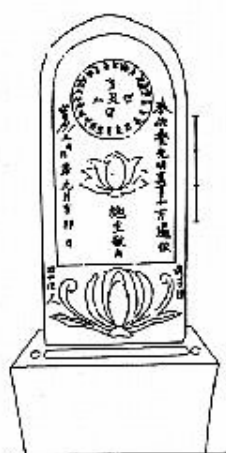
玉泉院



15数

光明真言曼陀羅塔

玉泉院



16数

六地藏塔

会田家二階敷島三六五個人墓地



17数

地藏菩薩像

野合自治会館



18数

文字庚申塔

野合自治会館



19数

青面金剛像庚申塔

野合自治会館



20数

青面金剛像庚申塔

野合自治会館



21数

青面金剛像庚申塔

野合自治会館



22 萩島

文字庚申塔

青面金剛像庚申塔

青面金剛
庚申年
十月吉日



野中自治会館

23 萩島

六地藏塔

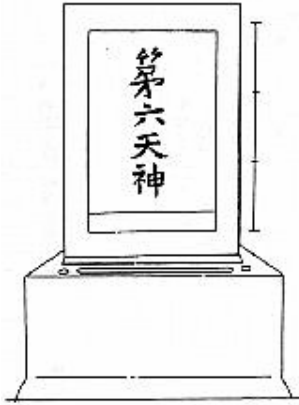
野中自治会館



24 萩島

『第六天』文字塔

野中自治会館



25 萩島

青面金剛像庚申塔

野中自治会館



26 萩島

文字庚申塔

野中自治会館



27 萩島

雷電宮文字塔

野中自治会館



28 萩島

疱瘡神文字塔

野中自治会館



29 萩島

地藏菩薩座像

野中自治会館



30 萩島

猿田彦文字庚申塔

野中自治会館

- 41 -

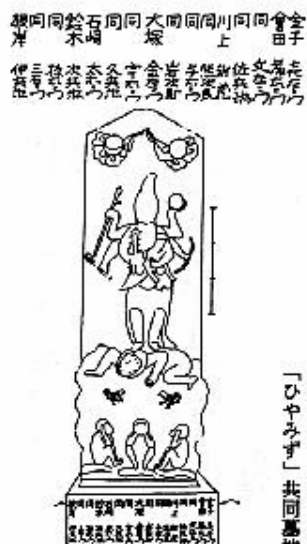
40. 観音像付き念仏供養塔

「ひやみず」共同墓地



41. 青面金剛像庚申塔

「ひやみず」共同墓地



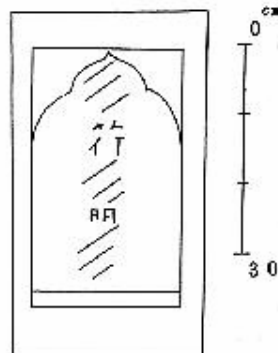
42. 百八十八箇所巡礼塔

「ひやみず」共同墓地



旧後谷村

1. 後谷 稻荷大明神文字塔 根郷の稻荷神社



2. 後谷 文字庚申塔

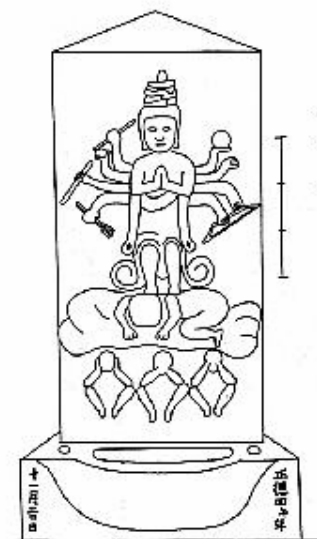
根郷自治会館

3. 後谷 普門品供養塔

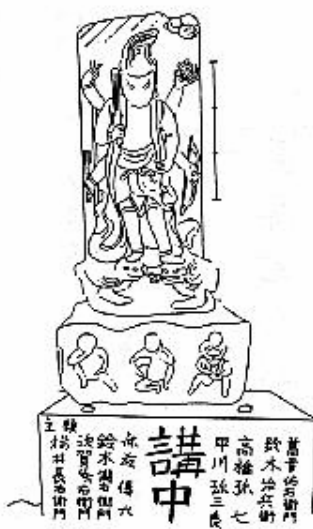
根郷自治会館



4. 後谷 青面金剛像庚申塔 根郷自治会館



5. 後谷 青面金剛像庚申塔 根郷自治会館



6. 後谷 六十六部回国塔 根郷自治会館



西新井 6・不動明王三尊像



西教院

西新井 7・徳本行者の名号塔



西教院

西新井 8・地藏菩薩像



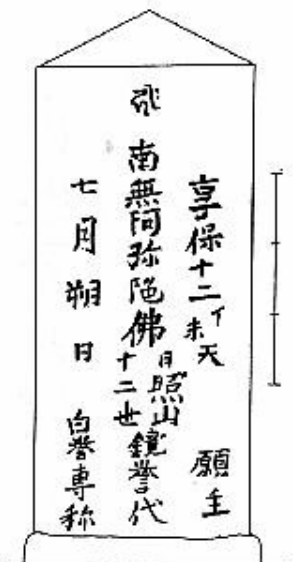
西教院

西新井 9・名号塔



西教院

西新井 10・名号塔



西教院

西新井 11・観音菩薩像



西教院

西新井 12・地藏像付き庚申塔



西教院

西新井 13・阿弥陀如来像付き庚申塔



西教院

西新井 14・斎藤家の墓塔



西教院

15 西新井

「椿割塚」の墓塔

田村家「西新井六九〇」道路反対側

天正十八庚寅天
太田下野守室
正雲院殿華嶽固室大修女
六月十日

16 西新井

名号塔

西組自治会館



17 西新井

文字庚申塔

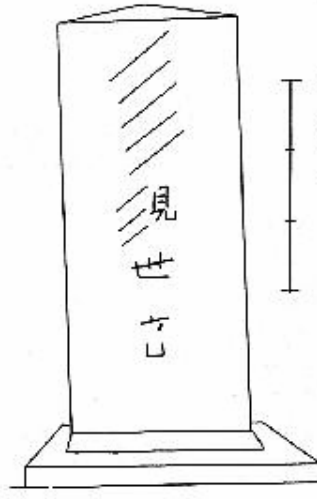
西組自治会館



18 西新井

馬頭観音文字塔

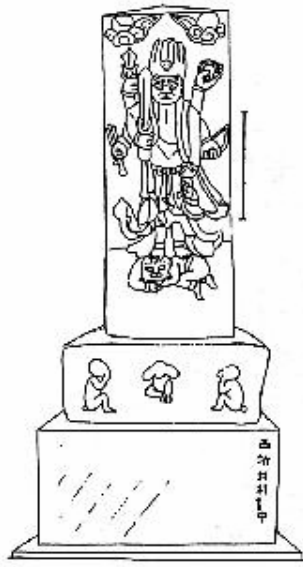
西組自治会館



19 西新井

青面金剛像庚申塔

石神井神社



20 西新井

青面金剛像庚申塔

石神井神社



21 西新井

「浅間大神」文字塔

石神井神社



22 西新井

「磐長姫命」文字塔

石神井神社



23 西新井

僧侶の墓塔

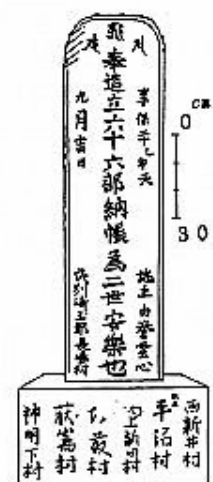
西前自治会館



旧長島村

1. 長島
六十六部回国塔

稲荷神社



2. 長島
青面金剛像庚申塔

稲荷神社



3. 長島
一石六地藏菩薩像

稲荷神社



4. 長島
地藏菩薩像

稲荷神社



荻島地区の石仏案内図

野島村

- (1) 浄山寺 No. 1~3
- (2) 久伊豆神社 No. 4・5
- (3) 野口家[野島180]路傍 No. 6

小曾川村

- ① 久伊豆神社 No. 1~3
- ② 慈眼寺跡墓地 No. 4~10
- ③ 田口家[小曾川330]路傍 No. 11
- ④ 中島家[小曾川266]そば共同墓地 No. 12
- ⑤ 中島家[小曾川233-1]路傍 No. 13
- ⑥ 藤井家[小曾川421]そば墓地 No. 14・15

砂原村

- (1) 元荒川土手道 No. 1
- (2) 松沢家[砂原850-2]そば路傍 No. 2・3
- (3) 平野家[砂原775]路傍 No. 4
- (4) 久伊豆神社 No. 5~8
- (5) 聖動院跡墓地 No. 9~11
- (6) 角堂坊墓地 No. 12

荻島村

- ① 会田家[南荻島86]個人墓地 No. 1
- ② 会田家[南荻島87]路傍 No. 2
- ③ 稲荷神社参道入口 No. 3
- ④ 稲荷神社 No. 4~8
- ⑤ 中島家[南荻島210]そば出津地 No. 9~11
- ⑥ 大熊家[南荻島3856]土手道路傍 No. 12
- ⑦ 玉泉院 No. 13~15
- ⑧ 会田家[南荻島365] No. 16
- ⑨ 野合自治会館 No. 17~24
- ⑩ 野中自治会館 No. 25~31
- ⑪ 中組集会所 No. 32~36
- ⑫ 鈴木家[南荻島1382]路傍 No. 37
- ⑬ 根岸家[南荻島1145]西側路傍 No. 38
- ⑭ 「ひやみず」共同墓地 No. 39~42

後谷村

- (1) 根野の稲荷神社 No. 1
- (2) 根野自治会館 No. 2~7
- (3) 北前の稲荷神社 No. 8~10

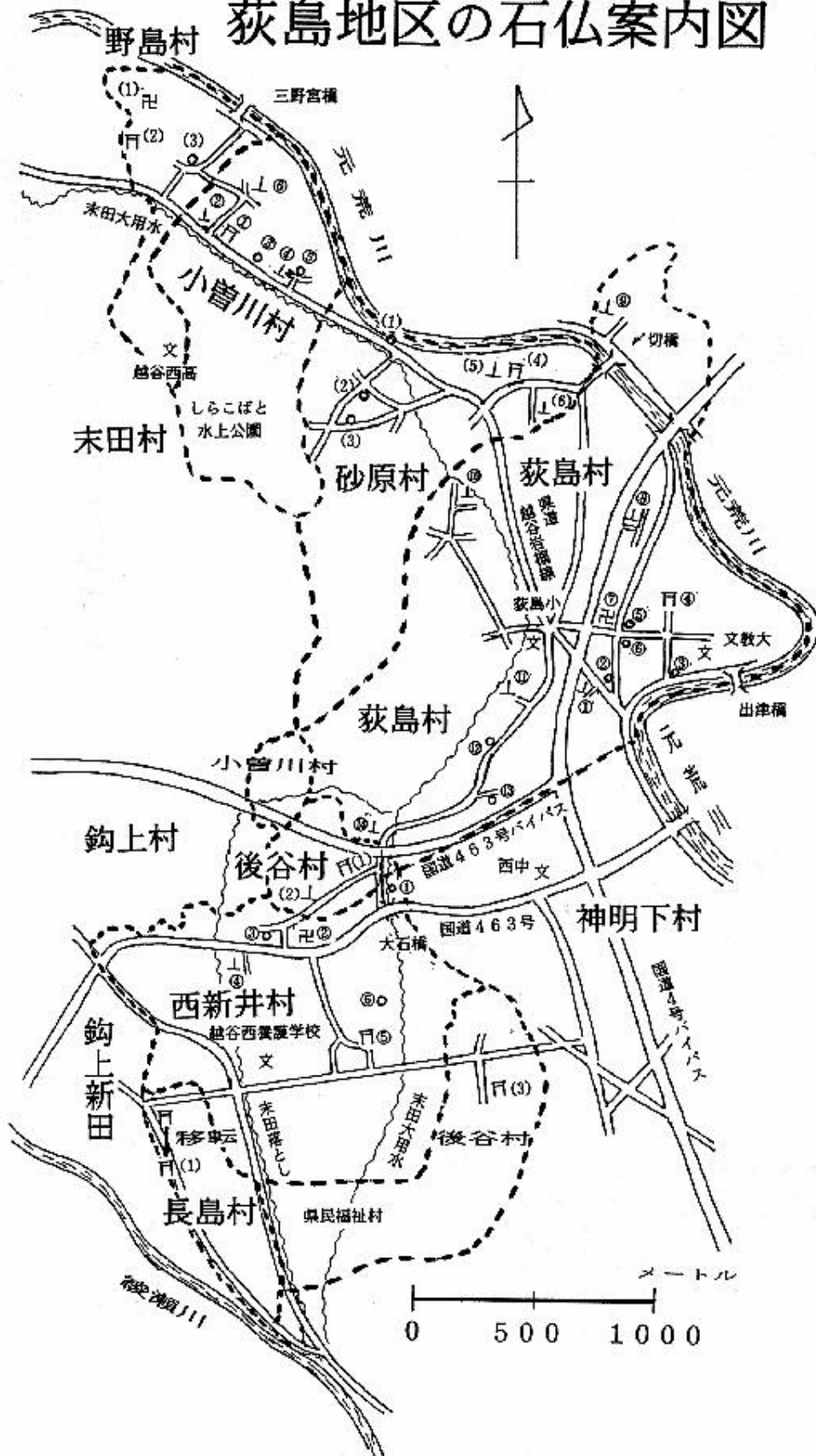
西新井村

- ① 大石橋北側の山王社 No. 1~3
- ② 西教院 No. 4~14
- ③ 田村家[西新井690]道路反対側 No. 15
- ④ 西組自治会館 No. 16~18
- ⑤ 石神井神社 No. 19~22
- ⑥ 西前自治会館 No. 23

長島村

- (1) 稲荷神社 No. 1~5

荻島地区の石仏案内図



ちゅんべ

街で耳にした越谷弁

増林地区コミュニティ推進協議会

中島 満

三ツ木宗一

長谷川和子

私たち、越谷に生まれ育った者は、今は失われつつある「越谷弁」が何気なく口に出て、気恥ずかしいときがあるでしょう。

その言葉が相手にあたえる印象は様々であり、好感をもたれたこともあるでしょう。いまでも、日常につかっている人、知っていてもつかわない人、人それぞれです。

方言は地方の文化です。方言で話をするとうい親しみがうまれ、コミュニケーションが図れます。

ラジオの公開放送で、毒蝮三太夫さんと、増林に住む越谷弁丸出しのおばあさんとの話のやりとりが愉快でした。

毒蝮三太夫さん「言葉が茨城弁と似ていて、茨城の人と勘違いしました」

方言は地域に根ざしたもので、他の土地から帰ったときに聞くふるさとの言葉に、ほっとした経験を皆さんもお持ちのはず。

越谷弁といっても、市内の地域によって多少はちがいます。ここに挙げた越谷弁は、増林でいまでもよく聞く言葉です。

よく使っている方言、あまり知らなかった方言、生きている越谷弁を集めてみました。

会話

- ◇あれんべえじゃあ話になんねえ
- ◇ようつりにいったんだけど何にもおさまんねえ
- ◇今日は降らねえでいいあんべえだねえ
- ◇ふろの湯はうわつかべえ熱いからよくかんませ
- ◇話がきまんねえからさきにいつちやうべえ
- ◇今きたべえなのにもうけるのかすこしは遊んでけ
- ◇云う事聞かねえでこりきつちやう
- ◇こんなちつとんべえじゃあ話になんねえ
- ◇今日は寄り合いがあるから一緒にやべえ
- ◇なくした物はなかなかめつかんねえな

「べえ」のつくことば（確認につかう）

- ◇あれんべえ (あれだけ)
- ◇いつちやうべえ (いつてしまおう)
- ◇いいべえ (よいでしょう)
- ◇きたべえなのに (来たばかりなのに)
- ◇そうだんべえ (そうでしょう)
- ◇やつちやうべえ (やってしまおう)
- ◇よかんべえ (よいだろう)
- ◇やだべえ (やだ)
- ◇これんべえ (すくない)
- ◇いねべえ (だれもない)
- ◇けつちやべえ (帰る)
- ◇くつちやたべえ (食べる)

「つ」が入ることば

- ◇おつとばす
- ◇おつことす
- ◇おつばなす
- ◇おつべす
- ◇くれつから
- ◇こりきつちやう
- ◇さつぼる
- ◇したつけ
- ◇しつつるつて
- ◇そろつと
- ◇とつとけよ
- ◇とつつけこ
- ◇ひやつこい
- ◇ぶつとばす
- ◇めつける
- ◇よっかかる

「え」が入ることば

- ◇けええる
- ◇おさまんねえ
- ◇かまねえ
- ◇しんねえ
- ◇なんねえ
- ◇あぶねえ
- ◇いけねえ
- ◇おつかねえ
- ◇つまんねえ
- ◇しようねえ

(追い飛ばす)

(落とす)

(難す)

(押す)

(上げるから)

(困ってしまつ)

(投げる)

(したかしら)

(ぶらさげて)

(そつと)

(買っておきなさいよ)

(物を交換する)

(冷たい)

(急いでいる)

(みつける)

(よりかかる)

(帰る)

(つかまらない)

(かまわない)

(知らない)

(ならない)

(きけん)

(否定する)

(こわい)

(つまらない)

(しかたない)

挨拶ことば

- ◇いいあんべえだねえ
- ◇じつじやあねえけど
- ◇やんばいですね

(天気の良い日の挨拶)
 (話のはじめにいう)
 (よい天気ですね)

その他のことば

- ◇うなつちやう
- ◇うら
- ◇おら
- ◇たいる
- ◇ちつとんべ
- ◇ほつほとけ
- ◇めぐる
- ◇おっぺかす
- ◇びたつける
- ◇ぶつくらす
- ◇たまげた
- ◇ほじくる
- ◇かんべん
- ◇びんた

うなう

(耕す)
 (うしろ)
 (わたし)
 (垂れる)
 (わずかばかり)
 (構うな)
 (まわる)
 (はがす)
 (たたきつける)
 (なぐる)
 (おどろいた)
 (穴をほる)
 (許す)
 (頬をなぐる)

間久里

酒井 達男

県道足立越谷線の大里北で草加バイパスの陸橋をくぐると、国道四号線となり、此の入り口が下間久里である。

往古、間久里の地は新方領に属した一つの里であった。

(風土記稿)

江戸期になって北部が上、南部が下と分かれ江戸中期には越ヶ谷宿の助郷となった。

(西方村旧記)

間久里地名の語源については、種々述べられてきているが、主なもの四説ほどを挙げてみた。

①間久里の名は条里の遺名と解釈されている。

(埼玉県史)

条里制とは、古代の耕地区画方式で、その土地を蕃盤の目のように区分して一定の面積の地を公民に与えて耕作させ、一定の租を徴収する方法をいう。

この条里の地割は、奈良期から平安初期にかけて施行されたものと思われる。

越谷ならびに周辺地域の条里については、四条(東町)八条(八潮市)、遺名としては四丁野(宮本町)、桜井地区の間久里、大里などを挙げている。

②間久里はもと時里とも書かれ、農家の協同作業の場所であった。

(真蔵院文書)

埼玉県地名誌によると「ユイ」説を挙げている。

「ユイ」を古語辞典で繙くと「農作業で互いに力を貸し合う」となっている。

大分県速見郡の一地区では「結い」に相当する言葉をマクリという。

ユイは協同や結合を表わす言葉であるが、組織労働としてのユイは労働交換を意味する。

普通一日勤務の労働に対しては必ずその分を労力で返し、金銭や物での支払いを認めないのが特徴となっている。

(綜合日本民族語集)

間久里の名は、あるいはユイからおこったものと解するのが妥当かも知れない。

(毎日新聞No1説)

③マクリのマを接頭語としてクリだけの語源を考えると岩礁の意味がある。

距離的にはやや離れているが古利根川の岩礁からその名がおこったのか、ともみられる。

なおクリには単に石の別名ともなっている。

(埼玉県地名誌)

④ほかの集落から離れた「久しい間の里」である。かつて此処は沼沢地が広がって、ススキに似た真菰

(イネ科)が繁茂していたので「真菰里」になった。

(毎日新聞No2説)

いまはすっかり宅地化されたが、高度成長期に入る頃は、周辺の人々から「間久里のムジナに馬鹿にされるな」と半分本気で語られていたというから、成程と思わせるものがあるようだ。

さてこれ以外に、「真九里」「捲り」など珍説らしきものもある。

とにかくどこの地名にしても、すんなりと一本で領ける語源は少ない。

越谷地名、草加地名についても数説あげられている。

間久里の場合私としては、④真菰里説に重きを置きたいと思う。

①については残念乍ら条里を裏付けする遺構が無い以上素直に条里地名と解するには無理があるのではなからうか。

上間久里の西側を旧日光街道がかすめるように通っている。

ここは越谷宿と粕壁（春日部）宿のほぼ中間点に当たり、旅人の休憩所である立場たてばが設けられ茶屋が八軒並んでいたのが八軒茶屋と呼ばれた。

当時の立場のすぐ横を流れていた元荒川でとれた鰻料理をだす店があり道中名物であった。（風土記稿）

元荒川は後の河川改修で、間久里の遠く西南に流れを変えてしまった。

日光巡拝図誌には「今日も雨降り道いよいよ悪しく、大里村、下間久里、上間久里、此処に鰻店三軒有り、名物なり」と。

間久里の地名を云々する前に、旅人や佐竹侯のお陰で間久里は鰻ですっかり有名になっていたのだ。

何方も興味ある「たるま」「せんべい」「たんす」「ひな人形」等は、伝統的手工芸品で昔からの職人の技能による文化遺産の賜物でしょう。

特に「越谷たるま」についての史的推移を眺めてみたい。

江戸時代の文化年間（今から約二百年以前）頃は、越谷地域でも「張子の目なしたるま」が作られていたらしい。

「越谷たるま」の発祥年代は不明だが、江戸時代からの伝統について下間久里村では年五万箇を生産し、川崎大師、西新井大師、柴又帝釈天などへ出荷していたという。

現在の越谷近在での生産量は年間五十万箇となり、北海道から九州地方まで「越谷たるま」の名で親しまれている。

当地の生活や生産分野での業界努力の成果推移をみるのも郷土文化を学ぶ貴重な一面となるでしょう。（堤竹記）

「十日夜（とおかんや）の藁でっぼう」と

愛媛県の「藁スボの『亥の子』」

金岡由紀子

はじめに

「幻の行事になってしまったのか？」と思ったのは調べ始めて六ヶ月くらい前の頃だった。

私は二年前の『古志賀谷』第十一号に「越谷のお正月と『とうかんやのわらでっぼう』というタイトルで寄稿させていただいた。その内容は戦前の越谷の富裕な農家の正月風景と、とおかんや（十日夜）の夜（十月十日）稲の藁で一皿近い長さの筒を作り、それで屋敷の周りの地面を打つ「わらでっぼう」の行事についてだった。

私の郷里四国・香川では見たことも聞いたこともない不思議な行事で、私は大変興味を覚えた。

拙稿は発表の場を得たことで複数の方から参考の資料コピーを寄せていただき、私自身も『古志賀谷』の抜粋コピーを旧来の知人・友人に配り広く情報を求めた。知人のついで「わらでっぼう」の実物を作ってくださいる方まであ

り、（後記、一・①「わらでっぼう」の作り方、に登場）本物の「わらでっぼう」は今とても役に立っている。

約二年を経てわかったことは、昭和三十年頃まで越谷近辺で「わらでっぼう」を作り、屋敷の周りの地面をたたいて回る、という事を行っていた家々でも（個人的にそれぞれの家）の行事であるが故であろうか。今では覚えている人さえ消えつつあるのではないか、ということだ。

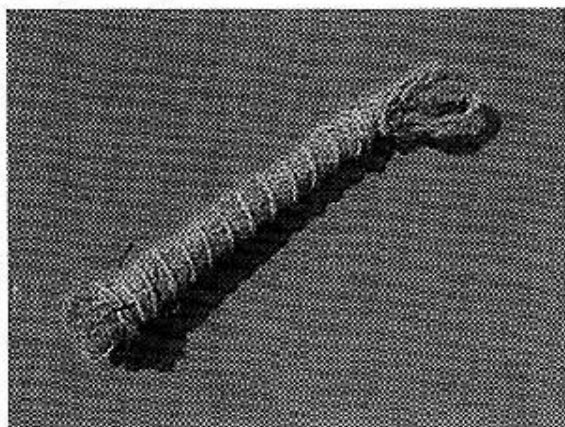
「忙しい」

「わらが手に入らない」

「戦後では世の中のありようが違う」

等々さまざまの理由があるのだろう。

私が調べた限りでは平成十三年、十四年とこの「わらでっぼう」で地面をたたいた——という行事は行われていない。



長野県佐久市香坂の「わらでっぼう」

「幻の行事」になってしまったのかもしれない越谷の「とおかんやのわらでっぼう」を記録したく加筆・整理し、あわせて越谷の「わらでっぼう」に酷似した愛媛県の「藁スボ」で地面をたたくという、「藁の『亥の子』」を代表とし、「亥の子」についても述べるものである。

一・①「わらでっぼう」の作り方

- I・本体に巻きつけ縛る縄をなう。
- II・ずいき（里芋の茎）を入れる。
- III・束ねて、縄できつく縛る。
- IV・持ち手を作るために三つに分け、真ん中は切りとる。
- V・できあがり



写真 I



写真 III

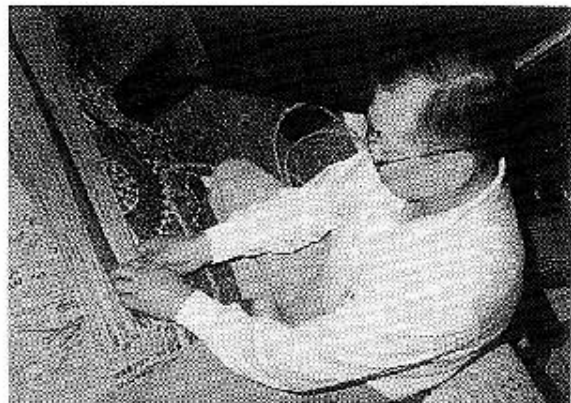


写真 II

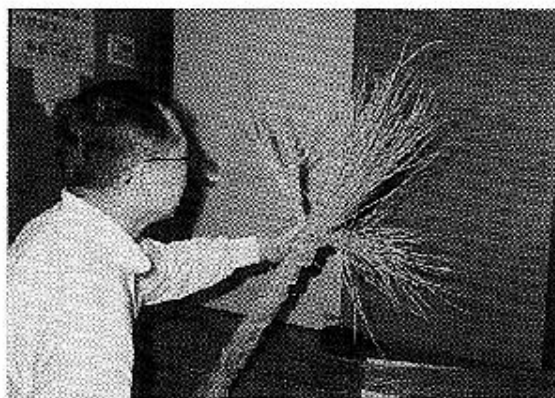


写真 IV



写真 V

②越谷と関東近辺における聞き書き調査

本物の威力というのは素晴らしいものである。

私は、埼玉県大里郡江南の出身で松戸市に住む小島氏に「わらでっぼう」を作っていたらいい。

農家を訪問したり、ゲートボール場でゲームに興じる人々から話を聞くことができた。

「わらでっぼう」を手にして私が歩いていると、通行人の眼がテンになる。

たいていの人は、「それは正月のしめ飾りか？」という質問をする。

時おり、目を見開き、のちに懐かしそうな表情になる人がおり、そういった人々から出身地、生年、かけことばを聞き取らせていただいた。(最終ページ記載の「越谷市内と関東各地における“とおかんや”の聞き取り調査」参照)

一連の聞き取りの中で最も印象に残った一つを紹介したい。

越谷の花田地区であった。

私は自転車を道ばたに止め「わらでっぼう」を大きなバッグから取り出して、畑で草取りをする女性に近づいて行った。

八〇歳に近いであろうその女性はじっと「わらでっぼう」を見ています。私は「これを使って十月か十一月の十日の夜に家のまわりや畑を打ちつけませんか？」とおかんだ。

* * * 地面を打つ為を作るものなので、使う人の身長や腕の長さによって「わらでっぼう」の長さは変わる。すなわち、身長九〇cmの幼児が使うなら短い「わらでっぼう」となり、大人の場合は一mの長さの「わらでっぼう」となったようだ。

やのわらでっぼう』って言いながら」と何十回かくり返してきた質問を彼女にぶつけてみた。

「いんや」答えはNOである。

私は、彼女に仕事の手を止めてしまった詫びを言い、帰ろうとした。

すると彼女は「もつと見せて欲しい」と言う意味のことを言った。(私は埼玉の出身ではないので、その女性の話は聞き取りにくかった)

「わらでっぼう」を手渡すと女性はしみじみと見て、ごつごつの節くれたった手で「わらでっぼう」をなでた。

「亡くなった父親が、藁で作った筒で地面を叩き、げえろを追っ払う、とひとつつつたが、これがそれか。はじめて見た」と。

げえろは、カエルである。

二・①愛媛県における「石の『亥の子』」と

「藁の『亥の子』」

「十日夜(とおかんや)」から「亥の子」と言う全く違うモノへ話が跳んだように思われるかもしれない。しかし、「夜、藁の筒で地面を打つ」という時間と道具と行為の三点に着目して『亥の子』にもしばらくお付き合いたい。

『亥の子』の名の行事であるが、藁で作った筒で地面を打つ地域が西日本にも存在する。

・和歌山県伊都郡かつらぎ町志賀

・滋賀県高島郡安曇川町(琵琶湖西岸)

” 今津町

・滋賀県野洲郡中主町(琵琶湖大橋の東)

・岡山県新見市

・香川県丸亀市小手島

・岡山県笠岡市北木島

” 白石島

” 飛島

そして愛媛県各地には「藁スボ」という名の藁筒で地面を打つ「亥の子」が点在して今も行われている。愛媛県の場合は「石の『亥の子』」「藁の『亥の子』」と名づけられるほど地面を打つ道具の二種は、県下各地で混じっている。

最初に、石の「亥の子」の例として、越谷で友人になった女性(昭和三四年生まれ)からの聞き取りを紹介しよう。

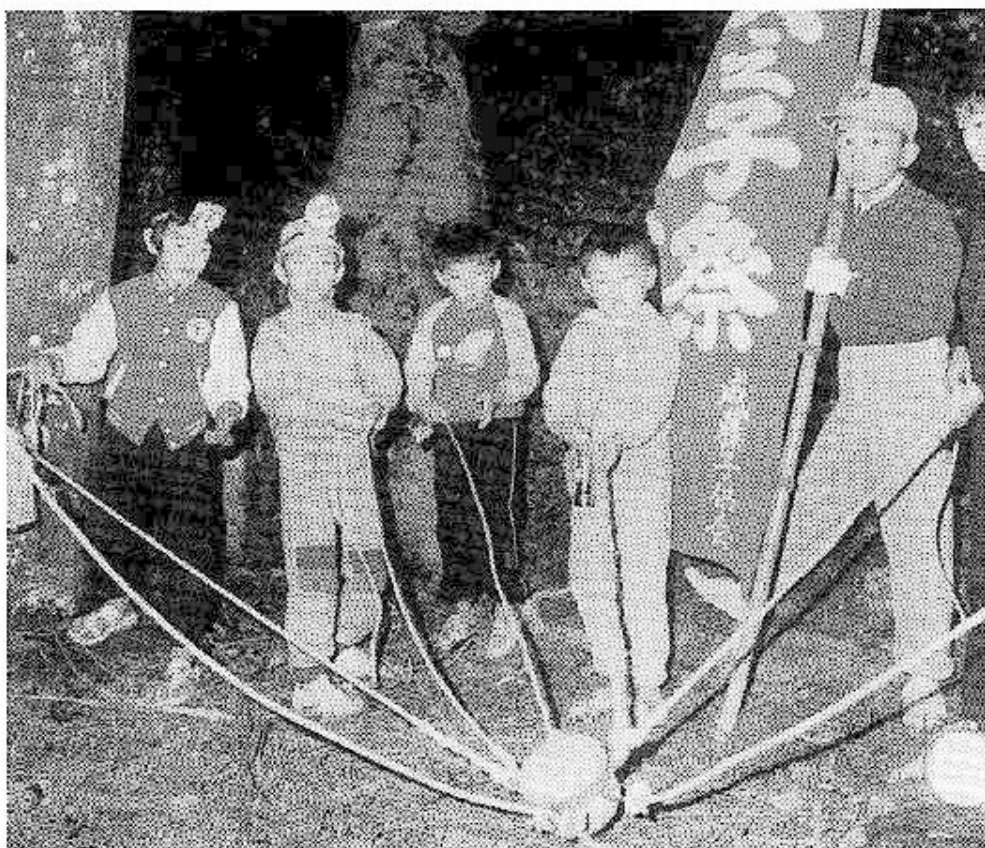
【お亥の子さん】

愛媛県北宇和郡三間町迫目(宇和島市の北東)

* * この地区では、「亥の子」行事は男の子の行事だが、弟が二人いるので【お亥の子さんの宿(やど)】となった記憶がある。

【宿(やど)】

「お亥の子さん」は行事そのものと、神様の石も意味する。



愛媛県北宇和郡広見町

中学二年生までの男子のいる家が、数年おきに「神の石の宿」となる。石は床の間に大切に置かれる。

平成十二年は十一月中に三回の亥の日があり、三回の「お亥の子さん」が行われた。

・亥の日の夕方、地区の中二までの男の子が宿に集まって来る。

・宿の「お亥の子さん」の石に藁を巻き、三・四本の持ち手をつける。

・地区の家々の庭を順番に回り、歌をうたいながら石で地面を打ちつける。

・訪問された家々は菓子や金包み（千円くらい）を渡す。そして子供たちは宿へ帰り、その家で夕食を食べることもある。最後に菓子や金をリーダー役の子が分ける。

「お亥の子さんの唄」
1・お亥の子の世には

- 一（いち）ん俵ふんまいて
- 二（に）でにっこり笑う
- 三（さん）で酒つくって
- 四（よつ）つ世の中よいように
- 五（いつ）ついつも行徳（ぎょうとく）に
- 六（むつ）つ無病息災に
- 七（なな）つ何事ないように
- 八（やっ）つ屋敷を広めたて
- 九（ここの）つ子供が喜んで
- 十（とお）でとっておさめた

2・えいとや さいとや

天上様の天上様のご門を五色の木に菊の花
笹の葉にとびうつり

うぐいすがうぐいすが初めて都に登る時

都は広いと申せども一宿を借りかねて

夢の小枝に昼寝して

春咲く花 夢見たの夢見た

祝いましよ 祝いましよ

この地区の「お亥の子さん」を一つの雛型として他県や
この地区外の愛媛県下では、道具と唄に別のパターンが見
出せる。

道具は 石(他の地区では「ゴーレン」「ごうりん」という

名になる)

藁(藁スボ、藁ボテ。スボキ(徳島)

ボテリンコ(岡山)、テンコ(香川)

ホテイ(愛媛大三島)

そして唄には、数え唄、ことほぎ唄、呪詛の形まで多種多
様である。

愛媛県の一部や海を隔てた岡山県、島根県出雲、滋賀県等
では、

♪亥の子 亥の子 亥の子の夜おサア

餅つかん者は 鬼生め 蛇生め

角生えた子才生め♪

という呪詛のタイプもある。

愛媛県に関する資料は聞き書き以外は、今回は『愛媛県

史・民俗⑩』からの引用である。

その中で愛媛県の北宇和地方の「石の亥の子」に関しては
文政六年(一八二三)に桜田某の書いた記録が残ることが
記されている。

十月、亥の日の餅を食へは病を除くといふ。宇和島・
吉田などにては亥の子もちといひて昔は藁縄にて石
を縛りつけてきたる由・・

と始まり、亥の子の供え物として

恵比須大黒へ神酒、鏡餅二重、鯛、大根を木具に並べ
て供へ・・・・・

当日は、

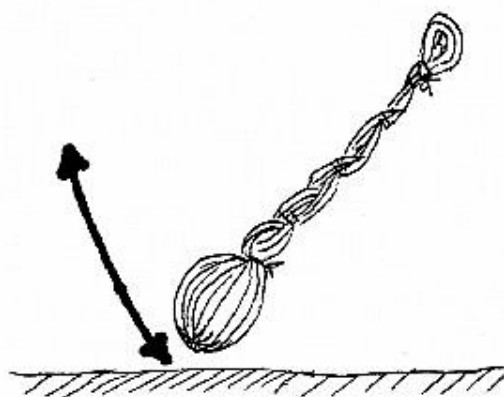
明け六つ頃より頭取の宅へ行き、・・・・

夕方を待兼ねて千秋楽を早くしまい・・・
と、夜まで騒ぐことのできる公認の行事であった様子であ
る。

『愛媛県史・民俗⑩』では、

亥の子は、亥の月(陰暦十月)の亥の日、亥の刻(午
後九時頃から十一時頃)に餅を食べると無病息災であ
る、との中国の俗信に基づくもので、平安朝以来、行
われてきた行事、と定義している。

これに似て、「夜の行事」であることの伝承が残っている
のが「石の亥の子」を打つ、岡山県新見市である。新見市
には、亥の刻(午後九時頃から十一時頃)から翌日の子(ね)
の刻(午前0時頃から二時頃)にかけて、田の神様を山へ
送るため、起きて見送る「亥から子へ。つまり、(イネ)で
ある・・・という伝承がある。



岡山県新見市「亥の子」の菓ボテ

**「とおかんやの『わらでっぼう』も各地の「亥の子」も夕方から始まる行事であることは共通であるので、注目したい二例である。

さて、愛媛県下の「亥の子」の唄は各地に何種類か残されているのだが、物語風の南予地方の「亥の子唄」を紹介したい。

♪今から数えれば五百年 頼朝公の時代にて
日本の武士を皆集め 蛭の小島へ打寄せて
七日七晩腕比べ

一で義経 二で新田 三で河津の三郎よ
四で代坂五郎兵衛よ 六つ武蔵の弁慶が
七つ那須野に 八が嶽 久坂源吾に藤堂や

これより富士の巻き狩りと 仁田の四郎がうち乗って
勇み進めばよけれども 都に帰りし翌日より
昼は地震が揺りかやす
夜はおごろ（もぐら）がもりかえす
占い祈禱にかけたなら 十月十日の亥の日にて
亥の子をついて祭るなら
日本国中すまずまと穏やかなりと申します

**唄の歌詞に「00パーセントの真実を求める訳ではないのだが、伝承の中にも何らかのメッセージが残っているとしたら、このバラードは「もぐら」が出てくる点でとても興味深い。

義経が登場する「とおかんや」の伝承が群馬県佐波（さわ）郡東（あずま）村に残っている。



群馬県佐波郡東村

ここは「わらでっぼう」で旧暦の十月十日に地面を打つ地区である。

東村の中でも《東道》をはさんで十日夜を行う《道下》という地区とその前日の九日夜に「わらでっぼう」を打ち餅をつく《道上》地区に分かれるのだが、どうして別の日になったのか、の理由に源義経が以下のとおり出てくる。

昔、源義経一行が、東下りでこの地域を通ったとき、道上の人たちは、十日夜の前日だったので、本来なら十日夜につく餅を九日について義経にもてなし、道下の人たちは十日夜に餅を振舞ったとか。以来、道をはさんで九日夜と十日夜と日取りを分けて行事をするようになった。

*源頼朝は、一一四七年生まれ。義経は一一五九年生まれとされている。

「亥の子」の行事が日本では平安時代に京都の宮中で行われていた、と言われているのだから十二世紀の人物名が出てきても何ら不思議ではないのだが、関東の「わらでっぼう」に關しても義経の時代までさかのぼれるのなら「わらでっぼう」は鉄砲という名前がついた時期を考える上で興味深い。

ここで、もう一度愛媛県に戻り、宮本常一氏の記録『家郷の訓』岩波文庫から「亥の子搦き」をご紹介したい。宮本常一氏（一九〇七年—一九八二年）は山口県大島郡沖合の島生まれの民俗学者である。その文中からも愛媛県と

の交流が強くうかがえる。

【子供仲間】一五三ページ

ずつと以前には秋十月の亥の日に行われる亥の子搦きは多くドーシ（同輩）が一組になって行なった。従って男の子、女の子それぞれのドーシ幾組かが、一戸一戸を門付して来るので、宵の口から夜半まで、家々の前ではスボとよばれる薬に葛などまきつけて棒状にしたもので土を打つ音がひびき渡ったものである。宵の口には七、八歳の幼ない子たちが着、夜が更けるとだんだん大供たち（大きな子供）がやって来て、しまいには若者組があらわれる。

♪お家の繁昌祝いこめ祝いこめ

と言つてつきはじめ、先ず大黒舞の歌を歌い、年上の子供たちはそのほかに色々な歌をうたう。家々ではあまり沢山来るものだからうるさくて、お礼の餅などやらないで知らぬ顔をしていると、

♪貧乏せえ貧乏せえ

と言つて次の家へ行く。それが三、四十年も前から、薬スボでなしにゴーレンと呼ばれる石に繩をつけて、これで土を打つてまわるようになった。初めは伊予のあたりから来ていた年季奉公の若者が伝えたもので、若者の間に行われていたものがいつか子供たちの方へ移つてスボはすたれ、そのかわりに村の中を二つに分けて大きな組二つになり、年上の者が大將株になって笹に短冊をつけ、提灯などもとし、歌も大黒舞だけでなく、伊勢音頭までうたうようになった。そして何

もかも簡略化して行き消滅して行くのに、こればかりは大きな組織となって子供組らしい形を整えてきた。

宮本氏の『家郷の訓』の刊行は、昭和十八年（一九四三）である。文中に出て来る藁スポからゴーレンと呼ばれる石の「亥の子」への変遷は一九〇〇年から一九一〇年頃だと考えられる。

②江戸城のへ亥の子

ここで徳川幕府の亥猪（いのこ）行事をご紹介しよう。平凡社刊の『絵本江戸風俗往来』東洋文庫50からの引用である。著者は幕末生まれの菊池貴一郎で、四代広重を称した人である。

【亥猪の御篝火・いのおんかがりび】

十月初亥の日は亥猪（げんちよ）のご祝儀とて、諸侯方暮れ六つ時（日暮れ過ぎ）前に御登城なり。故に大手御門及び桜田御門外にて大篝火を焚かれける。今日より御城中は御間毎に火鉢を出させ給う。民間に於いても同じく、当日より火鉢、ならびに炬燵を用ゆること例年違わず。さて、大手及び桜田両御門の大篝火は今宵登營の諸侯方への御馳走にて、大松薪を幾百本となく積み置きて取りくべて焚く。当御門常務の俗に

ガエンという見付の中間（ちゆうげん）多人数出でて篝を焚く。その傍には当御門固めの大名の家臣、火の元を嚴重に取り締まられ、今日日暮れより真夜中に終わる。尤も將軍家の御徒士・目付役、並びに御小人目付（おこびとめつけ）の両役人立ち合う。闇夜なるまま火煙空を焦がし、御城門の白壁紅に映じ、青松の間より焰炎（えんえん）うつり、堤下（どてした）の溝水を照らしたる光景は、昔時（むかし）軍中の夜篝と思われ、太平の世に武勇輝きたり。この日武家方には紅白の餅を諸所へ贈る。町家にも餅の贈答ありしなり。

江戸の町家の猪の子餅は牡丹餅の類であつた。幕府では登營者に白赤の餅を下賜した。なお猪の子は上亥の日だが、中亥の日も祝つた。

＊＊幕府の正式な記録からの引用ではないので幕府史料で確認しなければいけないのだが

・この日からコタツをだす。
・餅をくぼる。

という二点はご公儀のこの行事に由来すると判断できる材料である。

おわりに

越谷を起点に始まった「とうかんやのわらでつぼう」調

べであるが、「夜、藁の筒で地面を打つ」という点に注目すると、どうしても「亥の子」を視野に入れなければならなくなり、ついには韓国に近い長崎県沖の対馬に石の「亥の子」行事を確認した。これらの情報収集には写真付でホームページを開いているインターネットが便利であった。めぼしいネット情報からお願いでできる方を探し、電話や手紙でその土地の「亥の子」についての資料を送っていただきたい。写真は如実に語る。「亥の子」の名前であるが藁を使ったものを短期間で知ることができた。

故郷の大根うまさ亥子かな

正岡子規

緞子（どんす）織る機を休みて亥の子かな

高浜虚子

俳句の正岡子規と高浜虚子は共に愛媛県松山市の出身である。さて、この二人の「亥子」「亥の子」は石であろうか藁であろうか？という話で筆を置きたい。

松山市内は石の「亥の子」地帯とされているが、松山市の東南約十キロの温泉郡重信町下林は藁の「亥の子」という記録がある。

愛媛県内にも「一か月に三回あった「亥の子」のうち一回目と二回目は石で三回目のみは藁であった」という地区（温泉郡中島町大泊）もあるそうだから、子規、虚子の「亥の子」についてはご本人の記録以外には答えは出そうもない。二句の俳句を味わうのに、子供たちが群れて石でガンガン地面を搗く石の「亥の子」と、パーンパーンと一人一人が藁スポで打つ藁の「亥の子」では自然と俳句の風景も

変わってくるというものである。（もしや日替わりで二つを行つたのか？）私の「わらでつぼう」「藁スポ亥の子」の旅は中国大陸や韓国までさかのぼる稲のルーツ探しに重なるかもしれない、と思うと楽しい。

参考になる古文书史料、ご自身の体験、ご意見等を広くお待ちしております。

今はなき、大沢の浅間神社
現在の北越谷二丁目、「ドルチエ北越谷」あたりに地元の人にとつては愛着のあつた浅間神社がありました。残念ながら押し寄せる都市化の影響でビルが建ち、今では名残が全くありません。



大沢の浅間神社
今は撤去され、その名残は全くない
〔越谷ふるさと散歩(上)〕〔越谷市役所市史編さん室〕より

かつては、六月三十日には、生まれて一年たった赤子を抱いて浅間社の富士塚、いわゆる人造富士に初登山しました。また、子供の宮参りや三歳・七歳のお祝い、お嫁さんを迎えたり、お嫁に行くときも参詣しました。このように地元生活や信仰との結び付きが強かったそうです。
(加藤記)

越谷市内と関東各地における“とおかんや”の聞き取り調査

居住 地	生年	性別	かけことば	備 考
1 埼玉県越谷市三野宮	S 22	男	♪とおかんや とおかんやのわらでっぼう♪	
2 " 鷲後	S	男	"	
3 " 千間台東	S 9	男	"	目的：モグラ追い。門付けあり
4 " 大相模大成町	不明	男	思い出さず	食物：ぼたもち
5 " 大竹	S18	男	♪とおかんやのわらでっぼう もぐらもげえろも出て行け♪	目的：もぐらたたき
6 " 大竹	S10	男	"	目的：もぐら追い。食物：ぼたもち。ずいき入れず。
7 " 大竹	S 7	男	"	目的：もぐら追い。
8 " 大竹	T13	女	"	目的：もぐら追い。食物：ぼたもち。
9 " "	"	"	"	実家 岩槻市飯塚でも同様に行事あり
10 " 大竹	T13	男	"	
11 " 出羽	S14	男	"	
12 " 出羽	S12	男	思い出さず	ぼたもち・ずいきを入れる。かまっばれ（鎌おさめ）
13 埼玉県鴻巣市大門	S 7	男	♪とおかんやのわらでっぼう♪	
14 " 北埼玉郡大利根町	S10	男	"	わらでっぼうに里芋の芋がらを入れる
15 " 羽生市上岩瀬	S 6	男	"	食物：串なしのみたらし風団子
16 " 熊谷市大麻生	S16	女	♪とおかんや とおかんや 忍（おし）の鉄砲に負けるな♪	埼玉県行田の忍城と関連する伝承あり。
17 東京都足立千住	S 9	女	思い出さず	食物：餅
18 茨城県猿島郡猿島	不明	男	"	
19 " 下妻市半谷	不明	女	♪大麦小麦 三角畑のそばあたれ♪	食物：けんちん汁。うれた柿を飾る
20 " 境町稲毛	S17	男	♪とおかんやとおかんや 大麦小麦 三角畑のそばあたれ♪	栗、柿、里芋、さつま芋を飾る
21 栃木県足利市山辺	S11	女	♪とおかんやのわらでっぼう 晩飯食ってぶったたけ♪	
22 " 小山市大行寺	S 4	男	♪十五夜お月様のわらでっぼう♪	

** 聞き取りは「わらでっぼう」を幼い日に行った人・を対象にするものです。
実施日：平成 13 年

史跡めぐりの記録

第二八七回 増森・中島の石仏

記録 鈴木 進志

日時 平成十三年三月二十五日(日)

天候 曇

参加者数 五十人

案内者 加藤 幸一

当日の朝は天候が懸念された。北越谷駅からバスに乗り、松伏町の寺地で下車した。

すぐ近くの古利根川に架かる「ふれあい橋」から対岸の増林地区へ長い行列となって進んだ。橋のたもとから川沿いに、まずは勝林寺へ案内された。

寺では、越谷観音、十三仏板碑(市文化財)、庚申塔など判りやすくユーモアを交えた解説があり、それらの記念物に改めて親しみを覚えた。勝林寺のご好意で寺のネーム入りの特製せんべいが、参加者全員に配られた。

古利根川の堤防に戻り、堤防沿いに農村風景を横に見ながら、数十分間歩いた。途中、この付近の古利根川の流域や、地元の伝説、渡し場跡などの説明を受け、川の変遷ぶりに想いを馳せられた。

川から離れると、やがて宝正院に到着する。寺の来歴や石碑など説明があり、整備された境内の所々に建立している石仏・供養塔・建物などを見学する。ここでは湯茶の接待があり、小休止する。

この寺を後にして進み、民家や路端の所々にある石仏類を一つひとつ案内され、昔を語るものが幾つもあるのを知る。

まもなく薬師堂跡の増森自治会館に到着した。昼食、会計をすませ、同所の庭にある二十一仏板碑(県文化財)・石仏・庚申塔など

の解説があり、堂内から出された厨子入りの金色に輝く十一面観音を特別拝観することができた。

今回は、石仏見学のほかに、将来、この辺りの河川改修が予想されることから、古利根川と新方川や元荒川との合流地点の先端まで踏み込んで、現況を見分できたことは貴重な体験だった。

午前と午後、所々で休憩できたが、そこで地元の家主さんたちの親切なご協力はありがたく感じた。

堤防下まで降りたり、荒地地の横断など、多少煩わしい所もあったが、かえって面白い見分となった。

小雨が降り出した二時半ごろ、全員無事に最後の中島橋で解散した。地元の人のはかはバスで越谷駅へ戻った。



越谷市・勝林寺 H13・3・25

第二八八回 池上本門寺

日時 平成十三年四月八日(日)

天候 晴

参加者数 七十三人

案内者 山田 政信

前日まで続いた花冷えも一転し、今日はすっかり暖かな春の日です。本門寺・お花見史跡めぐりとあつて、集合場所には既に大勢の爽やかな顔が集まっています。私事ですが、日蓮宗は先祖の宗派でもあり興味をもって参加しました。

越谷駅から浅草経由で西馬込へ。十時過ぎには本門寺に到着です。まずここで、日蓮聖人の五百五十年遠忌を記念して建てられた宝塔の説明を、山田先生よりしていただきました。

木造宝塔としては全国で唯一の貴重な建物だそうです。想像していたより小じんまり造られていました。

霊宝殿をとり大堂に参拝したあと、松濤園を散策する。小堀遠州の設計とあつて調和のとれた素晴らしい庭園でした。手入れのゆきとどいた浅緑の木々の下をとりぬけると、西郷隆盛と勝海舟が、江戸開城を協議した「あずまや」跡に記念碑がたてられています。

本門寺公園では、花びらの散る下で春風に吹かれながら、昼食をとりました。

午後は長栄堂から、加藤清正が寄進したと伝えられる九十六段の石段(法華経に由来した別名此経難持坂)に立ち寄りしました。

墓地には昭和の英雄と記した力道山の碑とお墓がありしばし合学。本門寺五重塔は解体大修理中で、残念ながら見学できませんでした。

池上梅園は本門寺の西に位置し、丘陵斜面を利用した閑静な庭園です。この地は池上宗仲が日蓮に寄進されたといわれています。ここで休憩。都会の喧騒からのがれたひとときです。

梅の花はすっかり終わっていました。

記録 折原 烈子

入園するときに料金の関係上、六十五歳以上と以下に分かれました。六十五歳以上の方が多く、皆さま健脚で若々しく見え、驚きました。二時過ぎに今日の本門寺とお花見史跡めぐりは終わりました。都内とあつてゆとりのある行程で、桜の花も散りかけていましたが、充分お花見もでき、春の日の楽しい史跡めぐりの一日でした。ご案内ありがとうございました。



池上・本門寺 H13・4・8

生

存なら百歳過ぎている老女の話。

若かりし頃、浦和越谷線道路沿いの草木にひそんでいた追いはぎがでてこわかった事。

武運長久を願い八幡様で弓矢を射って軍人を送った話。農家の嫁の暮らしぶり等。

当時の生活をもっと聞いておくべきだったと悔やまれます。

(山口記)

第二八九回 横浜ラーメン博物館

記録 青山 栄吉

日時 平成十三年四月二十九日(日)

天候 曇

参加者数 五十九人

案内者 宮川 進

今日は朝から小雨が降り続いていたが、越谷駅を出発する八時半ごろには雨はやんでいった。行き先は横浜、それもラーメン博物館と横浜歴史博物館とおもしろい組み合わせだが、やはりラーメンに関心が集っていたようだ。配布資料にもラーメン博物館の記事が写真入りで掲載され、いやが上にもラーメンへの関心を高めた。

横浜までの交通機関は、私鉄・JRの乗り継ぎ、車内で案内者から「ラーメン博物館に入ったら、どの店に入り何を食べるか決めておくように」との案内があった。博物館に出店している九店舗のどの店の何ラーメンを注文するかだ。幸い車内は空いており、分散して座ったグループ毎にパンフレットをひろげ、店別のメニューを見ながらラーメン談義を展開し各人の注文品を決めていたようだ。

ラーメン博物館に入ったのは、十一時前だったが館内は混雑し各店舗の前には行列ができ、待ち時間は早くも十分、店によつては三十分から一時間という状況だった。このため早くラーメンにありつける行列につくしかなかった。

ラーメン博物館だからラーメンの歴史等の資料が整備されていたと思うが、食べることに気をとられ資料などを見る余裕がなかった。次に行ったのが横浜歴史博物館と同館に隣接した「大塚・歳勝土遺跡」を中心とした遺跡公園だ。横浜は貿易の拠点として繁栄しているが、弥生時代はどんな状況だったか、竪穴住居・環濠などから想像しようとしても、絵でみる程度のことしか浮かんでこない。

北条時宗のテレビドラマは、映像を通して当時の状況を知ることができるが、これらは文献等が残っているからである。



横浜市・大塚古墳 H13・4・29

古代のように出土品から生活環境等を推定するとなると、現代人の頭で考えられる構図になるのはやむを得ないと思う。しかしいろいろな想像を働かすのは楽しい。史跡巡りの日は、結構つかれるが充実した楽しい一日でもある。

第二九〇回 氷川神社(大宮)

記録 西田 彥

日時 平成十三年五月二十七日(日)

天候 雨のち曇

参加者数 五十五人

案内者 大村 進

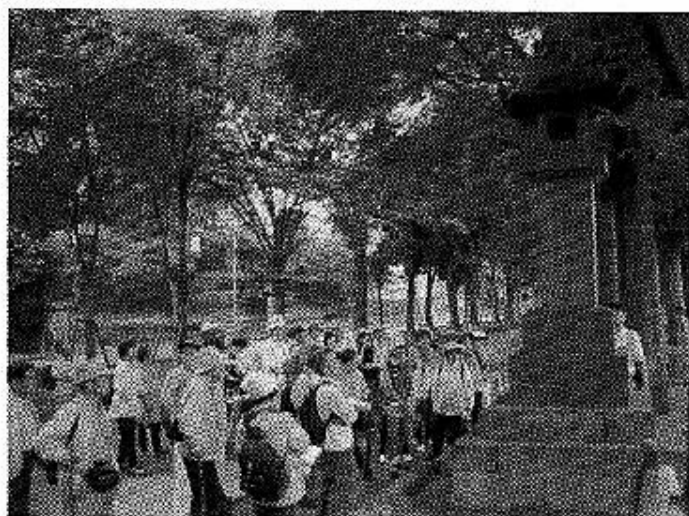
梅雨のはしりのような雨の中、南越谷駅より本日のメインテーマ氷川神社へと向かう。神社が鎮座する旧大宮市は、平成十三年五月

一日より浦和・与野市との合併により「さいたま市」として、県下の初百万都市となる。今日の史跡巡りは、この巨大都市の初代市長が選出される歴史的な日に巡り合わせた。

新都心の拠点となる「さいたま新都心駅」に降りたって驚いた。いつの間にかこのような巨大な駅が出来たのだろうか。

新駅に隣接して超高層ビルが建ち始めている。

そのエリアより数分はなれて氷川神社が鎮座する。旧中山道に面した「一の鳥居」で、木日の案内役大村先生の解説が開始された直後また驚いた。参道から次々と車が溢れるように出てきて参道が国道へのバイパス状態なのである。「一の鳥居」より「本殿」まで続く二回ほどの参道が幾重にも分断されている。先生の解説も背後を通過する車が気になり上の空だ。神々に関する説明も難解だ。



さいたま市・氷川神社 H13・5・27

「三の鳥居」より櫻門をくぐって本殿にたどり着いたところでホッととした。さすがにそこは聖域然とした佇まいを残し、幾組もの神前結婚式があつて、その記念撮影会も散見される。聖域の外壁を破壊しつつ、我々日本人はある時はご都合主義に神頼みをしている。

当会副会長鈴木秀俊氏が、祖父の奉納した額のある建物へ案内し説明を聞く。境内を出て隣接する大宮公園を散策する。

花塚、石州櫻跡、万松櫻跡といった幕末・明治の粋な雰囲気が残る遺跡を見ると、当時ここに集まった文人・墨客や政治家たちはどんなことを語り合っていたのだろうか。

午後四時を過ぎて皆さんも疲れてきた様子だ。いつも感ずるが女性の参加者が多い気がする。

当節、女性の方が行動的で活発なようだ。寿能城跡まで何とか辿り着き大村先生の解説を伺いたかったが、これは次回に期することになった。四時半、大宮公園にて解散となる。

第二九一回 寄 居（バス）

記録 鈴木タカネ

・日時 平成十三年七月十九日（木）

・天候 晴 一時にわか雨

・参加者数 五十一人

・案内者 水上 浩

バスの旅。今日こそ全部見学できると喜んで出発する。

水上先生がパンフレットを読みながら、色々詳しくお話してくださいました。私はパンフレットをまだ落ち着いて読めず、目を通すくらいだったのでわかりやすく有難かった。

やがて白色の建物が遠くからも見える。川の博物館だ。

明るくてとても綺麗、中央に大きな水車が一段と目立つ。

大人を子供にさせてしまう程、いろいろな楽しみがあり、懐かしさ

があり、一日がすぐ終わってしまいそう。周りも白く囲まれているので遠くから見る川の博物館は、大きな箱庭のように感じた。

次に鉢形城跡へと行く。行く道を境に一方は林である。倒れかかった木もなく整然と並ぶ、真っすぐ伸びた木々、気持ちが良い。

私もつられて背を伸ばす。久し振りに見る林であった。

もう片方は、城跡の周りに間隔をおいて木が植えてある。

木や土手のところに草が少々あるくらい。ゴミはない。

どのようにして整備するのか。

やがて本丸跡に着いた。一列の植樹の中に入る。土の色が違う。

少し明るい茶色だ。靴跡が付くくらい柔らかい。

あまり人が入らないのかなと思いつつ前方を見れば田山花袋の漢詩碑がたてられていた。

ここが本丸跡だ。その前より崖を下る。一列並びの木は崖の上左右ともに連なっている。ここより見上げる鉢形城どんなに素晴らしかったか。崖の下は荒川だ。子供が数人遊んでいる。ここも広く綺麗な公園になっている。毎年四月は武者行列、八月祭りは花火大会で夜を楽しむ。

正龍寺を参拝し畑道を歩く。大福御前自刃の地の記念碑へと行く。畑の中でそばまで行けず離れた所より拜む。この道は水溜まりが多く歩きにくい。

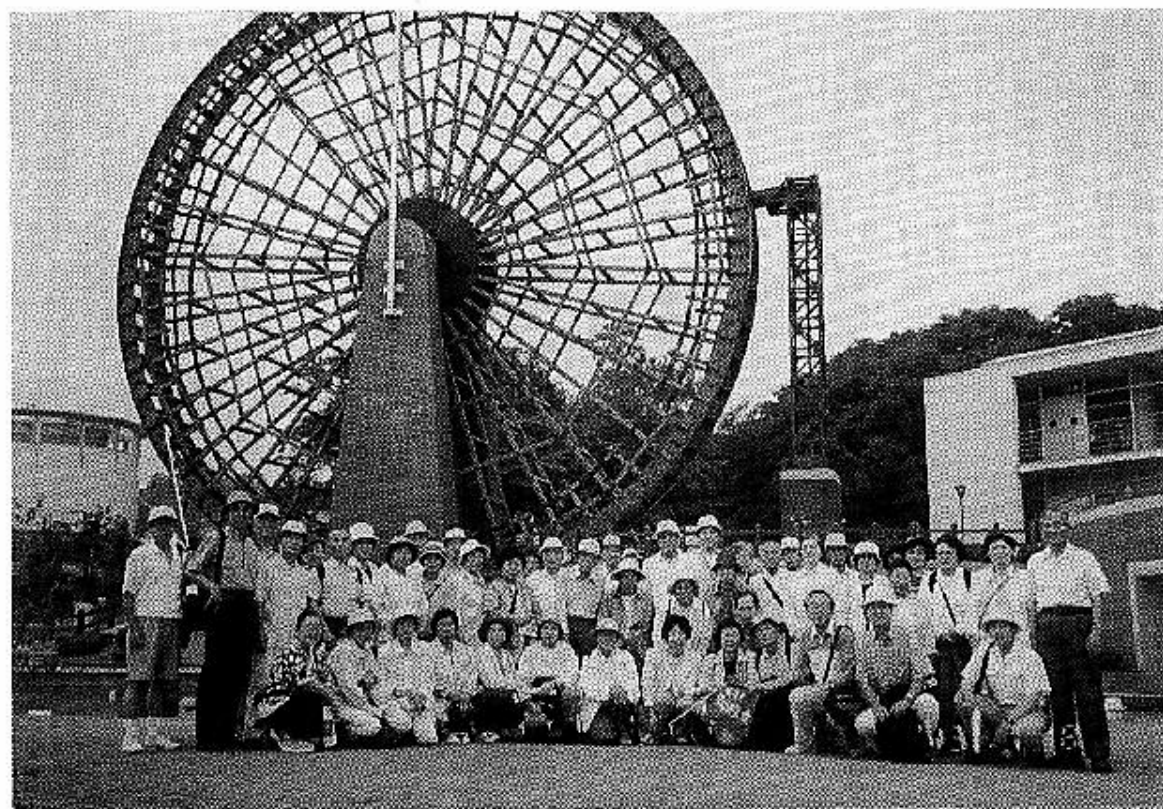
といている内に善導寺に若く、本堂は百人一首の両格天井で色も鮮やかで驚くばかりであった。

次は有名な少林寺。この寺のうしろの小高い山の頂に向かう。

道の左側に、一定の間隔でとぎれもなく五三六体の羅漢石仏が鎮座している。この羅漢の姿はすべて个性的で顔形も異なり、笑顔、温顔、怒顔、童顔などがあり、上向き、下向き、横向きなど変化にとんだ石仏群である。

羅漢のほか、山中に緑泥岩の千体荒神様の石仏九六〇体がある。

新緑に溢れる景観にひたりながら、寺院と石仏巡りは予定どおり帰りついた。引率の水上先生に感謝する。



寄居町・川の博物館 H13・7・19

第二九二回 奥州街道四百年記念心行事

(蒲生・南越谷)

日時 平成十三年九月二十四日(月)

天候 快晴

参加者数 七十八人

案内者 高橋 正澄

秋冷えの肌寒い朝、長袖に上着を用意、早めに出てきたのだが、早くも多くの参加者が集まっている。顔見知りの会員同士お互いの健康を喜び、出会えない友の安否を気づかうなど話題がつきない。「今日は半日なので会費を先に集めさせて頂きます」と堤竹さんが早速仕事に入っていた。

案内の高橋先生の先導で出発する。国道に立って茶屋通りの説明を受けながら眺めると、旧藤助河岸から三角に別れる出羽驛の流れが、はつきりと判る。東武鉄道が発展により、荷物の運送が陸に上がり、その使命は終わった。今は、悪水の排水路となっている。中尾医院の二階から顔を出されて眺めている方がいらした。

前回はご先祖の宗庵さんのお話や、中尾先生のご接待を受けたことなどを思い出しながら通りすぎる。

藤波小道具の倉庫前に、「ぎょうだい様」「おかま様」「ぎょうじや様」と地元の人が呼ぶ河童の頭のようなものが見える。風化を防ぐためか、胴体は囲われている。中に草鞋がさげられている。足が丈夫になるよう願う風習か。日光街道大修理に砂利が敷かれた記念碑である。

前回は、藤波小道具倉庫の見学できたが、残念ながら休日のような肌寒かった朝から歩いているうちに、汗がにじみ出て暑くなってきた。秋晴れの太陽を身体いっぱい受け、素晴らしい散策だ。藤波小道具倉庫前を通るころ、周りから「疲れた」と声が聞こえてきた。半日コースは、束の間を終り、新越谷駅に到着した。うしろ髪をひかれるような思いを残し、散会した。

記録 高山 はつ

第二九三回 奥州街道四百年記念心行事

(新越谷・北越谷)

日時 平成十三年十月八日(月)

天候 曇のち雨

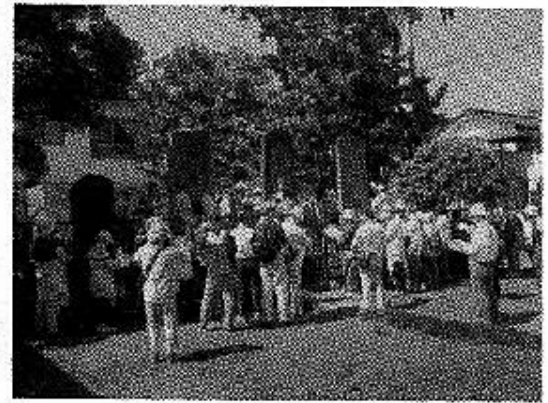
参加者数 四十四人

案内者 加藤 幸一

万天の厚い雲、正午まで降らないように祈る。車の多い街道筋を一行列で家並を見ながら北へ進む。今日の町並みは、三年ぶりの歴史ある秋祭りの翌日とあって閉店休業が多く、静まりかえっている。

賑やかな銀行通りを横断。石塚園店主より、若いころの町の様子についての話を聞く。「この町並みの後背地は水田・桑畑が分布し

記録 池田 仁



越谷市・蒲生 H13・9・24

富士山が眺望できた」とのこと。驚きの声が漏れた。
市制施行後、都市化が急速に進んだ。

古い造りの店も見られるが、多くは近代店舗に改造している。かつて買物にきた魚屋等、多くの店が商売替えをしたり、たんでしまった店もあれば、同じ暖簾にこだわり続けている店もある。時の流れが町の様相を変えていく。

さらに進む。古い郵便局や、大正時代に造立したモダンな日進銀行が当時の姿で残存しており懐かしかった。信号十字路の左の道は鳩ヶ谷街道（赤山街道）である。その出発点の角地奥に黒堀の大きな構えの有滝家があり、豪商の面影を残している。

中町の鎮守を左手奥に見る。中町から本町にかけての町並みの中に奥行の長い蔵造りの堂々とした商家、黒瓦屋根の中二階造りの商家、格子戸造りのしもたや風の構えが存在し、往年の面影を残している。その一方、空地・空家・駐車場が目につき心が痛む。尊崇を集めている市神社が本町通りに移転。

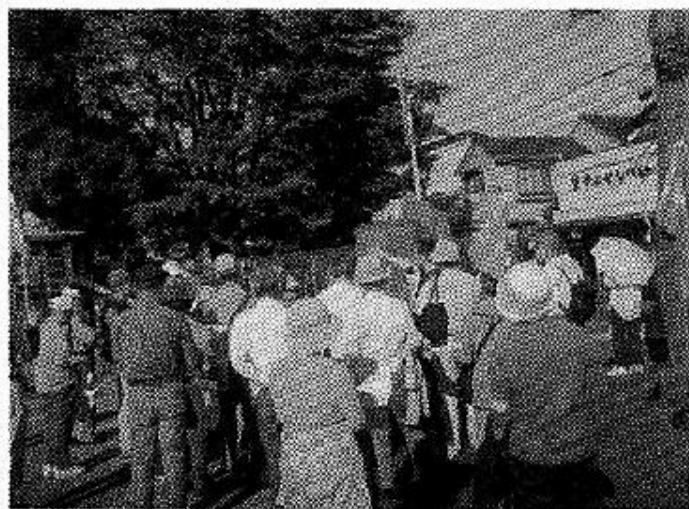
クルマ社会になり、六斎市が廃止され駅に近い銀行通りやヨーカ堂通りに人の流れが移り往時の賑やかさが無い。

息を復活させる施策が、今、求められている。

大沢橋を渡る。心配した雨つぶが落ちてきた。

最終見学地、越ヶ谷宿の歴史が所蔵されている照光院を訪ね、北越谷駅に十二時十分、全員無事到着。

見慣れた町並みを今日ほど偲びつつじっくり見たことはなかった。
加藤先生に感謝する。



越谷市・照蓮院 H13・10・8

石仏さがし

市内瓦管根一丁目、稲荷社脇の雑木立のなかから通じるべを見つけた。

高崎先生と加藤先生を現場にご案内したところ、江戸時代のもので今まで未調査だったそうです。

それ以来、この種のことに興味をもち、東越谷地区で石仏を一本見つけ、早速、加藤先生に報告しました。

友人の話では川柳地区に石仏が二体ほどあると聞きましたので、近々現地調査することにしてあります。

(増尚記)

第二九四回 目黒不動尊

記録 森田 三郎

日時 平成十三年十月二十七日(土)

天候 晴

参加者数 六十三人

案内者 菅波 昌夫

今日は参詣・行楽の地、目黒を訪ねる。

朝八時、南越谷に集合した。

天候はよかったが、武蔵野線の車両故障で、おくれで南越谷駅を出発した。約一時間半で目黒に到着した。

目黒駅より十分程歩き、白金台の豊かな自然に恵まれた旧朝香宮邸に着いた。建物と庭園があり東京都庭園美術館になっている。

イタリアの有名な画家カラヴァッジョの作品が展示されていた。

すばらしい天才画家の写実表現、生き生きした作品を見ることができた。

大円寺に向かう。

二代將軍秀忠の側室お静の方が奉納した「お静地藏」を見学し、関東三大不動の目黒不動尊に着く。

まず昼食、会計をすませて寺の見どころを回る。

独鈷の滝、前不動堂、青木昆陽の墓、本居長世の碑などを見学。

五百羅漢寺では、十五分ほどお堂にてご住職の説明があり、みな面白く耳を傾けていた。

大鳥神社前よりバスに乗り、三時頃、中目黒駅に着いた。

今日は歩いた距離は普段の史跡巡りより長かったが、天候に恵まれたこともあり予定時間どおりに終わった。

案内の菅波先生は当会の史跡めぐりは初登場だった。

参加者の拍手で中目黒駅にて散会。各自帰途につく。

第二九五回 大道遺跡

記録 中村恵美子

日時 平成十三年十月二十九日(月)

天候 晴

参加者数 四十四人

説明者 橋本充史

前日からの雨で、遺跡の見学会は危ぶまれました。今朝は薄日がさして晴れてきました。



目黒不動尊 H13・10・27

大道神社の木陰にいと、頭の上に「ぼん」と何かが当たりました。上を見るとぎっしり実をつけて熟れた銀杏でした。

銀杏を拾っていると、車や自転車でこられた方、徒歩でこられた方などで四十四人も集まりました。

「ずいぶん多く集まったなあ。資料が足りない」と予想を上回る参加者数に、役員の方がうれい悲鳴を上げておられました。

「三の宮卯之助の力石がここにありますよ」高崎先生より、足元にある「力石」の披露がありました。

いよいよ発掘現場へ。最初は神社のすぐ南の遺跡です。縦横10m、深さ50cmぐらいの遺跡は江戸時代寺院があった跡との説明。

次に西側の遺跡へ。20m四方で、深さ1mぐらい掘られた中に、六軒の住居跡が発見されました。六軒ともわずか2m四方と狭い住居です。昨日溜まった雨水をポンティアの方々が、ポンプで排水されたので住居跡に薄茶色の素焼きのような土器が、重なって掘り出されている状況がよく判りました。

一千二百年前のもの？ まさか？ ここで人が本当に生活していたのでしょうか。橋本先生の説明を受けながら参加者は釘付けになり、微動だにしません。素焼きのようなのは土師器で、濃い鼠色の硬い土器は須恵器。形が完全にちがひ土器は三個で割れた破片は仮舎に収容済みを含めると十数箱分ありました。

参加者は土器を手にとって順番に拝見しました。大きさは直径七〜八cm、厚さは5mm弱です。一千二百年前の土器を直にこの手で触れたとき、土器なのにぬくもりを感じました。

参加者の皆さんは真剣そのもので古代人の生活を思い浮かべているのでしょうか。

掃途、真っ青な秋の空、真っ白な雲。空気がいつになく透きとおっていました。



越谷市・大道遺跡 H13・10・29

第二九六回 奥州街道四百年記念旅行

(北越谷くせんげん台)

日 時 平成十三年十一月十八日(日)

天 候 晴

記録 飯塚 英志

参加者数 七十五人

案内者 高崎 力

蒲生、越谷に続く「奥州街道を歩く」三回目。北越谷駅には早くから大勢が集まる。下間久里までへの関心の大きさを示した。

高崎先生より、本日のコースと道路事情により手製のプラカードを加えての表示の説明がある。

今回の行程は比較的以前の雰囲気を残している所が多い。

期待して出発する。先生は四〇〇年前の奥州街道とそれ以前の古道を区分された。昔の人の往来を想像した。旧荒川と街道や立場の関わりあいも先生の説明により理解でき興味深かった。

先生は多くの写真を持参され昔の姿と今を比較された。

昔の御旗場(鴨の旗方まで教えて頂く)や今は平地になった大林砂丘、当時、はるか向うに東武線が見える畑ばかりだった今の住宅地など時の移り変わりを実感させていただいた。

同行のみなさんの中には自分の幼い頃はこうだったなどの話が出て感慨にひたった。

巡った道中の史跡としては他に、

一、大房栗師堂跡Ⅱ現在は私有地で伐られてしまった銀杏、榉の大樹が年輪調査で奥州街道の開通時植えられたものと判り、史跡保存に奔走される先生の嘆きに同感する。

二、越谷のダルマⅡダルマは群馬県の高崎と思っていたのが、越谷も有名だったとき、ダルマ屋のご主人から作り方を実際に見せていただいた。

三、第六天の算額Ⅱ道端に設置場所を作り、公開されているのは、

いいことだ。よく見たが内容はトンと解らない。

四、冷水の井戸Ⅱ現在お住まいの松崎氏宅では蛇口式水道に変わっている。昔、真夏の炎天下、街道を汗を拭きながら通った旅人のひとときの安らぎを想像した。

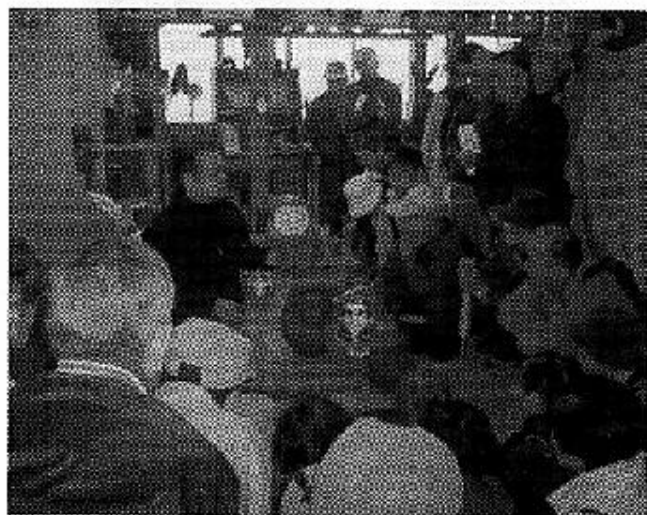
五、一里塚跡Ⅱ先生はここではないかと場所を指された。

皆さんも調べてみたらとのお話がある。

六、間久里立場Ⅱウナギ料理で名高かった秋田屋、伊勢屋の末裔のお宅に入れていただき現住の方からお話を伺った。今は廃業されている。雰囲気に残る庭や当時の食器類も見せていただき、近くを流れていた旧元荒川に沿って建つ当時の料亭の有様を偲んだ。

この立場を抜け、せんげん台駅近くで解散した。

今回「奥州街道を歩く」に三回とも完歩された三十五人に賞状がわたされ、皆さん和気あいあいのひとときだった。



越谷市・北越谷 H13・11・18

第二九七回 大 沢 地 区

・日 時 平成十三年十二月二日(日)

記録 酒井 達男

・天 候 晴

・参加者数 七十七人

・案内者 鈴木 徳治

久し振りに北越谷駅に降りたつた。

あの架橋駅が、新幹線の駅のように立派になっていたのには驚いた。当駅の歴史をふり返ると、時代・年号数の不思議さを感じる。

明治三十二年、越谷停車場として開業、その後、武州大沢駅となり、昭和三十二年、北越谷駅となる。

史跡めぐりは、まず修験道(山伏)の覚宝院(井上家)に何う。かつての越谷には十一か所の修験寺院があったが、明治の神仏分離令により廃止された。以後は苦難の道をたどって、戦後になって漸く陽の目を見ることができたとされる。ここで屋敷内の廂所を拝する。

七左町には市内唯一の修験宗祈禱寺三明院がある。

大沢の鎮守香取神社。大沢地区は戦国期に武蔵国となる前は下総国に属していた。元荒川流域の東(北)岸に鎮座する香取社二十六社のうち越谷地区には十五社が点在している。

往古の下総国の圏内なるが故なのか。

次は光明院を経て旧七ツ池をとおり照光院に若く。

ここは、一時期、本陣を勤めたとのこと。立ち並ぶ墓石の中に、越谷の文人といわれた福井猷貞の墓がある。付近にはのんびりとした気分を漂わす句碑が目につく。中の一つに「かせそよくうちハ、いらすひとねいり」と辞世句のようだが面白い。

旧日光街道に出る。越谷(大沢)宿は江戸期の参勤交代で四十家近い大名行列が往来した。このうち親しみを覚えるのは秋田佐竹侯であろう。間久里の娘はうまかったから、そこを通るたびに秋田屋

で食した。佐竹侯は江戸に参勤の際には、越谷から梅田(梅島駅前)の佐竹抱屋敷に立ち寄り、旅装を整え江戸屋敷に向かったといわれている。

本陣、逆川、鶯後と巡り、全般に内容の濃い史実を確かめることができて良かった。マイクの不調が少々残念だった。



越谷市・大沢 H13・12・2

第二九八回 谷中七福神

記録 斉藤 博道

・日時 平成十四年一月三日(木)

・天候 晴

・参加者数 一〇一人

・案内者 山田 政信

マイナス四十度の寒気団が日本列島をスッポリ覆い、大変寒い朝にもかかわらず、参加者一〇一人の一人は元気に越谷駅を出発。高架を走る電車の窓から真白く雪を頂いた秀峰富士がその全容を見せている。思わず歓声をあげたくなる。

上野公園入口の坂下で山田先生と落ち合い、「谷中七福神めぐり」が不忍池の弁天堂から始まる。

①弁天堂(弁財天) 緑・黄・白・紫の幟が正月気分を掻き立てる。

山田先生の丁寧な解説に参加者は寒さを忘れて聞き入る。

②護国院(大黒天) 上野の山を回るようにして鶴外荘、暗闇坂を経て護国院。三〇〇年前に造られた木造の大黒天は、意外にも現代的お顔で親近感が増す。

③天王寺(毘沙門天) 谷中に入ると寺院が続く。谷中霊園のいちばん奥にモダンで抽象的な形の門が見える。天王寺である。

門に立つと正面に勾配のゆるい寄棟造の屋根の本堂。

奈良秋篠寺の本堂を思わせる。

④長安寺(寿老人) 寺の境内にしては狭い。伽藍と墓がひしめき合っている。内陣中央の欄間の伊豆長八作、鏝絵がみごと。

⑤修性院(布袋尊) 「拜んでいると、思わずほほ笑んでしまう」と参拝者の声。口を大きく開けて笑いを誘うような笑顔。布袋様の不思議な容顔を見る。

⑥音雲寺(恵比寿) 歩き始めて二時間。空腹と疲れて足が重い。威厳と安定感に満ちた重層造の本堂。本堂内前面に安置された赤と緑の布を纏った恵比寿様が心を慰める。

⑦東覚寺(福祿寿) 門前の体一面に真っ赤な紙を貼られた仁王様が目を引く。本堂内陣の長い頭に金欄の冠、両手に経巻をもった福祿寿を参拝する。本堂の裏手に回ると参拝の婦人に「田端に住んでいても、こんな庭園があるとは知らなかったわ」といわせるほどの思いがけない立派な石庭がある。

十二時三十五分、万歩計で一六一〇〇歩の史跡巡りを終わる。



台東区・谷中七福神 H14・1・3

第二九九回 雑談

倉倉(長谷観音・大仏・文学館)

・日時 平成十四年二月十七日(日)

・天候 曇り後小雨

記録 古沢 孝

・参加者数 七十一人
・案内者 宮川 進

鎌倉駅より江ノ電は、民家の軒先をかすめて通り抜け極楽寺駅へ。線路に沿った坂道を登り、小橋を渡ると静寂に包まれる芽苜きの極楽寺山門。小門を入ると石畳の奥に、冬の柔らかな日差しを受けたお堂。製茶鉢、千服茶臼があり、開山忍性の貧民救済のための多くの施設があった大寺であったとのこと、今その面影はない。

大和西大寺の大きなお白茶碗の回し呑みの話、お堂の屋根の三ツ鱗の家紋、北条氏との関係面白く伺い、なかなか雰囲気となった。人家の脇道に入り七層塔の上杉憲方の墓へ。

極楽寺坂の左の長い石段を登ると、不動明王とアジサイの成就院。この石段の上が昔の切り通しとのこと。由比が浜も、眼下に広がり、鎌倉の海、山の地形は、天然の要害であったことが良くわかった。

鎌倉十井の一つ、星の井や、武勇伝が残る権五郎景正が祭られる御霊神社に参拝後、由比が浜海岸で並んで昼食。その時、トンビが急降下ご婦人が持っていた「おにぎり」をサッと失敬。

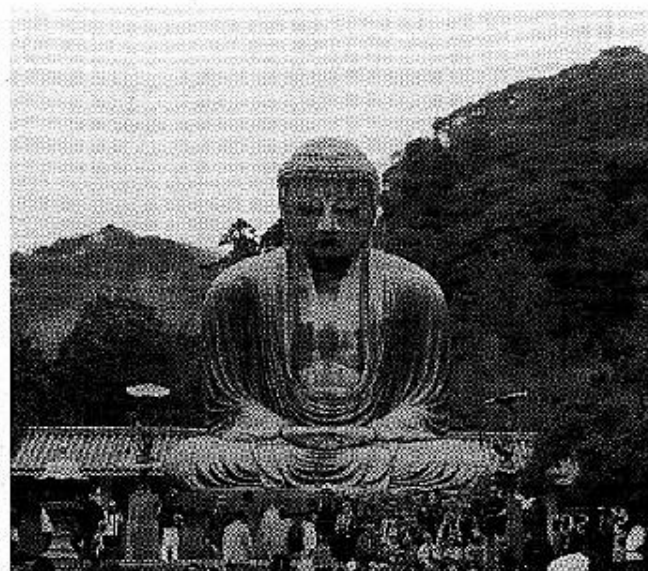
「あっ！」という出来事に皆びっくり、空にはトンビが十数匹輪をかけていた。

長谷駅前の大通りの老舗そば店を左に曲がると、木造仏では、日本最大とも言われる長谷観音、9mの巨大な十一面観音に圧倒された。大和長谷寺の縁起、宝物館の板碑（一二六一年）より越谷御殿町の板碑の方が古いとの話を伺い、にんまり。

鎌倉のシンボル大仏様へ、柔和なお顔の阿弥陀仏の鑄造方法などを伺った。少し雨がぱらつき、急ぎ足で甘縄神明社へ、大河ドラマ北条時宗の御家人安達一族の屋敷跡など良く理解できた。

鎌倉文学館へ、大正末期から別荘地、洋館がハイカラの気風を作り良好な自然環境に惹かれ文士達が住み、多くの有名作品や原稿を見てもう一つの鎌倉の素顔を発見した。

小町通り散策。集合時、手には沢山のお土産袋が見られた。宮川幹事長の博学のご案内でなかなか内に鎌倉を後にした。



鎌倉 H14・2・17

日光道中、蒲生交流館の傍らに、宝暦七年（一七五七）造立の「從此北三百間常州茨城郡大泉山勝秀寄附」と刻まれた石碑がある。

平成十四年の春、研究会同士と共に、この勝秀のふる里、岩瀬町大泉の神山家を訪れた。

現在の当主は、ぶどう園を経営している。

かつては、道路や橋など、手広く、土木業を営まれていた当地方きつての資産家だったようである。

しかし、なぜ、遠方の蒲生の日光道中改修に尽力されたかは、不明である。

（高橋正澄記）

第三〇〇回 諏訪十八社（卯之助力石を訪ねるⅡバス）

・日時 平成十四年三月二十四日（日）

記録 加藤 幸一

・天候 晴れ時々曇り

・参加者数 六十六人

・案内者 高崎 力

今回の三〇〇回記念史跡めぐりは、四十五名（大型バス一台）募集のところ、六十六名の応募となった。くじ引きは避けたいと中型バス一台を追加し全員参加していただくことにしました。

バス二台に分乗した一行は、七時四十五分に南越谷駅前を出発した。高崎先生は最初先頭的大型バスに乗り、途中で後続の中型バスに乗り換え、車中説明を続けられた。諏訪に着くと、遠い山々には残雪が見え、晴れてはいるが、さすがに空気は冷たい。

十一時だが大型車グループは、昼食場所の「うな藤」に直行し食事をする。中型車グループは、先に諏訪大社上社前宮・上社本宮を、高崎先生の説明を受けながら見学し、午後一時から「うな藤」で食事となった。「うな藤」は、名の知られた「鰻屋」であり来店客も多く時間差を設けざるを得なかった。このことは、事前にバスの中でよく説明されており混乱はなかった。

さすがに味はよく、肉厚の鰻に舌鼓を打っていた。食事中、窓の外を見ると晴天にちたつく小雪が舞う。

大型車グループも食事終了後、本宮を見学する。高崎先生は大型車グループの案内に再び本宮・前宮と行動を共にする。二台のバスを歩き来しながら説明を続ける高崎先生の知識の深さと行動力には、驚くばかりです。

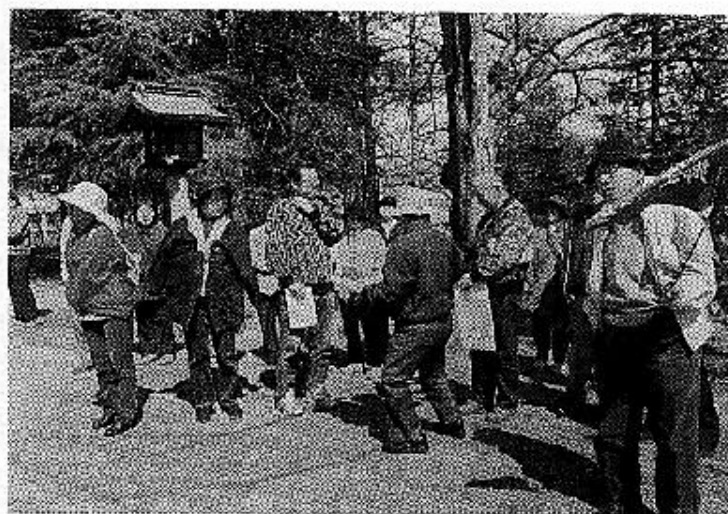
次は高島城、中型車が先に到着。ここでは染井吉野の開花はまだ。越谷では既に満開だというのに。大型車と合流し、これより行動を共にし、城内を見学する。

次は卯之助の力石がある下社秋宮へ。地元の新聞記者三社の取材を

受ける。観光協会の人もいた。今回の最大の目的である卯之助の力石に嬉しさと涙のご対面をする。下社春宮や万治の石仏にも立ち寄り、万治の石仏は奇怪。

帰りの中央道では、雪をかぶった富士山が前方に大きく見えた。六時頃、笹子トンネル手前から大渋滞に入った。大月をだいたい過ぎたころから、ようやく動きだし南越谷駅前には九時四十分に着した。体調を崩す人もなく無事長旅は終わった。

バスから降りて最後の掃めを行う。「よかった、楽しかった」との声。高崎先生はじめお世話いただいた方々に感謝して解散した。



長野県・諏訪市 H14・3・24

記録 菅波 昌夫

・日時 平成十四年四月十四日(日)

・天候 晴

・参加者数 六〇人

・案内者 山田 政信

越谷駅九時集合、今日は四の数が三つ付く日なので何か良いことがありそうな絶好の行楽日和だ。東武線浅草駅で今日の案内役の山田先生と落ち合い、浅草から都営地下鉄に乗り新橋駅で降りる。

平日なら車と人と排気の町がまるでゴーストタウンの様な静けさに驚きながら浜離宮に向って歩く。

庭園で山田先生より浜離宮についての説明があった。

説明終了後、十三時三十分現在地集合を全員に伝え自由時間となる。四〜五人のグループとなり思い思いのコースをとって庭内に散った。

最初のボタン園では、五十七種一二〇〇株もあるとされる。

花王・日暮・豊代・花姫等々の銘柄があり、赤色、ピンク、紅の花が咲き競い合っていた。

中でも白色の連鶴の前では皆さんカメラに納めていた。これだけ多くのボタンを観たのは、私は初めてでただただ驚きである。

さらに進むと潮入の池があり一〜八mの檜造りのお伝い橋を渡り、小の字島からは水面に映る中島のお茶屋の優雅さにはみごたえがあり、抹茶(和菓子付き)を飲む人の列に会員の姿もみられた。

昼食は八重桜(江戸・寒山・普賢象・単白色花などの種類あり)の満開の下で、おにぎりを食べながら持参のワンカップ酒を飲む。

食後、近くに富士見山があり、三十六段を上がり頂上に達する。昔はこの小山から富士山がみえた。この庭内に庚申堂、鴨場があり

大観、引堀などを観る。昭和十九年まで使用されていたとのことである。

庭内で眺めが最高の場所といわれる水樋の口山は、東京湾の景色が

一望できレインボーブリッジ・臨海副都心を観ることができた。私事ながら、浜離宮は五回目ですが昔のことが色々と思い出された。定時に全員集まり、会長と山田先生の挨拶があり解散となった。今日のお花見は穏やかな天候に恵まれ、楽しそうにそれぞれの思いを込めて、電車組と水上バス組に分かれ帰途についた。



浜離宮 H14・4・14

第三〇二回 石仏めぐり

(野島・三野宮・大道・大竹)

日時 平成十四年四月二十九日(月)

記録 鈴木 秀俊

天候 晴

参加者数 八十四人

案内者 加藤 幸一

越谷駅で先発、後発に分かれた一行は、静かな林の中の元の村社久伊豆神社で合流し、野島地藏尊浄山寺に向かう。

朱塗りの山門をくぐり、古寺の趣をのこす本堂に詣でる。頭上には直径六尺、重さ二百貫という大罫口がさがっていた。

本堂に上がると、住職から浄山寺の由緒や地藏信仰のお話しがあり、続いて加藤先生が、朱印状と大罫口の解説をされ、元市長島村平一郎氏の参加を紹介された。

山門を出て左折すると元荒川は近い。よい日和に恵まれ、周辺の景色を眺めながら三野宮橋を渡り、古道を行く。路傍の石仏・石塔を見ると皆さんは資料を広げ、説明を熱心に聞かれる。

近くの三之宮卯之助の生家向佐家を訪れ、貴重な版木を拝見する。庭先には、卯之助が使用したという力石があった。

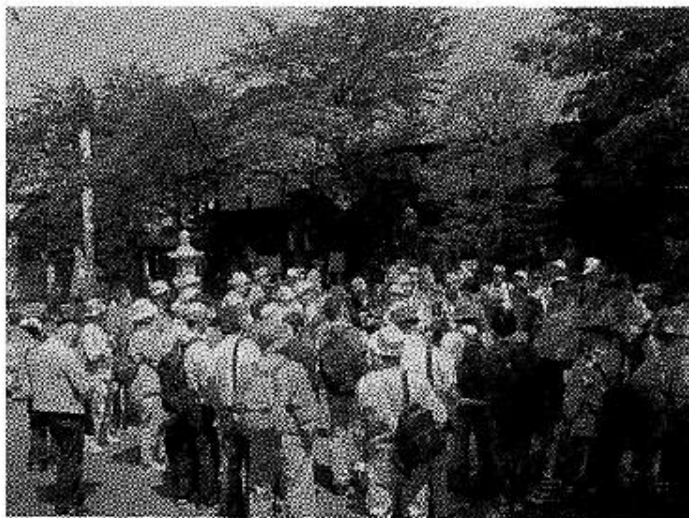
一乗院は本堂も新築して、過去の姿は境内の石仏・石塔にのみ。参道に面し、明治二十三年八月水害の際、殉職された「故埼玉県巡查田口久五郎の墓」がある。この墓を覆うように市内では珍しいムクロジの木が枝を広げていた。

大道は「七字題目板碑」を始まりに、緑濃い古道を歩く。途中に点在する石仏・石塔に、昔の人の信仰の深さを実感する。

香取神社を拝し境内で昼食。この周辺は、昨年、大道遺跡発見と話題になったところ。富士塚名残の台地に立つ「浅間神社」の碑は、山岡鉄太郎の書である。次に一行は大竹に向う。

途中、八坂神社、正福院跡を訪ね、大竹香取神社に参拝する。

東養寺に詣で、かつて境内にあった太子堂の由来を聞く。最後に向佐家を訪ね、所蔵の昭和三十六年頃の写真の説明があった。現在では想像すら難しい田園風景をよく写している。帰路、旧元荒川跡の道を歩き、大袋駅近くの公園で解散した。今回は、市西部の歴史地理を学ぶ、意義あるコースであった。



越谷市・浄山寺 H14・4・29

記録 佐藤 光夫

・日 時 平成十四年五月二十六日(日)

・天 候 晴

・参加者数 五十二人

・案内者 宮川 進

陽光の鎌倉史跡めぐりは、人気コースなので参加者が多い。

前後二回に分けて行くことになった。前半は雨で中止となったが、後半の今日は五月晴れの天気恵まれ、皆さんはうきうきしていた。

南越谷、南浦和、東京駅と電車は走り神田駅に着いたとき、車内放送があった。「品川で人が線路内に入ったので、安全が確認できるまで、電車は停車します。」とのことで電車は動かなくなった。

一分二分三分とじりじりしてきた。七分程度経過して動き出し東京駅についた。東京発の電車も時刻どおりではないが、なんとか乗車し、皆すわれて、鎌倉へと走り出した。

史跡巡りの「しおり」を見ると二十数か所もあり、すべて頭に入るかなと思った。案内する先生はなお大変だと思いつつ歩く。

最初の大功寺は安産に良いとのこと、「女性の皆さん、よくお参りしたら」との先生の声にとっと笑いあった。

日蓮辻説法、日蓮の説法は、どのような口調で？ 今の街頭演説のようかと思いつながら次へつぎへと行く。鎌倉には何寺、何社と名のある立派な寺社ばかりかと思っていたが並の寺もある。

特徴のある銅像、大きな銘木のある寺、ぼたもちを食べさせてくれるのかと思った「ぼたもち」寺、分家の大きさに比べ、元の小さい寺社などがある。前半を見学し、やっと昼食の材木座海岸に着く。強い日差しと砂浜で座る所が少ない。

午後最初に見学する光明寺の境内を借りて昼食をとる。

本堂の右横に三尊五祖の石庭や美しい庭園があった。当日は秋葉山大権現大祭で太鼓の音が境内に響いていた。太鼓の音に送られる

ように後半へと出発する。

昔におおわれた石段のある別名苔寺など、いくつかの寺社を見学する。道の横にあって人にいわれなければわからない銚子の井、日蓮乞水などを見ながら鎌倉駅に帰ってきた。

四〇分ほどの自由時間に小町通りへ散策に、おみやげ買いにと散る。集合時間に戻り帰路についた。

天気も見学場所もよかったが、今日は疲れた。



鎌倉 H14・5・26

記録 宮川 進

・日時 平成十四年九月十一日(水)

・天候 晴

・参加者数 九十八人

・案内者 秩父観光興行(株)に依頼

台風で二度も流れた史跡めぐりは初めてです。観音さまの眷族が馬であるという縁で行われる「午歳総開帳・秩父札所三十四ヶ所めぐり」に行こうという史跡めぐりの第一回目、七月十一日(水)は六号台風、十六日(火)は七号台風で駄目。ようやく迎えた今日はさすがに、よいお天気となりました。

これまでの中止にめげず、お申込みいただいた九十八人の方々は四台の中型バスに分乗し、7時30分に南越谷をスタート。

外環道を経て関越へ、高坂のSAで休憩。皆野・寄居有料道に入ると、景色は山田・秩父です。

一番札所は、秩父市内の四万部寺。札所めぐりがいよいよ始まるのです。ご案内の秩父観光の出浦さんのリードで開経偈、般若心経、一句観音経、普回向を唱えます。

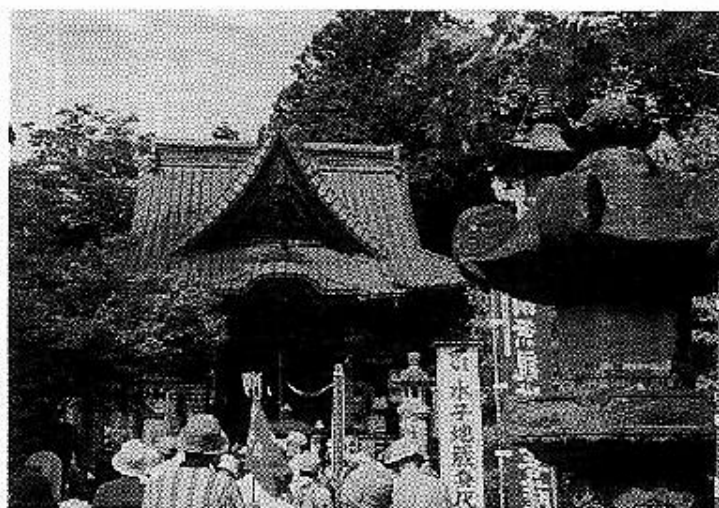
当日は、秩父鉄道と西武の午歳総開帳記念合同ハイキングも行なわれていました。四回は歩き、最後の一回だけは、バスというスケジュールのようです。

本来の巡礼姿の人たちもおられます。私たちのように一番札所だけでなく、全部の寺院で「納経」されていました。四台のバスは、二台ずつ別れたり、合流したりしながら、狭い秩父の道を回ります。

四番の金昌寺は、千三百十九体の石仏群で有名。それぞれの顔でのお出迎え。なかでも、観音堂右手の「子育て観音」は、見慣れた仏像とは全く違った、どこか西洋の彫刻のようです。

鄙びたところだけに、どんな昼食かと心配でしたが、横瀬の「天狗坂」という食堂は、岩魚の塩焼、山菜など、地元のものを使った

料理が出て、みなさんの評判もよく一安心。
午後からのコースでは「こみねもみじ」で有名な西善寺。もみじの巨樹、紅葉したら、まさに極楽浄土の世界でしょう。
つつがなく十三ヶ寺をまわって、南越谷に6時30分に着。
次の午歳総開帳も、このメンバーでまわります。



秩父①・四萬部寺 H14・9・11

第三〇五回 飛鳥・藤原京展

記録 谷岡 隆夫

日時 平成十四年九月十九日(木)
天候 晴

参加者数 二十八人

案内者 宮川 進

東京都美術館へ入る前に上野公園内の史跡見学が行われた。

西郷さんの銅像にご挨拶したあと、清水観音堂・バコダの大仏・時の鐘・お化け燈籠・上野東照宮など見所をまわる。

上野公園の見所は桜だけではない。摺鉢山古墳では小高い古墳の上へ登り、ご専門の宮川先生の詳しい説明を受ける。

ここが古墳だと皆さんは納得する。

上野公園は九月下旬なのに、もう落葉の季節だ。

作業員が忙しく手を動かしている。

お化け燈籠の下には彼岸花がきれいに咲く。

今日の目的の東京都美術館へ入る。高崎光司先生の飛鳥の講演会(平成十三年二月一〇日)やこの展覧会の事前勉強会(平成十四年九月八日)に参加し、今日の観覧を楽しみにしていた。

平日にもかかわらず館内はかなりの混雑であった。

まず、痕石の展示から始まる。次に遺跡や古墳から発掘された出土品が並ぶ。講演会や勉強会で頭に入っている飛鳥寺・石舞台古墳・酒船石古墳・石像や屋根瓦・富本銭などの展示に興奮する。

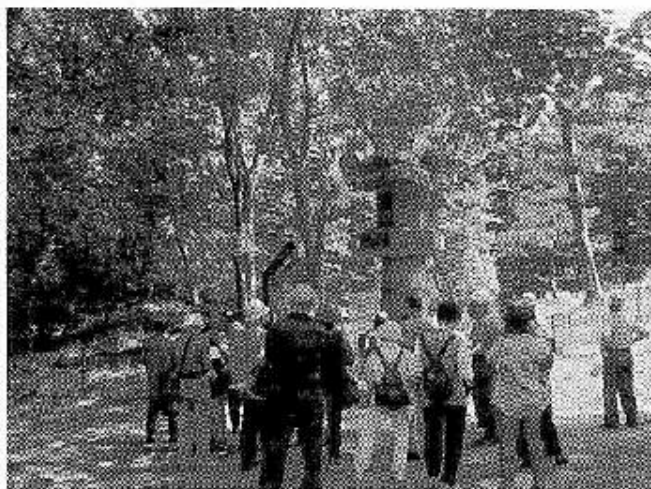
これらは見る人によってそれぞれの世界を想像されよう。

藤原京の復元千分の一の模型は人気がある。模型の前で「この道をこう行って」と友人と旅行の予定をたてている人がいた。

キトラ古墳や高松塚古墳の壁画の模写の前では、「本物が見たいね」と本音が聞こえた。

飛鳥をビデオで説明するコーナーがあったが椅子席が少なく座れなかった。ゆっくり聞けなかったのが残念だ。

観覧のあと、流れ解散となった。
美術館をでて、再び上野の秋の風光を感じながら駅にむかった。



東京都美術館 H14・9・19



第三〇六回 秩父(二)

記録 堤竹 宏吉

日時 平成十四年十月十一日(金)

天候 晴天

参加者数 九十四人

案内者 秩父観光興行(株)に依頼

秋麗の天候にも恵まれ、優雅な札所めぐりを楽しむことができました。今回から参加者からの希望もあり、札所参拝の都度、参加者全員で動行読誦(声を出してお経を読むこと)を励行することとしました。その事でびっくりしましたのは、引率役の秩父観光興行の案内人出浦さんは、全くお経を見ないで暗唱し私達の唱えをリード下さったのには驚嘆しました。以下特に印象に残った札所について景観等を述べてみたい。

●二十八番、橋立堂は武甲山の切り立った七〇m×八〇mの岩壁に覆われて抱かれています。本堂の左に鐘乳堂の入り口があり一部の方々は、入洞したが洞穴は約百数十mの長さで天井から鐘乳石が垂下し、床下は石筍が林立している。十万年以前には、原住民が、生活していたとのことでした。

●十四番、今宮坊 ここは大勢の方々がびっくりした。新聞紙大の白紙を数枚ガラス戸に張り付け左右の両手に一本づつ大きな毛筆を持ち右手は「いろはにほへと……」、左手は「よたれそつね……」と最後まで立派な書体で同時に執筆実現したのには、びっくり仰天した。作品は同行者の方にプレゼントされた様でした。

●十七番、定林寺の御堂前には県文化財の梵鐘があり、希望者には交互に打たせて頂いたが、音響が大変に鋭敏で身に染み込んできましたのは非常に印象的でした。

●十九番、龍石寺は巨大な岩石上に建立されている状況が、下方斜面の剥ぎ出された岩盤を眺めることで、はっきりと判明できました。この光景も、びっくり驚歎させられた事例の一つです。

今回の秩父札所めぐりは、秋空にも恵まれ、参加者大勢の方々の協力、ご支援により印象に残る一日でした。

そこで一句詠んでみました。

柿たわわ 札所めぐりに 和む顔



秩父②・神門寺 H14・10・11

第三〇七回 大泊

記録 増岡 武司

日時 平成十四年十月十九日(土)

天候 曇

参加者数 八十八人

案内者 高崎 力

せんげん台駅東口より郷土研究会の旗を先頭に歩くこと約十分、児童館コスモスの裏手新方川渡橋脇堤上で、高崎先生から本日のコース順と視察のポイントについて説明がありました。これを受けて参加者一同元気に出発、第一の目的地・大泊慈眼寺に向かう。今回の参加者には初参加の方もみられ、お互いに自己紹介をしなから和気あいあいに歩を進める。越谷北高校を過ぎ単調な道を二列縦隊で進み、しばらくして大泊慈眼寺に到着。

持参したボード及び写真パネルを使つての高橋先生の説明を受け、松の太木の話から、かつての境内の規模の大きさを想像しつつ観音堂の額絵馬を拝観し、次いで安国寺に向かう。

安国寺にて、慈眼寺の住職より、市指定の彫刻円空仏や念仏橋の由来などを伺い、今回は特別に円空仏と阿弥陀仏を真近かに拝観させて頂き、一同感激した次第。なお裏手の大泊陥没地跡では、大正十二年九月一日に発生した関東大震災による地震のものすごさを、今さらながら実感することができた。

次に、千任名倉の出身地名倉善兵衛屋敷跡に向かう。ここでは接骨医療に使う接骨薬を作り出した経緯について話を伺い創業者の努力を偲びつつ、旧利根川河道・会の川跡をとおり、那倉官三郎屋敷跡地に着く。明治十二年の第一回埼玉県会議員選挙で、大泊村の那倉官三郎氏が当選、これに伴う当時の県政界の内幕を聞き、政治の世界のむずかしさを感じた。

その後最終視察地、戸井橋脇にある記念碑前で、新方領耕地整理事業という明治末から大正初期にかけての大事業における地域による賛成・反対など対立する当時の人々の葛藤を知り、それが現在の市街地の基盤となる大事業であったことを伺い、先人のご苦勞を痛感した次第。

今回の史跡めぐりは、半日コースの日程ではあったが、充実した視察内容で、参加者一同「参加して良かった」と高崎先生に感謝し、次回の再会を楽しみに現地にて解散した。



越谷市・桜井地区 H14・10・19

第三〇八回 秩父(三)

・日時 平成十四年十一月十二日(火)

・天候 晴

・参加者数 九十人

・案内者 秩父観光興行(株)に依頼

気になっていた気温は十月の暖かさに戻り、期待に胸おどらせて出発した。馴染みになった景色を眺めながら秩父路へ。

武甲山や両神山の山々に冬もやがかり綺麗な山並みを眺める。

記録 西村 功

三十三番菊水寺に若く、参道入り口の寺号碑の正面は「大椽山長福寺」側面に「延命山菊水寺」とあり、長福寺は札所の変遷で移ってきた菊水寺に「廂を貸して母屋をとられた」といわれている。

三十一番観音院には、本邦第一で高さ四mの石の仁王様が迎えてくれる。葛折りの石段二百九十六段を、息をはずませ休みやすみ登る。本堂前の鐘樓で鐘を撞く。「帰りに鐘を撞いてはならない。出鐘といって出棺の合図をしたことになる」と注意書きがあった。お堂の裏は覆いかぶさるような岩壁で、崖上より落差六〇mの滝が落ち、見る者は喚声をあげていた。

昼食は近くの観音茶屋でとる。鬼ころりといわれる揚げ物に舌つづみをうち、蕎麦も満足させてくれた。

二十五番久昌寺の弁天池に立つと、お堂や木立ちと青空がくつきりと池面に映え、これを止水明鏡の心地かと、しばし眺め入った。

二十四番法泉寺の石段百十七段を登る。仁王門と本堂が一緒になり、全く気がつかない均整のとれた建物だった。



秩父③・法泉寺 H14・11・12

二十三番音楽寺は、高台にあり秩父の市街が一望できる。秩父事件にまつわる逸話の梵鐘を撞き当時を偲ぶ。

二十二番童子堂の山門は茅葺きで、愉快なお顔で大きな日を見開いた仁王像が童子堂のいわれと聞く。

結願寺三十四番水潜寺は、日本百観音霊場の砂を集めた砂踏場が設けられている。暮れかかり肌寒くなった。

なぜか厥膚さで身も心も清められた感じがした。今日は天気はよく、紅葉あり、昼食も評判よく、秩父三十四か所めぐりは無事終わることができた。

秩父観光の出浦氏の熱意ある案内に感謝する。

第三〇九回 葛飾博物館

記録 池田 仁

日時 平成十四年十二月一日(日)

天候 曇り時々小雨

参加者数 二十四人

案内者 高崎 力

本日の史跡巡りは、葛飾博物館で開催中の「鯉と鯉」の伝統文化特別展の最終日。希望者が参加、京成お花茶屋駅下車。

歩いている四ツ木通りは、江戸時代船運の盛んだった曳舟川筋を昭和になって暗渠にした。現在六百mにわたって花木等を植え、稲作り体験学習ができる小水田や空の曳舟川に巨石・船・船着場・船

運の様子を表現したレプリカ像が設置され、区民が水に親しみ憩いの場としての「曳舟川親水公園」が造成されてある。

高崎先生から、「曳舟川の由来や水運の歴史」について聞く。

博物館構内に入る。館外では、お花茶屋と文化交流を深めている茨城県谷和原村の農家の方が、終戦直後まで使用してきた足踏脱穀

機、初摺機、唐箕等を選び込み、区民に初から玄米にするまでの体験学習をしていた。会員の石渡さん、堤竹さん、加藤先生も慣れた手つきで脱穀し拍手を受けていた。

隣で子供達が真剣な顔で杵を握り、支援者の力を借りて餅をついていた。このつきたてを、きな粉餅、からみ餅にして見学者に振るまってくれた。驚くことにこの餅は、歴史的に有名な越谷特産「太郎兵衛餅」とのこと。この餅子を谷和原村の水田で稲作り体験学習として収穫した米とのこと。こしの強い粘りのある餅に、みな目を細め、越谷の誇りと感謝の念で載いた。

本日の見学メイン会場に入る。葛飾地区に棲息していた鮎や鯉をはじめ、淡水魚の習性、季節に見合った多種多様な漁獲具・漁獲法調理法が展示してある。先人が経験し改良を重ね作った伝統の宝物である。興味を持って丁寧にみる。

地理的自然的環境が似ている越谷地域のものとはほぼ同様だった。見学者が漁獲具を見て懐かしく自慢の経験談を交わしていた。

現在は残念なことに水路環境の悪化が進み、魚が激減、不健康な魚で食べられない。川に生命を甦らせ、魚の伝統文化を名実共に子孫に伝授できるようにしたい。ありがとうございます。



葛飾区・郷土と天文の博物館
H14・12・1

第三一〇回 七福神めぐり（北千住）

記録 鈴木 徳治

日時 平成十五年一月三日

天候 曇時々小雪

参加者数 七十三人

案内者 西村 功

郷土研究会新春恒例の七福神めぐりが、日取りも例年どおりの正月三日、千住宿千住七福神で行われた。

この催しの案内者は、長年山田政信先生と決まっていたが、体調を崩された由で幹事の西村功氏に替わられた。この辺りにも時の流れというか、新旧交代の新鮮さが感じられた。

千住の七福神めぐりは、七年前にも参加した馴染みのコースであるが、案内者が替わり、巡る順序を代えたとまた新しく感ずるものである。西村氏は千住大川町のご出身とのこと、地元育ちの利を生かした無駄のないコース選定に感謝します。

千住の街は、日光街道の最初の宿場町として栄えた町です。

私達の越谷とは、間に草加宿をはさんで同じ街道で結ばれた、親しみもてる町でもあります。

七福神を訪ねて巡った神社や寺、歩いた町並みの所々に立つ説明板に、宿場町四百年の残像が感じとられました。

途中から、みぞれ混じりの小雪となる寒い一日でしたが、みなさん元気に歩き通されたのは史跡めぐりで鍛えているおかげでしょう。歩いた距離も程よく、お酒とご馳走にくたびれた胃袋と身体をリフレッシュするものでした。

「来年のことを言うと鬼が笑う」といいますが、来年も生きておられて歩ける程に元気でおれたら、どこかの七福神を巡ってみたいと願っています。

日時 平成十五年二月二十三日(日)

天候 曇

参加者数 六〇人

案内者 宮川 進

あの落語で有名な「そこつもの」堀の内・お祖師様の史跡めぐり、肌寒い曇り空の下、総勢六〇人の男女が参加しました。

堀の内は初めてという方が多いようです。

何度かの電車の乗換えも、初めての場所の時は少しも苦にならず、車窓の風景に目が行く。

妻糸試験場に到着。本日の案内は宮川先生、若さ？溢れる説明にみなさん聞き入っている様子。

次は真盛寺(三井寺)ビル街の一角に広い敷地、静寂そのもの。敷地は広いが、いくつかの墓はこぢんまりとしていて後世へ質素倹約のお教えかなと考えさせられました。

次は本日最も見学したい場所のお祖師様。元和元年(一六一五)の開山、浅草の観音様と同じぐらい賑わったとのこと。

さぞや善男善女が大勢で参拝し、厄除け祈願をしたのでしよう。門内は広大な建物がいくつも建ち並んでいます。

見るものがたくさんあり、毎月二十三日は縁日が立つとのこと。もう一度、来てみたいところです。

その後、杉並区立郷土博物館を経て、善福寺川脇をとおり、宮川先生の得意分野とする松の木遺跡で食事をとる。

大宮遺跡を検証後、境内地では都内三番目に大きい大宮八幡宮を訪れました。

歴史は古く立派な大社で、門や大銀杏には驚きです。

この後、電車に乗り、井の頭公園を半周し宇賀神の説明を受けました。



北千住七福神・不動院 H15・1・3

大沢町から久伊豆神社へ行くには、地蔵橋を渡って右へ曲り、天徳寺の墓地と川の間の大木がトンネルのようになつた道を寺橋方向へ、途中、炭焼窯もありましたよ。

私の小さい時、あれはきつと久伊豆神社のおかめ市の日だったかも。

寺橋の近く、真つ暗な中に、そこだけ灯が明るく、三人の男の人がいました。

何かで囲った中に、祭壇があり、ろうそくが赤々と灯っていたのです。

祖母はおまいりし、柄杓で水を掛けました。

男の人達はお礼を言いました。後で聞いたところ「お産で亡くなった人は、汚れているので、皆に清めてもらうのだ」と教えてくれました。

(岩瀬記)

井の頭自然文化園で埼玉の川に住むムサシトミヨを見、最後に吉祥寺駅まで足をのびし、周辺の散策を楽しみ、本日の盛りたくさんの杉並の名所を訪れることができました。独りでは、なかなか行かれないであろう場所に参加できたことに感謝致します。



杉並区・松ノ木遺跡 H15・2・23

第三二二回 元荒川沿いの石仏と梅林公園

日時 平成十五年三月二日(日)

天候 晴

参加者数 五十九人

案内者 加藤 幸一

記録 鈴木 進志

参加者で満員の岩槻行きバスは、八時三十分越谷駅前を出発、約二十分で巻の上バス停にて下車する。今回は末田須賀塚から元荒川堤防沿いを下流に進みながら、近辺の史跡十数か所をめぐる。最終の北越谷駅近くの浄光寺まで約六、七kmの歩行だ。

加藤先生は、沢山の資料・写真を掲示しながら説明されたので、みなさんは理解しやすかったようだ。

ここでは特に印象に残った場所を幾つか記しておこう。

末田須賀塚近くの大戸自治会館(宝蔵院跡)には、宝蔵印塔や庚申塔、所々に神道様式の墓石もあり、これは昔の神仏混淆の証しであると教えられる。

大戸の大六天神社は魔王や天狗、葉団扇、鐘の話等ロマンがあり、社務所では縁起物も売られていた。簡素で小さな構えで魅力的な神社だ。付近に残る料理屋のメインはナマズだが、可愛いナマズの模様が堰近くに飾られていた。

神社の横から元荒川堤へ出ると程なく公園があり、看板にキタミソウ自生地との標示があった。これは今日の予定外のこと、キタミソウに詳しい会長からの解説もあって、歩いているとこんなことにも出会うものだと思なさんは喜んでいった。

末田の金剛院仁王門(像)は格式ある造りで、周囲の敷地も広く残り、昔は名刹だったようだ。

砂原地区の久伊豆神社で昼食、休憩が約一時間あった。

近くに大きな宝篋印塔があり、記されている梵字で方角が分かるらしい。再び堤防付近の史跡を何か所か案内された後、越谷梅林公園へ行った。

梅まつり中で賑わい、寒さで硬直していた体がやわらいだ。

最後の浄光寺では立派な五智如来立像五体や薬師堂の解説があった。

会長から全員無事と慰労の挨拶をもって二時四十五分解散した。強い北風で歩行は厳しかった。各所で貴重な見学ができて、有意義な史跡めぐりだった。



岩槻市・末田須賀壇 H15・3・2

ねんね河岸の河童伝説

これは古利根川に伝わる話である。
ねんね河岸の場所は、勝林寺裏手の対岸の松伏町赤岩側にある。
昔、母が子を背負ってお盆の日に里へ帰ろうとして、赤岩側から
増林側に渡ろうとした時に突然河童が現れ、この親子が深みに引
き込まれて溺れて死んだという。

ねんね河岸の語源は、子供を背負って寝んねさせて渡ったこと
からと思われる。

古利根川・中川流域の河童伝説として残っているのは珍しい。

(山本記)

・日時 平成十五年三月三十日(日)
・天候 晴
・参加者数 七十一人
・案内者 水上 清
朝は少し肌寒く感じましたが、天候にも恵まれハイキング日和。
JR南越谷駅前七時二十分集合、役員挨拶のあと南越谷駅を出発。
武蔵野線、京浜東北線、東海道線を乗り継いで、小田原駅に十時十
分に到着。「祝小田原駅新駅舎開業」の横断幕が目に入り駅の変貌
にまず驚く。

北条氏政・氏照の墓所、幸田門跡を見ながら、花見客で賑やかな
清開の桜まつり小田原城址公園に到着。花見気分を味わいながら天
守閣前に着く。城の美しさ、優雅さにしばし見とれる。

案内者の説明のち天守閣に入る。内部には歴史に関する資料が沢
山展示されており感慨ひとしおであった。

見学時間が少なく残念(知識不足は資料で勉強しよう)。

早々と次の二宮神社、御感の藤、箱根口門跡、三の丸小学校、
いろいろ本舗等の説明を聞きながら、街中を歩いて行くと景色が急
変して心やすまる様な静かな佇まいの西海子小路に出る。

十二時三十分、小田原文学館、白秋児童館に到着、静かな和洋折
衷の中庭で昼食。そして館内見学、小田原市には多くの文学者との
かわりがあったことに、珍しいというより感心させられた。

再び静かな西海子小路をとおり、大久保一族の墓地、居神社、
伝聲寺を見学しながら、城山公園に向かう途中の坂道が苦しく感じ
たが、皆さんお元気なようすでその雄脚ぶりに感心。

途中、後を振り向いて眺めた相模湾の見事な景色が疲れを忘れさせ
てくれました。今でも土塁・空堀などの遺構が部分的に残っている
ことで城郭の広さに感嘆。

一人の落伍者もなく全員小田原駅に到着。案内者の心遣いで各自おみやげタイム、あわただしく点呼、小田原駅をあとにした。JR南越谷駅に無事到着。役員方の挨拶後、次回を楽しみに解散。十九時すぎ帰宅、疲れた中にも満たされた有意義な一日でした。水上様、関係者一同、ご苦勞様ありがとうございます。

第三一四回 二 三溪園

記録 古谷 京子

日時 平成十五年四月二十七日(日)

天候 晴

参加者数 七十八人

案内者 宮川 進

春の爽やかな陽射しをうけ、南越谷駅に集合した会員の皆様は、それぞれ笑顔に輝いておりました。これから行く横浜の三溪園は、初めてですので楽しみにしておりました。

まず、園内のカレーミュージアムでの食事から始まりました。店内のインテリアやサリ姿の従業員を見ていると、行ったことはいりませんが、インドはきつとこんなムードかと想像しました。案内する先生が、昼の混雑時を避けて下さったこと、また事前に食べるものを決めていたので、参加の皆様もスムーズに注文することができました。

私は、スープカレーをいただきました。スパイスが良くきいていて、店内の雰囲気の良いこともあり、美味しくいただきました。元気が増えました。

我が家でも、このカレー味を忘れずに家族につくってあげようと思えました。参加の皆様も美味しく召し上がっておいりました。

食後、一台のバスに全員が乗って三溪園へ向かいました。

三溪園は原富太郎氏によって造られた本格的な日本庭園です。藤、さつき、姫シャガが、私達を迎えてくれました。自然の美しさと古建築が見事に調和しており、庭園を歩いてもすがすがしい気分になりました。皆様も同じような気持ちであったとおもいます。これだけの重要文化財を集め、植物も原氏自身が諸方を訪ねて集められたことです。このような貴重な財産を一般に公開してくださったことは本当に良いことだと思います。一日中歩きましたが皆様は疲れた様子もみられず、熱心に先生の説明を聞いておりました。きっと新緑の中でリフレッシュができたと思います。いつか別の季節に訪ねたい所です。



横浜・三溪園 H15・4・27

第三一五回 八王子

記録 小林 重蔵

・日時 平成十五年五月二十五日(日)

・天候 晴

・参加者数 一〇五人

・案内者 菅波 昌夫

爽やかな五月晴のもと黄色の旗を先頭に、南越谷駅から一路中央線高尾駅をめざす。

高尾駅よりおよそ十五分で最初の見学地高楽寺に到着した。

点呼を受けながら山門に入り、目当ての本堂裏の横穴石仏群に向かう。岩窟に入る前に、菅波先生が額に血を滲ませながら、狭い洞窟内の安全について身をもって生々しく訴えられる。

その後、石仏に詳しい加藤先生から洞窟内に安置されている仏像についての説明と見所のポイントを示して頂き、順次、薄暗い洞窟内を天井と足元に注意し、恐る恐る一巡する。

次の多摩陵では、菅波先生の「陵」に関する説明と加藤先生のご拝所の鳥居や土葬、火葬のお話に聞き入る。多摩陵・武威野陵拝観の後、大木の榊並木の参道を下り、陵南公園で昼食をとる。

昼休みの後、産千代稻荷神社から信松院へと向かう。

信松院本堂裏の松姫尼公のお墓にお参りする。墓所内の狭い通路に百人余が身を寄せ合いながら、松姫の波瀾に満ちた生涯についての解説に耳を傾ける。

展示室では最古の日本軍艦模型等の寺室を見学する。

室内はせまく案内者兼解説者の菅波先生は忙しい。

八王子郷土資料館では、「千人同心」に関する資料や土器に混じって発掘されたガラス片等を見学する。館内の板碑や館前の石塔、石仏について加藤先生が懇切な説明をされる。

この日の最終ポイントは、念仏院の「時の鐘」。

地元住民の熱意で太平洋戦争中の供出も免れたという。

八王子市民にとっては価値ある梵鐘とのこと。
沿線事故のため、八王子駅で三十分ほど足止めされたが、全員無事帰途につく。



八王子・多摩御陵 H15・5・25

アンケート

「子どものころの食べ物」について、会員の皆さまからアンケートをお寄せいただきました。

(順不同)

氏名	餅の形	その日		思い出の食べ物	出身地
		汁	具		
T・K	長四角	醤油	小松菜	にぎりめし くず米粉の丸餅 あられ	越谷市
M、Se ki ne	四角	醤油	大根 里芋 小松菜 烏肉	あられ 小麦まんじゅう あられ	〃
須賀 幸子	正方形	醤油	大根 里芋	あられ 玄米パン コッペパン	〃
鈴木 徳治	角	醤油	八頭 小松菜 人参 大根	さつまいも うどん粉製品 せんべい	〃
井上 富雄	丸	けんちん	里芋 人参 牛蒡 油あげ	小麦まんじゅう たい焼	〃
K・H	四角	醤油	里芋 大根 小松菜	いも あられ とうもろこし	〃
名倉三津江	四角	醤油	里芋 大根 小松菜	いも あられ とうもろこし	〃
池田 仁	長方形	すまし汁	椎茸 小松菜 大根 烏肉 他	かきもち あられ いも類	〃
関根 綾子	長方形	すまし汁	里芋 小松菜 大根 人参 他	のりまき おやき むしパン	〃
会田 俊		〇	里芋 小松菜 大根 人参 他	〇	〃
菅 清子	角	醤油	大根 人参 他	あられ さつまいも	〃
				買ったもの	
				一 鯉のたたき、天麩羅 二 埋こく 三 しら玉 一 焼きいも 二 たこ焼 三 おこのみ焼 一 ごま汁うどん 二 小麦饅頭 三 すみつかれ 一 芋田楽 二 ところてん 三 カレーライス 一 綾瀬川のしじみ 二 川魚 三 たにし いなご 一 牛なべ 二 ごじる 三 芋の煮ころがし 一 カレーライス 二 おむすび 三 すいとん 煮込ごみうどん 一 鮎玉 二 あられ 三 蒸し芋 一 かぼちゃ・なすの煮物 二 おにぎり 三 あられ	

岩井 茂	大久保 宏一	古谷 京子	F・N	T・O	星野 善吉	鈴木 政子	S・S	名倉 さわ	岩瀬 静江	A・K	古海 久代	高橋 正澄
角	四角	長方形	四角	四角	四角	四角	長方形	四角	角	丸 四角	長方形	直方体
	醤油	醤油	醤油	醤油	野菜	醤油	醤油		醤油	醤油	醤油	醤油
大根 人参 他	大根 里芋	ごぼう 大根 小松菜 人参 里芋	大根 里芋	大根 里芋	鳥肉	里芋 大根 大根 三つ葉 里芋 なんと	人参 大根	鳥肉 小松菜 大根 小松菜	大根 人参 鳥肉 小松菜	小松菜 ねぎ	大根 里芋	大根 八つ頭 小松菜
ほとんど自家製	あられ しがし もちろし 枝豆	さつまいも 小麦粉団子 さつまいも	あられ かきもち さつまいも 他	さつまいも くだもの	梨 いちじく	かき餅 枝豆 蓮の実 瓜類	あられ かき餅 炒り豆 麦しがし	あられ (もちろし・粟)	おやつ の習慣なし 空腹時は何か食す	あられ	あられ せつがち餅	あられ かきもち 小麦まんじゅう
57年前は何もない	鮎	せんべい ところてん キャンデー	羊羹	特になし	あめ玉	あめ玉	せんべい あめ玉 こんべい糖 他		パン キヤラメル ガム チョココ 他		いもあめ	キヤラメル パン せんべい どんどん焼き
一 焼餅(当家伝統の米麦を味噌で焼く)		一 具の多いすいとん 二 しょうが汁と醤油につけた鯨肉の油揚 三 小支饅頭	一 海苔まき・稲荷すし(運動会・遠足) 二 五目飯・赤飯・ぼた餅(季節の行事)	一 ぼたもち 二 あわもち 三 じゃがいもませごはん	一 さつまいも	一 煙こく 餅の塩焼き 二 ゆでた蓮の実 地蓮の甘漬け 三 とうもろこしの粉団子	一 蜜柑の缶詰 二 蜜柑の缶詰 三 蜜柑の缶詰	一 小支饅頭(山羊の乳入り) 二 小支饅頭 三 小支饅頭	一 駅弁「ベコ弁」宮城県 二 すいとん・蒸し芋、今は食べたくない 三 焼き餅 大根おろしに醤油 甘酒	一 小麦ごはん 二 菜づけ入りご飯 三 糠漬けの茄子・きゅうり	一 小麦まんじゅう 二 小麦まんじゅう 三 小麦まんじゅう	一 カレーライス 二 手打うどん 三 支那そば
春日部市	草加市	久喜市	春日部市	埼玉県	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

椎橋 昭三	内藤 拙夫	青山 榮吉	西村 功	岩沢 明	榎戸裕紀子	小原勘三郎	酒井 達男	林 和江	高山 はつ	磯谷 知子	古田 美雄	T・S
角	角	四角	長方形	長方形	長方形	四角	四角 長楕円	四角	長方形	長四角	角	長方形
醤油	すまし	味噌	白味噌	醤油	醤油	醤油	醤油	醤油	すまし汁	すまし汁	すまし汁	醤油
鳥肉 小松菜	野菜少々	鳥肉 葉野菜	鳥肉 大根 なた	鳥肉 三つ葉 里芋 大根 他	小松菜	大根 人参 ほうれんそう	主に野菜	小松菜 鳥肉	大根 小松菜	鳥肉 小松菜 なた	鳥肉 八つ頭 人参 小松菜	大根 人参 鳥肉
かき餅 いも類	蒸しさつまいも	おにぎり	もんごし さつま	お好み焼 やきそば	饅頭(芋の粉)	おやつ	梅干入り筍の皮	芋かりんとう	お好み焼き	饅頭 里いも	ふかしいも	もんじゃ焼き かるめ焼き
明治キャラメル	餅菓子 煎餅	時々、ようかん	決まった物はない	パン		おやつの習慣はない	水砂糖 そば粉	ビスケット (ときどき)	煎餅 鮎	今川焼 甘納豆	紙芝居の鮎・煎餅	
三 干し杏(七歳)	一 とうりゃん(赤飯) 戦中の工場	一 じゃがいものから揚げ (卵焼と一緒に五日ほどたべて、じんましんになった)	一 じゃがいものから揚げ	一 西瓜(千葉の農家)	一 うるち米の餅	一 小豆入りの赤いご飯(戦前、毎月一日十五日、曜日のない江戸の名残)	一 アイスクリーム	一 草もち	一 煎餅にあんこ玉をはさむ	一 栗饅頭 (茨城の疎開先で農家から買う)	一 支那そば	一 カレーライス(母の手製)
旧本郷	文京区	文京区	文京区	文京区	足立区	足立区	足立区	足立区	足立区	足立区	足立区	足立区

吉川 輝男	吉川 輝男	切り餅	すまし汁	鳥肉 三つ葉	特になし	キャラメル ドロップ	一 しゃこ井 二 深川めし	江戸川区
菅波 昌夫	角	醤油	三つ葉 椎茸 蒲鉾 鳥肉	親の目をぬすんで 砂糖をなめていた	こんぺい糖 のしいか 鮎玉	一 コロッケ 二 カレー 三 さつまいも	東京都 下谷区	
A・K	長方形	すまし汁	大根 人参 里辛	さつまいも	お刺身(えび・さざえ・鯛・まぐろ) お寿司(魚・鯛のでんぶ) 煮魚(特にかわはぎ)	世田谷区		
山口美津江	四角	すまし汁	大根 人参 里辛 菜っ葉	かりん糖 パン 饅頭(さつま餡)	一 精進あげ 二 コッペパン	千葉県		
木原 徹也	四角	醤油	小松菜	煎餅	一 かわいのしんによ 二 かやく漬け 三 栗ごはん	野田市		
佐竹 春江	切り餅	すまし汁	鳥肉 里辛 小松菜	蜜豆 おはぎ あび餅 かき餅	一 オムライス(必ず注文した) 二 ホットケーキ(匂いとバターと蜜) 三 サンドウィッチ(大船駅の駅弁)	横浜市		
水上 清	長方形	すまし汁	小松菜 蒲鉾 花がとお	芋団子 ふかし芋 とうもろこし	一 焼芋 二 コッペパン 三 そばがき 四 かるめ焼 五 さつま芋あんの鯛焼	鎌倉市		
M・K	長方形	醤油	長葱 大根 人参	じゃが芋 さつま 芋 かぼちゃ	かりん糖 こんぺ い糖 乾燥芋	栃木県		
堤竹 宏吉	長方形	醤油	大根 人参 鳥肉 三つ葉	あられ ふかし芋 かるめ	一 しもつかれ 二 華餅(きな粉をつける)	栃木県		
中沢 桂子	角	醤油	自家製野菜	西瓜 瓜 柿 芋 饅頭 唐もろこし	一 とろろかけご飯 二 お赤飯 三 のつべい汁	栃木県 大田原市		
岡田 和子	長方形	すまし汁	人参 大根 ゆず 小松菜	ドーナッツ	一 森永キャラメル 明治チョコ(遠足) 二 ロールキャラベツ(母の手作り) 三 塩むすび(白米)	足利市		
根岸松日出	長方形	味噌	里辛 人参 ごぼう 葱	さつま芋 じゃが芋	一 にぼすと(煮ほうとう?) 二 うどん 三 西瓜 瓜 トマト	群馬県 田定		
佐藤 昌之	角	醤油	鳥肉 三つ葉 ほうれんそう	じじ焼	一 すいとん 二 大根めし 三 ぼたもち	前橋市		

瀬下さつき	四角	醤油	大根 人参 里芋	ふかし芋	鮎煎餅	一 小麦粉を練ってゆでる。砂糖をからませる。 二 カレー 三 鯉 どじょう 二 かつおの荒汁	茨城県 大宮町
村瀬美代子	正方形	すまし汁	葱 蒲鉾 油揚げ	お好み焼	蜜柑 キヤラメル	一 祝い菓子(あんこが一杯つまった) 二 魚類 三 かき水	茨城県
F・A	四角	醤油	白菜 大根 他 大根 ごぼう	ま芋 葡萄 柿	めぐねのあんぱん	一 もちあられ 二 しんごろう 三 ささまき(笹に包んで田伊裏で焼く)	常陸太田市
	ちぎる	味噌	大根 里芋	栗 大豆 小豆入り団子	身欠き煉	一 草餅(よもぎ入り) 二 桃(隣部落へ盗りに行く) 三 とうもろこし粉のパン	福島県 南会津市
小林 重蔵	「長いもの」で、そば・素麺を食べる ぞうにを食べる習慣はない			おにぎり (味噌・塩)	あめ玉	一 栗ごはん 二 ずんだ餅 三 いちじくの甘露煮	喜多方市
大竹 秀夫	丸	醤油	大根 人参 里芋 青菜	餅せんべい こがし	鮎	一 味噌おにぎり 二 きゅうり 三 身欠き煉	会津若松市
ろく	四角	醤油	大根 人参 鳥肉 葱	おやき	菓子パン 身欠き煉	一 味噌おにぎり 二 きゅうり 三 身欠き煉	宮城県 白石市
三原 紀子	長方形	醤油	大根 鳥肉 他 肉 ごぼう	味噌おにぎり 笹巻き トマト	ぼん煎餅	一 雑煮(つきたての餅) 二 煙のうま煮 三 さくらんぼ	山形県 米沢市
新野トモ子	長方形	醤油	鳥肉 葱 鳥肉 ごぼう	団子 じゃが芋	和菓子 カステラ	一 ちんすこう 二 洋なし 三 りんご	長野県 長野市
高橋 幸広	四角	醤油	鳥肉 人参 椎茸 せり 他	おはぎ ベこ餅 じゃが芋の餅	アイスガム	一 ちらし寿司(魚貝類入り) 二 パン(自家製パン焼き機) 三 じゃが芋・かぼちゃの塩ゆで	北海道
小杉 勝義	四角	すまし汁	大根 人参 みだくさん	おやき 饅頭	鮎玉	一 ぶた汁 二 汁粉 三 すきやき	札幌市
斎藤 弘義	角	塩鯉	大根 人参	瓜類 甘藷		一 ぼたもち 二 笹ずし 三 ちまき	上砂川町
堀川 静二	長方形	醤油	里芋 油揚げ こんにゃく	とうもろこし		一 笹団子 二 ちまき 三 のっぺい	新潟県 新井市
鈴木タカネ	長方形	味噌 醤油	鳥肉 油揚げ 里芋 大根 他	落雁 羊羹 甘酒 ふかし芋 他	梨 桃 蜜柑 ナナ 煎餅	二 のっぺい 三 もずく	高田市

宮川 ユミ子	岩根 富子	日・日	山梨 隆司	市川 巳隆		福谷 洋一	谷岡 隆夫	宮川 進	古沢 孝	匿名
長方形	四角	長方形	四角	四角	四角	丸・切餅	丸	角	切り餅	丸
醤油	すまし汁	味噌	すまし汁	醤油	醤油	白味噌 すまし汁	醤油	味噌	味噌	白味噌
ぜんまい 山筍 油揚げ 大根 人参 蒲鉾	大根 小松菜 大根 人参	柿 枇杷 芋切干し りんご 柿 ぐみ 葡萄 南京豆 他	人参 ごぼう 白菜	正月菜 蒲鉾	大根 人参 鳥肉 昆布 他	鳥肉 人参 三つ葉	人参 大根 里芋 ほうれんそう	八つ頭 人参 ねぎ	八つ頭 人参 ねぎ	大根 ごぼう
柏餅 ふかし芋 あられ かき餅 いり豆	特になし 小麦粉饅頭 ふかし芋	小麥粉に葱を入れ て焼く	餅 果物 野菜	鮎 カルメラ ホットケーキ 他	お好み焼	ぜんざい ホットケーキ	かきもち あられ ふかしもち 炒粉 炒空豆 柿	ぼたもち さつまいも	なし	
なし	アイスキャンデー	げんこつ玉 酢こんぶ	コッペパン	おかき 昆布 するめ	アイスキャンデー	するめ アイスキャンデー につき棒	煎餅 鮎玉 キャラメル (森永 グリコ)	キャラメル 鮎 カルメラ ポップコーン	なし	
一 押し寿司(笹を敷く) 二 自家製の柏餅・ちまき 三 自家製のえご・ところてん	一 自家製のうどんとかぼちゃのほうとう 二 自家製のえご・ところてん 三 すいとん	一 朝鮮漬け 二 身欠き練の甘辛煮 三 貝ひもの佃煮	一 桑の実 二 やき餅 三 10円のおんパン	一 麦ご飯(麦四・米六) 二 芋ご飯(芋のなかに米を入れる) 三 団子汁(小麦粉団子を汁で煮る)	一 キャンデー 二 田舎ういろ ふかしパン 三 あん巻	一 わらび餅 二 カルメラ焼き 三 ニッキ とうきび 岩おこし 他	一 雑炊 二 コッペパン 三 さつま芋のつる	一 練パン (戦後、空腹時でも食べられるもので はなかつた)	一 いさざと大豆の煮物 二 かぼちゃの煮物 三 ふな焼	一 バナナ 二 アイススクリーム 三 水あめ
新潟県 上越市	長岡市	山梨県 榑形町	静岡市	長野県 中野市	愛知県 宝飯郡 御津町	岡崎市	大阪市	滋賀県 近江八幡市	日野町	京都府

峰 孝久	M・Y	新居 佳雄	金岡由紀子	田中悠紀男	藤川 吉洋	佐々木義隆	殿山 悦三	有元 淳子	H・I
丸	丸	丸	丸 あん入り	丸	丸	丸	丸	丸	丸
花鯉 昆布	すまし	味噌	白味噌	醤油	すまし	醤油	すまし	すまし汁	白味噌
里芋 蒲鉾 白菜	里芋 人參?	里芋 人參 蒲鉾 ねぎ	ねぎ 大根・人參の輪切(家族円漕)	鯉節 かもこのり	人參 あなご 大根	かき 鳥肉 大根 人參	人參 里芋	塩の寒ぶり さっぱり野菜	大根 里芋 人參
蒸しさつまいも	ふかしいも おにぎり	ゆでたさつま芋	ドーナッツ ホットケーキ	かりん糖 花餅 おはぎ	さつまいも (ふかし・干し)		ながしやき	余った干し飯を炒 って砂糖をつける	かきもち いりまめ
グリコキャラメル	いも飴	飴 するめいか	アイスキャンデー 不二家のミルク	米菓子 アイスキャンデー	かりん糖 キャラメル		キャラメル	大福 カステラ (裁ち落とし)	
三 だんご餅	一 とうもろこし(裏庭の畑 甘い味)	一 五目寿司 押し寿司 巻寿司 二 果物(西瓜 瓜) 三 かき氷 蒲鉾	一 醤油豆(さぬき郷土料理) 二 さわらのみそ漬 三 うどん	一 だんご 二 笹巻(ちまき) 三 ふかしいも	一 すいとん 二 いも粥(さつまいも入りのお粥)	一 正月の餅 かき餅 二 ばらざし	一 手打ちそば 二 手打ちうどん 三 いも粥	一 おからの炒り煮(いか、野菜入り) 二 竈で炭をつかって炊くご飯 三 竈で棚がらで炊くご飯(義母)	一 松茸のすきやき(我が家の松茸山) 二 関東煮(中学校の学食) 三 さくら(小学校の運動会)
長崎県	佐賀県	徳島県	坂出市	香川県 松江市	島根県 呉市	広島県 広島市	広島県 広島市	広島県 庄原町	奈良県

役員アンケート

「興味のあること」について、役員アンケートをあつめました。

(原文のまま)

役職	氏名	興味のあること
会長	谷岡 隆夫	郵便局のスタンプラリーにすっかりはまっています。ぶらり旅の行くさきさきで、旅行貯金をして、通帳にその局の記念捺印してもらいます。二十年の間で東京都内二十三区にある一〇五〇局は全部まわりました。現在、二十三区以外の都市や近県の地図とにらめっこをしながら郵便局のスタンプ数をのばしています。
副会長	加藤 幸一	当然ながら私たちが住んでいる国や地元の歴史に興味があります。昔は本当はどうだったのかを知りたいのです。その気持ちが興味を抱かせるのです。歴史から教訓を学びとろうなんてあまり考えていません。自分の都合にあうように歴史を歪曲せず、ただ真実を知りたいのです。
幹事長	宮川 進	今の価値観や生活習慣、文化、宗教、主義主張などの尺度でとらえるのではなく、あくまでもその時代の尺度に合わせて客観的にとらえるべきだと思っています。
常任幹事	堤竹 宏吉	興味があるのは、越谷市郷土研究会が、今後、どのように発展してゆくかということ。会員数は「高齢化社会」のもとにますます増えることでしょう。その会員の方々の力を結集して、「歴史」の面白さを周囲に伝えてゆきたい……。そのための方法としては、何があるのか、それによって何ができるのか。趣味としての「郷土研究」「歴史愛好」「歴史探求」を続けながら、社会貢献との関連を考える団体でありたいと思うのです。
		私どもの自治会では、ほぼ一年前に念願の自治会館を落成しました。会員の皆様は、非常に熱心に種々の文化活動の会場として連日に亘り有効利用しております。その恩恵に預かりまして日頃興味のある囲碁の会、カラオケの会、体操教室等に参加しまして楽しい人生を謳歌しております。

西村 功

読書、若い頃は小説であれば手当たり次第に読んでいた。

通勤時はスポーツ紙、それが何時の間にか文庫本に変わり、時代小説となっていた。

次第に特定作家に限る様になり、山手樹一郎から始まり、山本周五郎、司馬遼太郎、

藤沢周平、池波正太郎、隆慶一郎と読み続けたが、皆故人となられ、淋しくなったが、

平岩弓枝、白石一郎、津本陽、佐藤雅美、宮城谷昌光等の人たちが活躍しているので、今も

って文庫本が新しく出るのを心待ちにしている昨今です。

常任理事

山口美津江

四十年位前より 現存している城めぐりをしたいと思っているものなかなか実現しない
有様です（いくつかは見学しています）還暦をすごした今、年に一か所位 城めぐりに挑戦
したいと心掛けて 生きて行きたいと思えます

林 和江

春日部に越して来て約20年、早いものです。電車の中から見る北越谷の桜堤のそばを流れる
川はあとで元荒川と知り、川の多い所と思いました。

ふとした事で郷土研究会を知り、史跡めぐりに参加する様になりました。私の小さな旅の始
まりです。ご案内の方の説明がわかりやすく、見落とした所があると、もう一度資料を片手
に歩いて見ます。また新しい感動！中央市民会館から見た景色、西に富士東に筑波山、四季
折々の美しさこの景色の変化を楽しみに、毎月市民会館に通っています。

盆栽は日本の伝統技術で今ではBONSAIは世界の共通語になっている。

盆栽との出会いは同じ職場の非常勤のお年寄りから「盆栽をはじめたら」と勧められ、「退
職したら」というと「20代から始めて植物の生態や成長を覚え、素材が仕上がるのが定年ぐ
らいでしょう」「欺れたと思ってやったら」とのことで苗木を鉢植えし長年手入れし定年退
職頃に程度いい仕上がりになっていました。

但し目下手入れの暇なし。うらめしい。

佐藤 光夫

IT?市の講習が有ってからパソコンをどうしようかと迷いに迷っていたが、子供が贈って
はくれたのだから、パソコンは難しいと頭から思っているからかも知れないが、何処から手
つけたらいいのかと悩みながら、どうにかセットして操作して見たが、やはりどこをどうし

小原勲三郎

したら良いのか分からない試行錯誤やってみたが、やはり良く分からない、
そこで基本操作だけを教わりに行ってきた、何とか少し出来るようになり、やっているうちにだんだん面白くなってきて、そのうちにホームページでも作ろうか？ 思案中です
樋口一葉。

中学生のころ作品にふれてより、心のなかに一葉が住みはじめた。以来、遺された日記や書簡から、一葉の軌跡を追いつづけている。漱石も鷗外も書けなかった明治を描いた一葉。東京の片隅に生きる庶民を写し、独自の文学の世界をひらいた。

一葉の住んだ本郷菊坂町・丸山福山町は、小宅に近く、しばしば訪ねあつた。

色濃い明治の面影が、昭和十年代までのこつていた。あのあたりで、駒下駄をはき路地から足早に出てくる一葉に、いま、出会うような気がする。

教職を去って十余年、今でも、かつて、子供らが所々で示してくれた、喜びや笑顔は忘れることができない。「やったー」「できたー」「わかったー」「そうだったのか」などと、大声と共に示す満面の笑顔は魅力的である。この子供らの喜びを求めて、今年も三回ほど、授業に挑戦した。大人の世界では見られない、生々しい子供らの魂に触れられたのは有難いことである。

好奇心旺盛で欲張りなせいか様々なことに興味を持っている。

その中からベスト3を挙げてみる。

(1) 日本史学習……史跡めぐり、歴史講座など。新しい発見や学習があり楽しい。

(2) ハイキング……なんとと言っても四季折々の自然と一汗かいた後の爽快さがよい。

(3) パソコン……特にインターネットによる検索。調べものに変便利で重宝する。

愛犬に死なれて、朝晩の散歩をしなくなったので、富士山や、星座さがしも、御無沙汰しています。晴れた寒い日の楽しみに、田んぼや駐車場に通いました。

南の空にオリオンの三ツ星を探し、リゲル、赤いペテルギウスとそれからこ犬、おお犬座の冬の大三角形、ふたご座、おうし座スバル等。今は、街灯のない暗い路地を探すと、

理 事 高橋 正澄

水上 清

岩瀬 静江

鈴木 徳治

首の痛みに苦勞します。

若い頃からボイスカウト運動に関わり、気が付いたら地域で最古参になっていました。70歳を期に役職を退きましたが、死ぬまでお付き合いは続くだろうと思えます。

退職してから13年、其の間に車は4台目です。北海道 本州 四国 九州の海岸線をほぼ完走しました。お前のは旅ではない、油をまき散らしてただ走るだけだ、と酷評もされますが、これからも走り続け、轍を全国各地に印たいものと願っています。

写真の作品作りは、見ることに、感じることに、考えることに、それを光と陰で表現すること、写真の世界を知ること、奥技が深く、むつかしく大変興味を持って居ります。

カメラを持つと何げなく過ごしていた時間が充実したひとときに変り、何よりまわりのすべてが、より深く、より面白く、より美しく、自己の純粋な感動をカメラを通して表現、観る人にそれを感じてもらえる作品を作りたいと取組んで居ります。

①県内に限らず、各種の展示会（歴史、郷土、古墳、美術）の観賞。特に県内の郷土博物館（資料館）約50ヶ所の中、今年は10ヶ所見学の目標を立て、合せて30ヶ所としたい。

②現在の興味 1日1回は、長山洋子、桂銀淑、テレサ・テンの音楽を、聞く事、と月1回は、草加シネマ・サンシャインで、映画観賞をする事。

③現在のお願い 毎回、同じ事乍ら、越谷市に1日も早い博物館（資料館）の出来る事。趣味（ちぎり絵）

越谷市在住の岩崎ちづ子先生から手ほどきを受け、ちぎり絵をはじめて5年、最近ではむずかしい課題にも挑戦出来るようになり、来る平成15年10月には横浜レンガ倉庫美術展示室で仲間と作品展を開催する手筈でおります。

若い頃友達に誘われて、邦楽を習う事になって知らなかった事でしたので心引かれました。続けたかったのですが結婚、子育て、再就職等と気ぜわしく胸の奥に引掛かりながらも時間が過ぎてしまいましたが、それでも端唄の会、歌舞伎、芝居等、見ると三味線の音が胸に響きます。やぶれた三味線を見て悲しくなりやっぱ好きだったんだナと思えました。

磯谷 知子

増岡 武司

菅波 昌夫

古沢 孝

”	”	実行委員
古谷 京子	青山 栄吉	小林 重蔵
<p>40年前より仲間と年に数回山行きをしております。その時に出会える自然や、植物がうれしく、花の名前や、鳥の名前などビジターセンターで調べたりしています。</p> <p>これからも自然や環境を勉強して行こうと思っております。</p>	<p>1、映画、戦争もの（邦画・洋画とも）を見ること。戦いの勝ち負けだけでなく、死と背中合せに置かれた人間の行動は、予想外の結果をもたらすことがある。</p> <p>「全滅寸前の部隊の生還」など、この種のドラマシーンには感動させられる。</p> <p>フィクション部分が相当あったとしても。</p> <p>2、「火事場のばか力」と云われる人間の力は、日頃蓄積された知識や経験などが、大きな力になることも確かだと感じている。</p>	<p>今年になって師匠が越谷端唄の会を開く事になってそのお手伝いが少し出来てうれしく思いました。</p> <p>これからも何かとか、わりながら年を経てもポツポツとけいこを続けて、いきたいと思っています。</p> <p>「六阿弥陀詣」とは「寛政以降、江戸に盛んとなり、のちに諸方でも行われた。</p> <p>……彼岸の寺参りが遊楽コースに編成されたもの」のようであり、「新六阿弥陀」の「新」は江戸の「六阿弥陀」に倣って設けた意味と解釈。越谷市内の相当する寺院境内にある巡拝石碑の側面に刻まれた建立年が何れも「天明八年」となっていて、越谷宿及びその周辺では江戸にさきがけて「新六阿弥陀詣」が行われていたことになる。</p> <p>当時の越谷宿の文化水準や経済力を覗うことのできる証の一つでは？ 石碑・扁額以外「新六阿弥陀」を伝える記録のようなものはないかと密かに物色しているところ。乞御教示。</p>

越谷市郷土研究会 史跡めぐり

回数	実施年月日	行先	案内者
287	平成13年3月25日	増林・中島地区の石仏めぐり	加藤幸一
288	4月8日	池上本門寺	山田政信
289	4月29日	ラーメン博物館・横浜市立博物館	宮川 進
290	5月27日	大宮氷川神社	大村 進
291	7月19日	(バス) 寄居 さいたま川の博物館	水上 清
292	9月24日	街道記念 蒲生～南越谷	高橋正澄
293	10月8日	街道記念 南越谷～北越谷 第一班	加藤幸一
	10月13日	街道記念 南越谷～北越谷 第二班	加藤幸一
294	10月27日	東京都庭園美術館・目黒不動尊	菅波昌夫
295	10月29日	大道遺跡	橋本充史
296	11月18日	街道記念 北越谷～せんげん台	高崎 力
297	12月2日	街道記念 大沢宿	鈴木徳治
298	平成14年1月3日	谷中七福神めぐり	山田政信
299	2月17日	鎌倉 長谷周辺	宮川 進
300	3月24日	(バス) 300回記念 諏訪 卯之助力石	高崎 力
301	4月14日	浜離宮	山田政信
302	4月29日	野島・三野宮・大道・大竹の石仏めぐり	加藤幸一
303	5月26日	鎌倉 材木座・大町周辺	宮川 進
304	9月11日	(バス) 秩父札所めぐり 一回目	
305	9月19日	東京都美術館 飛鳥・藤原京展	宮川 進
306	10月11日	(バス) 秩父札所めぐり 二回目	
307	10月19日	桜井地区・安国寺円空仏ほか	高崎 力
308	11月12日	(バス) 秩父札所めぐり 三回目	
309	12月1日	葛飾区郷土と天文の博物館	高崎 力
310	平成15年1月3日	北千住七福神めぐり	西村 功
311	2月23日	杉並妙法寺・大宮八幡宮・井の頭公園	宮川 進
312	3月2日	元荒川沿いの石仏と梅林公園	加藤幸一
313	3月30日	小田原城	水上 清
314	4月27日	横浜三溪園とカレーミュージアム	宮川 進
315	5月25日	八王子 天皇陵ほか	菅波昌夫

越谷市郷土研究会 展示出品リスト

回数	出品年月	出品作品名	出品者
第 27 回 (市民祭)	平成 13 年 9 月	1) 間久里のウナギは旨かった? 2) 砂利道供養塔(蒲生一丁目)	高崎 力 高橋正澄
第 33 回 (文化祭)	平成 13 年 11 月	1) 旧大沢町・越ヶ谷町の石仏 2) 越谷の とうかんや 3) 前波神社のクンチ太鼓 4) 国防献金感謝状と動員兵士の写真 5) 蒲生一丁目の神明社 6) 大沢の地藏橋地藏尊 7) 天嶽寺の稚児行列 8) 増林の茶の栽培	加藤幸一 金岡由紀子 鈴木進志 高橋 清 高橋正澄 中山公三 平井五六 山本泰秀
(芸術祭)	平成 14 年 3 月	1) 大道遺跡 平成十三年の発掘 2) 大道遺跡 婦命院の跡	宮川 進 加藤幸一
第 28 回 (市民祭)	平成 14 年 10 月	1) 戦後の中学校の田植実習 2) 烏八臼の石仏	高崎 力 加藤幸一
第 34 回 (文化祭)	平成 14 年 11 月	1) 荻島地区の江戸時代の石仏 2) 大吉の徳蔵寺と筆子中 3) とうかんやのわらでっぼう 4) 越谷市内の寺院の梵鐘 5) 蒲生尋常小学校の幻の応援歌 6) 昔の大竹地域の田園風景 7) 新町の八幡神社由緒 8) 増林の古代蓮	加藤幸一 鈴木進志 金岡由紀子 菅波昌夫 高橋正澄 谷岡隆夫 水上 清 山本泰秀
(芸術祭)	平成 15 年 3 月	1) 長島村の高札 2) 清浄院の開山塚の板碑 3) フルーツパーラー千疋屋のルーツ	谷岡隆夫 加藤幸一 増岡武司

越谷市郷土研究会 研究発表会・歴史講座

回数	実施年月日	テ ー マ	発表者
129	平成 13 年 6 月 24 日	越谷市・資料館都市構想	宮川 進
130	8 月 26 日	奥州街道400年記念 奥州道中の成立	本間清利
歴史講座	12 月 16 日	七福神について 事前勉強会	山田政信
131	平成 14 年 1 月 20 日	越谷出身の力士・行司群像	高崎 力
132	6 月 30 日	平田篤胤と越ヶ谷出身の妻・おりせ	佐藤久夫
133	8 月 24 日	県東部を中心とした埼玉の仏像	林 宏一
歴史講座	9 月 8 日	飛鳥・藤原京展 事前勉強会	高崎光司
134	平成 15 年 1 月 26 日	越谷周辺の諸巡礼	高崎 力

会 員 名 簿

平成15年3月31日現在

No.	氏 名	No.	氏 名	No.	氏 名	No.	氏 名
1	会 田 清	41	内 田 栄 子	81	木 村 恵美子	121	重 田 美 明
2	会 田 俊	42	内 村 江	82	工 藤 さだ子	122	篠 進
3	青 木 勝 子	43	漆 田 佳 子	83	工 藤 松四郎	123	篠 田 敏 夫
4	青 木 泰 英	44	榎 戸 裕紀子	84	倉 持 唯枝子	124	篠 原 陸 郎
5	青 木 豊 子	45	榎 本 東 史	85	栗 田 勝 行	125	洪 谷 正 芳
6	青 山 栄 吉	46	大 川 昌 三	86	小 泉 平八郎	126	島 田 ユキ子
7	秋 元 ふ く	47	大久保 宏 一	87	小 島 久 枝	127	新 戸 婦 美 子
8	穴 澤 英 文	48	大久保 照 子	88	小 島 誠	128	管 清 子
9	阿 部 緑	49	大 熊 秋 雄	89	小 杉 勝 義	129	須 賀 弘
10	新 井 良 夫	50	大 熊 弥 平	90	小 林 清 子	130	須 賀 慶 子
11	有 元 淳 子	51	大 滝 耐 子	91	小 林 幸 子	131	須 賀 幸 子
12	一 色 英 子	52	大 竹 秀 夫	92	小 林 重 蔵	132	菅 波 昌 夫
13	飯 塚 英 志	53	大 塚 節 子	93	小 林 登	133	杉 浦 健 之
14	池 田 敦 子	54	大 西 チ エ	94	小 林 秀 男	134	杉 田 サトミ
15	池 田 仁	55	岡 田 和 子	95	小 林 ま つ	135	鈴 木 和 雄
16	伊 沢 茂	56	岡 山 エミ子	96	小 林 光 男	136	鈴 木 一 子
17	石 川 辰三郎	57	小 川 隆 雄	97	小 山 淳 子	137	鈴 木 作之助
18	石 崎 一 宏	58	小 関 テ ル	98	近 藤 ユキ子	138	鈴 木 進 志
19	石 塚 陳 正	59	小 野 暎 子	99	後 藤 千代子	139	鈴 木 千也子
20	石 鍋 隆 子	60	小 原 勘三郎	100	斉 木 一 征	140	鈴 木 タカネ
21	石 渡 ミ チ	61	折 原 烈 子	101	斉 藤 登	141	鈴 木 種 雄
22	泉 雅 彦	62	柿 沼 孝 行	102	斎 藤 欣 一	142	鈴 木 徳 治
23	和 泉 守	63	片 桐 薫	103	斎 藤 友 子	143	鈴 木 英 男
24	磯 谷 知 子	64	加 藤 幸 一	104	斎 藤 博 道	144	鈴 木 秀 俊
25	市 川 巳 隆	65	加 藤 サイ子	105	斎 藤 弘 義	145	鈴 木 政 子
26	一 安 タミ子	66	加 藤 富士代	106	酒 井 達 男	146	須 藤 清 人
27	伊 藤 貴 美	67	金 岡 由紀子	107	坂 本 弘 子	147	関 根 綾 子
28	伊 藤 靖 二	68	金 子 寛	108	佐久間 サワ	148	関 根 正 直
29	伊 藤 ユ キ	69	金 子 久美子	109	佐々木 一 磨	149	瀬 下 さつき
30	稲 垣 和 子	70	上 郷 以満子	110	佐々木 忠 雄	150	仙 波 好 江
31	井 上 瑳久江	71	亀 田 すみ子	111	佐々木 東 助	151	染 谷 耕 司
32	井 上 富 雄	72	川 上 金 蔵	112	佐々木 義 隆	152	染 谷 勇 蔵
33	井 上 陽 子	73	川 添 ハルミ	113	佐 竹 春 江	153	染 谷 高 行
34	岩 井 茂	74	川 田 佐一郎	114	佐 藤 和 江	154	染 谷 政之助
35	岩 沢 明	75	川 津 正 行	115	佐 藤 滋 子	155	染 谷 雪 子
36	岩 瀬 静 江	76	川 原 実	116	佐 藤 昌 之	156	高 崎 力
37	岩 根 富 子	77	菅 野 トミ江	117	佐 藤 光 夫	157	高 橋 清
38	上 野 和 子	78	木 崎 キ ン	118	佐 山 静 枝	158	高 橋 幸 廣
39	宇佐見 武 雄	79	木 島 明 子	119	澤 元 絹 代	159	高 橋 正 澄
40	宇田川 正 治	80	木 原 徹 也	120	椎 橋 昭 三	160	高 橋 と き

No.	氏名	No.	氏名	No.	氏名	No.	氏名
161	高橋良暢	201	名倉功	241	古田美雄	281	山崎孝二
162	高山はつ	202	名倉さわ	242	古谷京子	282	山崎洋子
163	高山良一	203	名倉三津枝	243	星川泰子	283	山下三枝
164	竹内美津子	204	南雲ハルエ	244	星野昭江	284	山田稔
165	武田和枝	205	並木栄子	245	星野善吉	285	山田順子
166	竹谷フミ子	206	成田チイ子	246	堀井和由	286	山田政信
167	田島絹代	207	成瀬潔	247	堀井博之	287	山田万里子
168	田中きく江	208	新野トモ子	248	堀川静二	288	山梨隆司
169	田中悠紀男	209	新居佳雄	249	本間清利	289	山本鉄也
170	谷岡隆夫	210	西川信徹	250	前田時子	290	山本泰秀
171	台実	211	西川峰雄	251	蒔田美恵子	291	横川静江
172	千葉富久子	212	西沢許女	252	正岡実子	292	吉川輝男
173	塚本礼子	213	西田烝	253	増岡武司	293	若松清一
174	堤竹宏吉	214	西村功	254	松浦節也	294	渡辺和照
175	堤原保貞	215	沼倉セツ	255	松沢開作	295	渡辺紀子
176	津山正幹	216	根岸松日出	256	松澤長次郎	296	渡辺ふき子
177	照井春吉	217	野口康子	257	松橋良子	297	渡辺美智子
178	伝谷恵重	218	野口祐許	258	三上久子	298	渡部義男
179	殿山悦三	219	野沢福司	259	水上清	299	渡部勝代
180	都丸桂子	220	野沢陽子	260	峰孝久	300	渡部テフ
181	豊田重	221	野村勝八	261	箕輪桑三郎	301	和田敏道
182	豊田裕	222	橋本和雄	262	三原紀子	計301人	
183	内藤拙夫	223	長谷川久一	263	宮内和代		
184	内藤録次	224	長谷川正巳	264	宮川ユミ子		
185	中川雄一郎	225	林和江	265	宮川進		
186	中澤桂子	226	林知子	266	村上かつ子		
187	中沢正夫	227	林佳子	267	村上フサ子		
188	中島栄子	228	原島明	268	村瀬美代子		
189	中島キヨ子	229	原田熊蔵	269	最上忠二		
190	中村隆子	230	原田民自	270	最上みち子		
191	中村恵美子	231	針田尚之	271	森田三郎		
192	中村和代	232	東泉寿男	272	森中重樹		
193	中村幸夫	233	平井五六	273	森屋英龍		
194	中村修平	234	平田博子	274	矢口博孝		
195	中村哲士	235	福谷洋一	275	安田守		
196	中村春子	236	藤井忠徳	276	柳田明雄		
197	中村律子	237	藤川由洋	277	籾高道		
198	永井勇雄	238	古怒田潔	278	山口文子		
199	長瀬由木夫	239	古海久代	279	山口美津江		
200	長野いつ	240	古澤孝	280	山崎和子		

越谷市郷土研究会 役員 平成15年度～16年度

常任顧問	小島 誠		
会 長	谷岡隆夫		
副 会 長	加藤幸一		
常任理事	小原勲三郎 高崎 力 林 和江	佐藤光夫 高橋正澄 水上 清	鈴木種雄 野村勝八 山口美津江
理 事	青山栄吉 岩瀬静江 鈴木徳治 古谷京子	池田 仁 小林重蔵 鈴木秀俊 増岡武司	磯谷知子 菅波昌夫 古澤 孝 森田三郎
幹 事 長	宮川 進		
常任幹事	堤竹宏吉		
幹 事	西村 功		
監 事	関根正直	堀川静二	
実行委員	飯塚英志 小川隆雄 小泉平八郎 椎橋昭三 田中悠紀雄 原田民自 藪 高道	伊藤靖二 柿沼孝行 小林光男 須賀 弘 永井勇雄 東泉寿男 渡辺和照	大久保宏一 川津正行 佐々木義隆 高山良一 西田 丞 藤川吉洋
会 友	会田 俊	木原徹也	本間清利

越 谷 市 文 化 連 盟

常任理事	谷岡隆夫		
理 事	宮川 進		
代 議 員	鈴木種雄	堤竹宏吉	山口美津江
展示委員	小原勲三郎	加藤幸一	鈴木種雄

越谷市郷土研究会 会則

第四章 役員及び職員

第七條 本会に左の役員を置く。

第一章 総則

第一條 本会は越谷市郷土研究会と称する。

第二條 本会の事務所は幹事宅に置く。

第三條 本会は市内の郷土研究者の連絡をはかり、郷土史料の調査研究を目的とする。

第二章 事業

第四條 本会は第三條の目的を達成するため左の事業を行なう。

一、郷土史研究の連絡とその啓発。

二、郷土文化財保存の協力。

三、機関誌の発行。

四、その他、本会の目的達成上、必要な事項。

第三章 会員および会友

第五條 会員は本会の趣旨に賛同するものを以てする。

会友は本会に三十年以上在籍する会員の中より会長が指名し、理事会の承認を得る。

ただし、役員は会友とならない。

会友が役員となつた場合、役員在任期間は会友たる身分を停止する。

会友は第六條に定める会費納入の義務を免れるが、会員と同じ権利及び義務を有するものとする。

第六條 会員は会費として、毎年度初めに金二千円を納入する。

第八條

会長は会務を総理し、本会を代表する。
副会長は会長を補佐し、会長事故あるときこれに代わる。

一名

副会長 二名

常任理事 若干名

理事 若干名

幹事長 一名

常任幹事 若干名

幹事 一名

監事 二名

常任顧問 若干名

顧問 若干名

会長、副会長は理事会の推薦とする。

常任理事は理事会に於いて、理事の中から選任する。

理事は総会に於いて、会員の中から選任する。

幹事長、常任幹事及び幹事は会長が委嘱し、理事会の承認を得る。

監事は理事会で推薦し、会長が委嘱する。

常任顧問は本会に対し、特に功績があつた会員の中から理事会が推薦し、会長が委嘱する。

顧問は理事会で推薦し、会長が委嘱する。

会長は会務を総理し、本会を代表する。

常任理事は常任理事会を組織し、会務を審議する。
理事は理事会を組織し、会務の執行に当たる。

幹事長は庶務会計に従事し、これを統括する。

常任幹事は庶務会計に従事し、これを管理する。

幹事は庶務会計に従事する。

監事は会計を監査する。

常任顧問は理事会に出席し、その諮問に応じる。

顧問は重要な会務につき会長の諮問に応じる。

第九条 役員任期は二ケ年として再任を妨げない。

第五章 会 議

第十条 会議を分かつて総会、理事会、常任理事会とする。

第十一条 理事会、常任理事会は必要の都度、会長が招集する。

第十二条 総会は毎年一回、会長が招集する。

第十三条 本会の会議は出席者の過半数をもって議決する。

第六章 会 計

第十四条 本会の経費は会費、寄付金及び雑収入をこれに充てる。

第十五条 本会の会計年度は、毎年四月一日から始まり三月三十一日に終わる。

附 則

1. 本会の会則の変更は、総会の議決によるものとする。

2. 本会施行のため必要な規定は、会長が別に定める。

3. 本会則の施行は、昭和四十年二月二十七日とする。

改訂 昭和五二・五・二二 平成三・六・三〇

平成六・六・二六 平成一二・六・二五

会報「古志賀谷」掲載基準

会報掲載の混乱・異同をさけるため、基準を設ける。

一 会員・会員外原稿をうけつける。

原稿は、越谷につながるものとする。

二 原稿の字数は次の各号とする。

(ア) 調査・研究の記録は、字数制限はしない。

(イ) 紀行・随筆は、二千字程度とする。

三次の各号に該当する原稿は編集委員会で掲載の可否を審議する。

(ア) 特定の政治的主張、または政党勢力拡大を内容とする原稿。

(イ) 特定の宗教を流布し、または勧誘する内容を含む原稿。

(ウ) 営利を目的とする内容を含む原稿。

(エ) 差別の内容を含む原稿。

(オ) 戦争賛美を内容とする原稿。

(カ) 他人への中傷を内容とする原稿。

(キ) その他、特定の意図を含む原稿、または穏当を欠く原稿。

四 第三者の調査・研究・報告・書籍を引用または転用するときは原則として著者名・書名・出版社名・出版年度を明記する。

五 会員名簿は、氏名のみを掲載する。

個人情報保護のため、住所・電話番号は掲載しない。

六 本基準の変更は、総会の議決を経るものとする。

付則 本基準の施行は、平成十四年六月三〇日とする。

